
死霊はおよめさん

ししとう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死霊はおよめさん

【Nコード】

N7078G

【作者名】

ししとう

【あらすじ】

可愛いけど勘違いが多く嫉妬深い死霊の少女アリスと、流されやすいへたれな高校生、さいころつかいの青鬼彰のふたりが贈るラブコメディー！

プロローグ 幼き日の約束

深く暗い森の中。

その暗がりの中に小さな少女の姿が見えた。

「……………」

まずは長く綺麗な黄金の髪が。木々に劣ることのない鮮やかさ。続けて白い端正な顔。

ほっそりと華奢な体には青く染まったワンピースに身を包んだ少女の姿が。

外見年齢は十四、十五歳ぐらいの少女なのだが、いくつもの修羅場を乗り越えたことのあるような貫禄が少女を大人びせる。

しかしどこか生真面目そうな様子が大人びた雰囲気よりも幼さを強調させる。

「……………」

清澄とした幼い少女の声。懇願した願いが叶ったような嬉しくも、夢心地な声。

蒼く深く輝くラピスラズリのような瞳。その瞳で空を見上げる。

「私も……………」

たおやかな指に小さく光るシルバーリングに少女は接吻を交わす。

「この証はきつと、私の宝物」

聖域のような森の中に雑音が広がっていく。殺気を放ち、何かを探している者たちの汚い雑音が聖域を汚す。

「見つけたぞ！ 死霊アリス！」

十人ほどの男が少女を囲む。その手に剣や弓などを持ち、少女を殺そうとする意思が見える。

少女は静止したまま動かない。そして男たちに目をやる。そして笑う。

「違う……………」

男たちは身構えた。いつでも飛びかかれるように。

「違う……私は“ヒト”。アリス」

刹那の出来事。

少女の周りには動かなくなり赤く染まった男たちの姿。

「……いや、今は……そう」

少女は無表情に顔を上げる。黒い空を仰ぐ。月が笑っているようだ。

柔らかな声が空気を震わす。

「私は……ただのアリス」

頬に飛んだ小さな濁点のような赤い汁を少女は幼くも妖艶な舌で舐め取る。

くしゃくしゃになった小さな紙切れを取り出す少女。紙切れには黄色いクレヨンで大きく汚い文字が書かれていた。

“ぼくのおよめさん”

「そしてただの……お嫁さん」

第1話 可愛い死霊がやってきた！

山奥に隠れた大きな屋敷の一室から少年の叫び声が木霊する。

柔道の稽古部屋のような塵ひとつ落ちていない三十畳以上の大きな部屋。

「痛つてー！」

床の畳に叩きつけられるようにぐったりとうつ伏せに倒れこんでいる少年。ぼさっとした茶髪が更に乱れている。その上には無然としたまま少年に座り込んでいる青く長い髪を後ろで結っている青年がいた。

着物の袂を押さえながら苦笑を浮かべる青年。

「まったく、あいかかわらずですね。坊ちゃん」

「坊ちゃんは止める、あとどけ」

少年に言われるままに青年は少年の上から立ち上がる。すらりと長い等身に汗一つかいていない清潔感溢れる端正な顔立ち。清涼な蒼衣着物に身を包んだ青年の頭には人間にはあるべきではない山羊の角のようなものが生えていた。

「お前が強いんだよ、瞬鬼」

瞬鬼と呼ばれた青年は大きく息を吐いた。そして首を横に振る。

「いいえ。坊ちゃんはお強いです。それは春さまが一番よく知っております」

杖をついた老婆が瞬鬼の影から現れた。

「まったく、瞬鬼の言う通りじゃ」

「婆ちゃん」

呆れるように大きく息を吐く春。

「お前はこの青鬼家をつぐたつたひとりの人間なのじゃぞ？ 分かつておるのか？ 彰よ」

彰と呼ばれた少年はぶすつとした表情になる。

「俺は俺の生きたいように生きる。それが俺だって」

再びため息を吐く春。それと同時に瞬鬼が頷くと、彰の後ろに瞬鬼が回りこむと、

「失礼」

「へ？ って……」

彰の腕を取るとその腕を曲がらないほうへと曲げる。その激痛が鈍く彰の体を走る。

「痛たたたた！！ ギブギブ！」

タツプをすると瞬鬼は彰の腕から手を離す。痛みだけが走るように綺麗な関節技は瞬鬼の得意技だ。昔から彰はよく間接技を決められていた。

「いい加減にせんか！ いい加減この中から鬼を選ぶのじゃ！」

春が何十枚もある写真を彰に叩きつけた。その中に写っている人物は男女が入り混じった写真なのだが、その全員の頭をよく見ると頭に角が生えている。

その写真を彰が見ると、彰の体に寒気が走る。

「嫌だ！ 俺は鬼が苦手なんだ！」

「鬼が苦手な青鬼家の人間がいるか！」

ふたりが言い争っている中、瞬鬼は小さく息を吐いた。

「困ったものですね」

「まったくお前は青鬼家の人間がどうい^{なりわい}う生業をしてきたのか知らんのか？」

「知ってるよ。鬼を従えて、人に害をなす^{じんがい}人外のものを駆除するんだろ？ 何万回も聞かされたよ」

青鬼家は何百年も続く人外駆除をしてきた家業。その手段が人間と契約を交わした鬼を従えるというもの。

瞬鬼が首を傾げながら彰に尋ねる。

「そもそもどうして鬼が苦手なのですか？」

その質問に彰はわなわなと震える。

「何でかって？ お前のせいだろ、お前の！ お前が事あることに俺に間接技を決めるから鬼が怖くて仕方ないんだよ！」

びしつと立てられた指を見ながら瞬鬼が口を押さえながら笑う。

「ふむ、困ったものですね」

「笑うな！」

くすくすと笑っていた瞬鬼だったが急に顔が強張った。

「春さま」

「ふむ」

春も小さく頷くと瞬鬼の影の中に消えていく。

「どうしたんだ、瞬鬼」

「侵入者です。鬼門きもんからですね」

青鬼家にある鬼門は鬼と契約を交わすための扉。その扉からたまに人外のものが侵入することがある。まさに今がその状況だ。

「今はありえないのですが」

「どういうことだ？」

「坊ちゃんが契約をするためですよ。そのためには誰にも邪魔をされるわけにはまいりません。そのために鍵をかけておいたのです」
顔が強張る瞬鬼。こんなに顔が怖い瞬鬼を見るのは久しぶりだった。十年近くこんな顔を見たことがなかった。

暗がりの中現れたものは、どんなに恐ろしいものかと思ったが目の前に現れたものは、

「お、女の子？」

小さな女の子だった。

幼げな少女だった。青い服がひらりと風に舞う。風が少女を賞賛しているようだ。

舞ったスカートの下から少女の白磁のような柔肌が見える。

次に目がいくのは幼い未成熟な胸。

長く伸びた黄金の髪。

そしてなによりも目を奪われるのはその瞳。

ラピスラズリの中に光が射したように輝くその瞳を見ていると思わず息を呑む。

呆気にとられている彰だったが、瞬鬼の顔はいまだに強張ったま

まだ。

一歩、一歩、踏みしめるように女の子が近づいてくる。一歩女の子が歩くだけで空気が震えるようだ。

それだけの威圧感をこの小さな女の子は持っていた。

「やっと……」

初めに少女がぼそつと呟いた言葉は感触を確かめるように無表情に、

「会えた」

次の言葉はその感触が現実のものであるのを理解して感傷に浸るように物悲しく、

「……シヨウ」

そして喜びに満ちる声。震えた声は優しげに、そして少女は蒼く輝くラピスラズリのような瞳で彰を見つめ、彰に飛び掛る。抱きしめる。

「シヨウ！」

いきなりの出来事に瞬鬼も驚いていたが、特に驚いていたのが彰本人である。驚いた表情のまま動くことが出来ない。

「は？」

困惑の表情。顔は赤面したままだ。こういうのに慣れていないのがすぐに分かる。

「シヨウ、シヨウ、シヨウ！」

何度も名前を呼ばれ、彰は首を大きく横に振り我に返る。

「えつと……誰？」

歓喜のあまり興奮していた少女だったが水を打ったようにしんと少女が静止した。その顔に憤りの念を浮かべて。

その恐怖に彰は体が凍る。

わなわなと少女の体が震える。

左手を大きく掲げた。その手に光るシルバーリング。

「バカー！」

貫くような平手打ち。少女の指に光るシルバーリングが思い出さ

せてくれた。
少女の正体を

「痛ってー!」

十年前のこの日も彰の叫び声が屋敷の中に木霊していた。
涙を浮かべながら傷を摩る青鬼彰。このとき五歳。

おやおやと瞬鬼が笑みを浮かべる。

「どうしました坊ちゃん？ 涙が出ておりますよ？」

うすら笑う瞬鬼に彰は怒りよりも先に寒気を感じた。どうしてそんなに嬉しそうなんだと。

彰は急いで涙をごしごしと拭う。

「泣いてない!」

「ふふっ……結構」

そんな彰を眺めながら、瞬鬼は口を押さえながら笑いを堪える。
しかし瞬鬼が笑いを堪えているのを幼い彰にもすぐに分かり、赤くなつた目で瞬鬼を睨む。

睨まれた瞬鬼は困つたような表情を浮かべる。

「そんな怖い顔をしないでください坊ちゃん。私が悪かったですから」

「瞬鬼のそういうところ嫌いだ」

ぷいっとそっぽを向く彰に瞬鬼は再び笑う。

「おやおや困りましたね。……春さま」

瞬鬼の影からぬつと着物の上に黒い袴を羽織つた春が現れた。春は持っていた杖で、彰の頭を軽くこずく。

「いつまで拗ねておるのじゃ」

「痛っ!」

叩かれた箇所を摩りながら涙ぐむ彰。

大きく息を吐きながら春が袴の袂を押さえながらゆっくりと彰の前に座る。

春はゆっくりと彰の頭を大きくも暖かいしわくちやの手で、彰の

頭を撫でた。

「お前は強い子じゃ。それは私と瞬鬼がよく分かっておる」
顔を伏せたまま、

「……うん」

小さく頷いた。

その様子を見ながら瞬鬼が先ほどとは違う優しげな笑みを浮かべる。

「ふふつ、まだまだ甘えたい年頃なのですね、坊ちゃんは」

「よしつ、気晴らしに散歩にでも行くか？」

と、春。

それに頷く彰。

屋敷から少し離れた森の中を歩く三人。

鳥も虫も木も花も、すべてが息づいている青鬼家の森。聖域のようにも感じる森は彰にとっては家よりも落ち着く場所だった。

くるくると回りながら景色を堪能している彰。

それを見ながら鳥が笑うように囀る。その歌が彰の気持ちを楽しませる。

「ふん、ふん」

鳥たちに応えるように彰も鼻で歌を奏でる。

本当に楽しそうにしている彰に春や瞬鬼は親子のように微笑む。

「あいかかわらずここがお好きですね、坊ちゃん」

「落ち着くから」

「そうですね」

しばらく歩いていると鬼門の前を通りかかった。

鬼門の近くの茂みに何かがあった。小さな何かが見えた。

「ん？ 何だ？」

彰がその影に恐る恐る近づく。

「う……」

「女の子？」

傷だらけで倒れている女の子がいた。

柔らかそうな肌も真っ赤に染まった服も傷だらけでまさにぼろだった。

「大丈夫？ 君、大丈夫？」

彰が少女を抱きかかえると訝しそうに顔を上げると、残された力を振り絞るか細い腕で、彰を押しつける。

光の差さない蒼く淀んだ瞳には敵意が見える。

触れるだけで切れそうな敵意。弱弱しい少女が放つものではない。少女を襲ったものが放つ敵意。それが少女を壊している。少女を通して伝わってくる。

「はあ……はあ……」

荒い息を吐きながら立ち上がる少女。弱りきった体に鞭を打つように、見るだけで痛々しい。

目を逸らすことは簡単だったが彰はそれをしなかった。

「離れてください坊ちゃん！」

声を上げる瞬鬼。顔は強張っていてこんな顔を見たのは彰は初めてだった。

「瞬鬼？」

「死霊よ。なぜこの青鬼家の領土に足を踏み入れた。返答しだいによっては容赦はしません。応えなさい死霊よ」

瞬鬼の左手に輝くシルバーリングが眩い光を放つ。その光の中から鉄扇が出てきた。

瞬鬼がそれを左手で取ると少女に向け鉄扇を指す。

「応えなさい死霊よ！」

少女が無表情な顔を上げる。笑うことも泣くこともしなかった。ただ無表情に、

「お前も……か？」

言葉を呟く。

「何？」

「お前も……敵か？」

こくりと頷く瞬鬼。

「恐らくは……ね」

その瞬間だった。

少女の体に異変が起きたのは。

黒い靄のようなものが少女を包み込んでいく。空気が震えていく。

「敵は殺す！ どんな手段を使おうとも！ 殺す！ 殺す！」

「愚かな」

少女が瞬鬼に向かい飛び掛る。

瞬鬼が鉄扇を翳し、その鉄扇が少女を捉える。

「うがあああああああ！」

声にならない声で叫び声をあげる少女。

ずきん。

彰の小さな心が痛む。彰は小さな右手で心臓を押さえる。

痛みは和らがない。ただ痛みが増していく。

このとき何を思ったのだろう。

どうしたのだろう。

そんな感情が彰の体を動かした。

「待って！」

少女と瞬鬼の前に立ちふさがり両手を翳す。

いきなり正面に現れた彰に瞬鬼は狙いがずれる。少女は彰に衝突

した。

少女はそのまま力なく倒れこむ。それを慌てて彰が抱きかかえる。

「大丈夫？」

「お退きください坊ちゃん！ その者は死霊でございます！」

「死霊？」

瞬鬼の言葉に彰は首を傾げる。

「人の命を喰らい、それを楽しむ陋劣な童でございます」

彰は抱きかかえた少女を見つめる。

苦しそくに呻き声を上げる少女。

力の籠らない瞳で、精一杯の敵意を表す。しかしそれは弱い

捨てられた犬のような、あくまで精一杯の抵抗。力など皆無だった。

「そう……かもしれない」

頷く。自信がないように力なく頷いた。

そして涙ぐんだ顔をあげる。

「でも、でも可愛そうじゃないか」

「……坊ちゃん」

一旦扇を収める瞬鬼だったが首を横に振る。

「いいえ、そんな感情論認めるわけには参りません。死霊は人外の中でも特に凶悪なのです。力の少ない今のうちに対処をしなければ手遅れになってしまいます。ですから、坊ちゃん、そこをお退きください」

呟くようにか細く。

「嫌だ」

今度は力強く。

「嫌だ！」

彰の恐らく初めての否定。その行動に彰といつも一緒にいる春と瞬鬼には驚きを隠せない。

「この子は怪我をしてる。こんなに弱りきった子を僕は放っておけない。それに追い討ちをかけるなんてことも、もちろん出来ない。

そんなこと出来るわけない！ 今彼女にすることは追い討ちをかけることじゃない。怪我を治してあげることなんだ！ 僕は何か間違っているの？ 何がいけないの？」

「間違つてはおらん」

今まで黙っていた春が重い口を開いた。

「婆ちゃん」

「春さま」

「しかし、それが掟じゃ。人外のを駆除するのが我々青鬼家の人間のな。青鬼家の人間は鬼と契約を交わし、人間に害をなす人外のを駆除する。お前には言っておいたであろう？」

こくりと頷く彰。

「分かった」

「そうか」

春が頷くと瞬鬼がそれに合わせるように小さく頷く。

瞬鬼は頷くと力を強めた。狙いを定めた。右手の人差し指が音を立てながら人差し指の人間の肌が風化していく。その風化した肌から筋肉がむき出したような赤い指が露出する。

指の先端に蒼く鈍い光が一点に集中していく。その光が少女を捉える。

瞬鬼は彰に当たらないように力を使おうとした。その存在を抹消しようとする力を入れる。

そのときだった。彰の口から突飛した返答が返ってきたのは。

「だったら僕はこの子と契約を交わすよ！」

「「は？」」

二者ともに同様の言葉が漏れた。

初めに焦った声を出したのは瞬鬼である。

「な、何を言っているのですか坊ちゃん？」

「この子と契約をすればこの子は死なずにすむよ。契約を交わすときにあらゆる病は治るって婆ちゃん言ってたし、きつとこの子の傷も治るよ」

あくまで彰はこの子を助きたい。そう思っている。

この笑顔が何よりの証拠だった。曇りひとつない無垢な笑顔だった。

彰のズボンに入っていた小さなシルバーリングを取り出した。

「さ、指を出して」

少女の小さな指を取る。それを少女は払いのける。

「ば、バカにするな……私は人間の道具になどならない……」

瀕死の少女はそれを拒絶した。拒絶する言葉。そして行動。それを優しく彰は受け止める。

「それは違うよ？」

「なに？」

「君に死んで欲しくない。この契約はただ、君の怪我を治すだけだから。人間が鬼を従えるには少なくとも、僕が十年ぐらい大きくならないといけないんだ。だから僕に従うのが嫌なら十年後、ここにいなければいいんだよ」

「なぜそんなことをする。その人間や鬼の言う通りだ。私は死霊だ！ 私は人間を殺すぞ！」

ふるふると首を横に振る彰。

「君は死霊かもしれない。でも女の子でしょ？ 放っておけないんだ」

ぽつと少女の温度が上昇した。それを感じられるまいと少女は呟いた。

「バカにして……」

そして少女はゆっくりと左手を差し出した。弱弱しく伸びた少女の手を彰は優しく、そしてしっかりと力強く受け止める。

その手を彰が受け取ると、そのたおやかでか細い薬指にしっかりと輝くシルバーリングを通した。

指に通したシルバーリングはか細い指にサイズが合わなかった。

少女の小指が無理をすれば一本通りそうだ。

「ははっ、ぶかぶかだね。きつと大きくなるころにはちょうどいいサイズになっているよ」

屈託のない笑みを浮かべ彰は笑う。

少女はぎゅっと胸元でシルバーリングが光る手を握り締める。

少女の体に無数にあつた傷が見る見るうちに治癒していく。

「んっ……」

光が少女を包み、少女が少し甲高い声を漏らす。

何かを確認するようにぎゅっと胸元で両手を縮こませる。

「あ、あの……」

胸の前にある手をもじもじとさせてとても女の子らしいしぐさを見せる少女。顔には少し高くなった温度が目取るように分かるほどに赤らめて。

「本当に契約したの？」

そう少女が問いただとすると彰は小首を横に振った。

「それは違うよ。今指輪はぶかぶかでしょ？ さっきも言ったけど鬼と人が契約をするには僕の年ならあと十年は契約できないんだ。だから今この時間から十年後の時間に指輪をしていると契約が完了するんだ。もし、本当に契約が嫌なら帰ったらすぐに指輪を外してね」

「十年……」

少女の手を取り、彰は少女にこう告げた。

「約束しよう」

「え？」

再び温度が上昇する。少女にとっては初めての感覚。それが少女を襲い、頭の中が真っ白になっていく。

「忘れないって……」

「じゃ、じゃあ……」

振り絞ったか細い声に彰は耳を傾ける。

「何？」

もじもじと胸の前にある手をいじったりと落ち着かない様子の少女だったが何かを決心したようにこくりと頷く。

「これ……」

「？」

少女が恐る恐る一枚のスケッチブックの紙切れを差し出した。

少女が差し出したのは一枚の紙切れだった。それを彰は受け取るとその紙切れを見てみると表にも裏にも何も書かれていなかった。

「これは？」

紙切れを受け取った彰は首を傾げる。

少女はなにを言うわけでもなくただ押し黙る。

「あの」

彰が話しかけても少女は貝のように黙ったままだ。

そして貝は突然に開いた。

「も、文字を書いて！」

「は？」

いきなりの頼みごとに彰は困惑の表情と啞然とした言葉が漏れる。
少女が彰の腕を取り、

「何でもいいの！ 忘れないために文字を書いてお願い！」

「何でも？」

「そう、何でも！ お願い！」

そのまま彰は何かを考え込む。

返事がない彰に少女はしゅんと体が小さくなっていく。

そして、

「や、やっぱりいい……うん。ごめん。忘れて……」

そのまましぼんでいく少女に彰が慌てて首を横に振る。

「あ、違うよ！ 何を書けばいいのかわかって考えてただけど……

あ、そうだ」

ぼんと手を叩く彰。

「じゃあ、きみが何を書いて欲しいか言ってみてよ。僕はその文字
を書くよ」

「え？」

今度は少女がきよとんとした。

いきなりの提案に少女は固まる。そして少女が彰に質問をする。

「何でも？」

眉をひそめながらもう一度、

「何でも……いいの？」

「うん。いいよ」

少女の表情がぱっと明るくなる。

「じゃ、じゃあ……これ……書いて」

彰の耳元まで少女は口を近づける。

そして小さな声でこう囁く。

「“ぼくのおよめさん”って、だめ……かな？」

「うん。分かった」

紙と一緒に渡された黄色いクレヨンで彰は文字を書き始める。
大きく汚い字で、

“ぼくのおよめさん”

そう書いた。文字がはみ出しそうになるくらい大きく汚い文字
でそう書かれた。

文字を書いたのを確認すると少女は慌てて紙を彰から取り上げる。
そしてその紙をくしゃりと抱きしめる。

「そ、そんなに慌てなくても……」

「ア、アリス……」

少女は小さく呟く。

「わ、私の名前！ アリスって言うの。君の名前は？」

「あ、うん。僕の名前は青鬼彰」

「シヨウ……」

アリスは確認するように呟く。

「シヨウ」

何度も確認するように呟く。

「シヨウ」

今度は優しく微笑みながら、

「ありがとう」

ぶすつとした表情を浮かべながらアリスは正座で座った彰を睨ん
だままだ。

「あ、あー」

思い出した彰は頭を掻きながら乾いた笑いを浮かべる。

「思い………だした？」

腕を組みながら睨みをきかすアリスが笑顔でそう聞く。

目はまったく笑っていない笑顔というものがこんなに恐ろしいも
のか。

「はい」

小さく頷く彰。

体が小刻みに震えだす。

ほんとアリスが縮こまってく彰の肩に手を置いた。

「忘れないって……言わなかった？」

「言いました。はい」

「私は……忘れてないわよ？」

「はい」

顔が重力に引かれるように下がっていく彰。

いやーな汗が彰の顔から溢れてくる。

「誰が悪いの？」

ぶんぶんと首を縦に振りながら、

「僕です！ 僕！ だから左手をまた振り上げようとしなないで。お願い！ ほら笑って！ スマイルスマイル。あれ、さっきよりも力籠ってない？ おかしいな、あれで最高じゃなかったんだ。すごいなー！ よっ力持ち！ あれ何で右手も上がってるの？ 一発じゃないの？ うそ！ えつとごめん！ ちょ！ まっ！」

ばちーん！ ばちーん！

威勢のいい音が計二発。

「うう……」

彰の両頬が赤く腫れあがる。

そんな彰を見ながらアリスは端麗に伸びた髪を小さな手でなびかせる。

そして、

「もう、いいわよ」

優しくいたずらっぽく微笑んだ。

第1話 可愛い死霊がやってきた！（後書き）

はじめましての方も私を知っている方もこんにちわ。今作の話は楽しく女の子を見てもらおうと執筆いたしました。楽しんでいただければ幸いです

次回の更新は次の月の第二日曜日を予定しております。お楽しみに

第2話 好きは嫌いで嫌い好き!? 其の一

都会にひっそりと佇む青鬼家の屋敷。

時間は午後七時。一室には老婆と青年。そして正座をしたまま座っている少年とそれを見下ろす少女がいた。

「十年ぶりか。本当に懐かしいな」

アリスを見上げながら彰は言う。

「忘れてたのによく言うわね」

アリスは彰の言葉に肩をすくめる。

「ごほん」

ふたりを見ながら瞬鬼がわざと咳き込む。

それに気づいたふたりは瞬鬼に目をやった。

「ふたりともよろしいですか?」

「あ、ああ」

「どうやら死霊……いえ、アリスは坊ちゃんとの契約を望んでいるようです」

その言葉にアリスは真顔で頷く。

「当然でしょ?」

「そのようです……よろしい」

十年前はぶかぶかだったアリスの左手の薬指のシルバーリングがぴつたりとアリスのサイズにあっていた。

「では坊ちゃん。アリスとの契約を交わしますか?」

「ああ。忘れてたとはいえ、したものはしたんだしな。契約するよ」
瞬鬼が小さく頷く。

「では、本契約に移らせていただきます。坊ちゃん」

「ああ」

彰はズボンに右手を突っ込むとジャラジャラとした金属音の中から一つのシルバーリングを取り出した。

それをアリスに手渡す。

「じゃ、アリス。その指輪を俺の左手の薬指に通して。それで本契約は完了するから」

シルバーリングを受け取ったアリスが小首を傾げる。

「何でそんなことするの？ 面倒なだけじゃないの？」

彰がその問いにめんどくさそうに頷くと、

「この指輪にはな。俺の霊力が込められてるんだ」

ポケットに入っていた違う指輪を取り出しながら説明する。

「人間が鬼と契約を交わすには人間と鬼……っっていうか人外の者の霊力が必要なんだ。この指輪に込められた霊力に人外の者の霊力に干渉させる必要があるんだ。あー何て言えばいいんだろう。うーん、そうだな。あ、結婚指輪ってあるだろ？ 結婚指輪を婚約のときに交換するだろ？ あのとときに人間は知らず知らずの内に霊力を干渉させて魂と魂を繋ぐ契約をしてるんだ。説明すると長くなるんだけど……そんな感じかな？」

「ふーん……」

アリスは渡されたシルバーリングを眺めながら曖昧な返事をし、

「この指輪にね……」

改めて感心するように深く頷く。

彰は話を切るように咳き込むとゆっくりとアリスに左手を差し出す。

「じゃ、早くしてくれ。その」

恥ずかしそうに頬をぼりぼりと掻く彰。

「結構恥ずかしいんだから」

その言葉で急に恥ずかしくなるアリス。
ぎこちなく頷くと、

「じゃ、じゃあ……」

彰の左手を左手で取る。

肌と肌が触れ合いふたりの温度が上昇する。

彰は女の子に触れられたことによる温度上昇。

アリスは男の子に触れることによる温度上昇。

右手に持っているシルバーリングについ力が入る。
そしてゆっくりと左手の薬指にシルバーリングを通す。

初めシルバーリングは彰の指よりも少し大きい穴だった。しかしシルバーリングが彰の指に吸い付くように自ら形を変えていく。

そのシルバーリングの自らの妙な行動にアリスは見入る。新しいおもちゃを見る子供のように瞳をきらきらさせながら。

「綺麗……」

思わずアリスが零した言葉が素直な感想だった。

このシルバーリングの動きは手品のように目を奪われる。この契約が神聖なものと感じた。

ただシルバーリングが形を変えていく様子が綺麗なだけではなく、シルバーリングに渦巻く霊力が混じりあっていくのがアリスには見えた。

白い霊力の彰。

蒼い霊力のアリス。

そのふたりの霊力が混じりあう様は開花の様子より美しく、ただ瞳を奪われる。

白い光と蒼い光が混じりあい薄い瑠璃色になっていき、そしてシルバーリングの中に光が閉じ込められていく。

一瞬光が強まる。

光は強まったのは一瞬でその光は見る見るうちにしぼんでいく。

「これで……終わり……か？」

彰が瞬鬼に尋ねる。

瞬鬼はそれに応えるようにゆっくりと頷く。

「おめでとうございます坊ちゃん。これで坊ちゃんは名実と共に“青鬼家最強”ということですね」

それを言われた瞬間、彰は慌てて手を突っ張ってそれを否定する。
「そんな名前俺はいらねーって！ “青鬼家最強”は瞬鬼。お前だろ？」

首を横に振ると今度は瞬鬼がそれを否定する。

「いいえ。この“青鬼家最強”という名は坊ちゃんにこそ相応しい。それはこの前“青鬼家最強”の鬼。瞬鬼が認めています」
誇らしげに話す瞬鬼に彰は肩をすくめる。

七百年以上青鬼家に従う瞬鬼は七百年も前から“青鬼家最強”という肩書きを背負っていた。

しかし五年ほど前に瞬鬼は彰に“青鬼家最強”の肩書きを託した。“青鬼家最強”という肩書きはただの飾りではない。

日本の少ない霊能者の中でも青鬼家はトップに位置するほどの高い能力を持った家系である。

その青鬼家で最強を名乗ることは実質“日本で一番強い”ということになる。

彰はそう呼ばれるのを嫌う。

それは彰が瞬鬼のことを“青鬼家最強”と思っているからだ。

彰がいくらそれを否定しようとする頑なに瞬鬼は彰を“青鬼家最強”と呼ぶ。そして慕う。

「ではさっそくなのですが坊ちゃんには仕事をしていただきます。時間は明日。堕鬼だきに話をつけておきますので」

「だ、堕鬼！ ま、まじで？」

汗をだらだらとかきながらたじろぐ彰。

その様子にアリスは小首を傾げる。

「どうかしたのシヨウ？ 何か尋常じゃない汗の量なんだけど……」

少し引き気味のアリス。

彰の顔の真下には汗で出来た水溜りが。

彰は顔を引きつらせながら笑う。

「行けば分かる」

日曜の午前。

未だに冷や汗をかいている彰。

そんな彰をアリスはなだめながら歩く。

「ほら、シヨウ。初のお仕事なんでしょ？ そんなんじゃ失敗しちゃうよ」

「ああ……」

アリスの言葉に彰は少しだけ落ち着く。

汗を引かせ気合を入れる。

そしてふたりがしばらく歩いてしていると彰が立ち止まる。

「ここだ」

「ここ？ ここって……？」

小さな家屋。ほとんど他の民家と区別がつかない。

「病院だよ。堕鬼がやってる」

「病院？」

病院の看板には何も書かれておらずここが病院ということを知らなければ病院だとは気づかないだろう。

彰が一度大きく息を吸うと、

「たのもー！」

門戸を荒々しく開ける。

病院の中はしんと静まり返り、中に人ひとりいない様子だ。

しばらくすると奥から、

「はい」

と男の返事が返ってきた。

その声に彰はびくつと体が強張る。

奥の部屋から白衣を身に纏っている男がいた。

男が彰を見つけるとやにわに、

「あらー彰ちゃんじゃない！ お久しぶりー！」

くねくねと体を小刻みに動かしながら近づいてくる。

その様子はやたらに不気味だ。

そして男が彰の前に来るとそのまま、

「いたたたたた！」

ぐいぐいっとコブラツイストを彰にかけ始める。

じよりじよりと無精ひげの生えた顔を彰の顔に摺り寄せる。

「ひげが！ ひげが！」

「お黙り！ ひげならちゃんと毎日剃ってるわよ。失礼ね」

彰がいくら痛がるうとも男は技を解こうとしない。

「もっつ。ほんとに久しぶりねっ！ この感触……あーたままないわ」

「感傷に浸ってないで早く解け……頼むから……」

男はぶくつと頬を膨らませ、

「もっ……しょうがないわね」

男は均整のとれた肢体の美男子であった。

顔には無精ひげが生えているがそれがだらしなく生やしていると
いう訳ではなく単純にその男のワイルドさが前面に出ている。

白衣の下には黒いブランド物のスーツを着用している。

髪はベリーショートの赤みがかった茶髪。左の耳にはシルバーリングのピアスがゆらゆらと揺れていた。

頭には透過した瞬鬼の角を少し小さくしたような角がある。

胸板も厚く、恋と顔にうるさい女子高生が逆ナンをしてもなんの不思議もないほどの超絶美男子のだが、

「やーねー」

その男はおかま口調であった。

見た目だけならば超絶美男子のだが、この男の欠点をあげるならばそのとても女らしい仕草である。

がたいのいい男のとても女らしい仕草はかなり気色悪い。

痛がる彰を見ながらぶんぶん指を振りながら男は笑っている。

アリスはその様子をしばらく黙って見ていたのだが、

「な、何なの？ この珍妙な生き物」

男に指差しながら彰に尋ねる。顔を引きつらせながら。この世の真理をすべて疑うような顔だ。

指を指された男がアリスに詰め寄ると、

「あらー可愛い女の子ね……って誰が珍妙だあ！」

アリスの顔が更に引きつる。

「私のどこが珍妙だって言うのよ。ねー彰ちゃん」
男が彰に尋ねる。

しばらく彰が考え込むと、

「全部……」

もう一度。

「全部だよ。堕鬼」

彰の後ろに怯えるように隠れるアリス。

初めて珍妙な生き物を目撃したアリスは子犬のように怯える。

怯えるアリスの頭の撫でながら、

「大丈夫だよアリス。悪い鬼じゃないから。怯えないで。かなり変なだけだから」

「だ、だってこいつ……男なのに気持ち悪い」

「それは分かってるから」

「もう失礼しちゃうわ!」

堕鬼はぶくつと頬を膨らませる。

自分は可愛いと思ってやっているのであるが傍から見れば気色悪い生き物の何者でもない。

アリスは警戒したまま彰のそばを離れようとしなない。

そんなアリスを見ながら堕鬼が彰に尋ねる。

「彰ちゃん」

「何だ?」

「この子……鬼……じゃないわよね? でも人間じゃないし……」

顎にこぶしを当てながら首を傾げる。

「ん、ああ。アリスは鬼じゃないよ。アリスは死霊なんだ」

堕鬼は目を見開いてアリスを見つめる。

「へーこの子がね。私死霊なんて初めて見るわー。アリスちゃんだっけ? 怖がつてないでこっちへいらっしやいよ」

手招きするように手を振る。

が、それに対しアリスは、

「がうがう！」

彰の後ろに隠れながら犬のように吠える。

「あらー完全に嫌われてるわ。どうしてかしら？」

心底何故？ といったような表情を浮かべる墮鬼。

大きく息を吐く彰。

「分かんないのか？」

「まったたく」

「あ、そう」

思い出したようにほんと手を叩く墮鬼。

「あ、そうそう。瞬鬼様から話は聞いてるわよ。彰ちゃん初仕事ですって？」

「ああ」

墮鬼は持っていたピンクのファイルに目を通す。

「瞬鬼様は彰ちゃんのこと大好きだからね。初仕事は“絶対私が選びます”なんて、もうすっごく張り切ってたんだから」

「まったたく……瞬鬼め」

「怒らない怒らない。さあ瞬鬼様を選んだお仕事はね……あら？」

ファイルの頁をめくっていた墮鬼の動きが止まる。

その様子を彰は訝しく思いファイルを覗き込んだ。

そして彰は目を見開いた。

「げ……」

墮鬼がこほんと一度咳き込むとファイルを閉じて、

「では発表します。彰ちゃんの初仕事は天邪鬼あまのじゃくの説得又は討伐に決定しましたー！」

嬉しそうに話す墮鬼。

嫌そうな顔を浮かべる彰。

頭の上に？ハテナマークを浮かべるアリス。

三者が別々の顔をしている。

「もうそんな顔しないの彰ちゃん！ せっかく瞬鬼様が彰ちゃんのために選んでくれたお仕事なのよ。そこはもっと嬉しそうな顔をし

ないと……ね」

「ねって……言われてもなー。嫌なものは嫌だし」

「まあ、確かに彰ちゃんあまのじやくは昔から天邪鬼のことが苦手だったしね」

「ねーねー」

アリスが彰の服の袖を指でつまみながら彰に尋ねた。

「天邪鬼あまのじやくってどんなの？」

彰は顔を上げながらアリスの問いについて考える。

「どんなのって言われてもなー。うーん、言葉で説明するよりも実際に天邪鬼を見た方が絶対分かりやすいしな」

「アリスちゃん天邪鬼を知らないの？」

震えながら頷くアリス。

「う、うん」

「だったらいいものがあるわ。ちょっと待ってて」

墮鬼はそう言うとはたばたと走りながら奥の部屋に消えていった。

「な、何？」

「たぶん……“あれ”だろ？」

「“あれ”？」

「そう“あれ”」

「どれ？」

「“これ”よん」

差し出された墮鬼の右手には小さなふたつの耳栓があった。

「耳栓？」

アリスは耳栓を受け取るとそれをあてがう。

「あれ？ これ？」

耳栓をしたアリスが違和感を感じた。耳栓をしたはずなのだが音は遮断されるわけでもない。

「音聞こえるよ」

「そりゃそうだろ。ただの耳栓じゃないんだから」

「普通じゃない？ じゃあ」

アリスの言葉を遮るように墮鬼が手を叩く。

「さあさあ、彰ちゃん。そろそろ仕事に行ってもらおうかしら」
背中を押しながら話す墮鬼に彰が、

「おっとその前に……お代の方を。まあ初仕事ということだし、これだけでいいですよ」

ぴつと三本の指を立てる彰。

「あら、結構彰ちゃんつてがめついのね。もう分かったわよ二千元ね」

「違うでしょ！ 見えないのこの三本の指が！」

「えーじゃ二百円？ 二十二円ね！」

「違うよ！ 何その二に対する執着心。二しか数字を知らないの！ それに何でどんどん金額が減ってるの！ 三万円でしょ。この場合三万円と言うべきでしょ！」

「ちよつと多くない？ 普通の霊能者だって五万円よ？ 初仕事で

それはぼつたくりすぎよ！」

「こつちも生活があるんでね」

腰に手を当てながら墮鬼は息を吐く。

「もうしょうがないわね、はい」

墮鬼は茶封筒を渡してきた。

「これは？」

茶封筒の中には五万円が入っていた。

「いいの？」

自分としてはただ言ってみただけに少し申し訳なく思ってしまった。そんな彰に墮鬼は小さく頷くと、

「私もね瞬鬼様と同じ気持ちなのよ。彰ちゃんにはすごく期待してるのよ」

墮鬼は指を一本立てた。

「ただし、一応言っておくけどこの茶封筒のお金は依頼が完了するまで使っちゃだめよ。私が彰ちゃんのこと信用して渡すんだからね。私の期待を裏切っちゃだめよ」

彰は頬を掻きながら笑う。

「ありがとう」

「いいのよ。じゃ、早速行ってきて頂戴」

「ああ、行って来るよ。ほら行くぞアリス」
彰はアリスを引っ張りながら出て行った。

第2話 好きは嫌いで嫌いは好き!？ 其の一(後書き)

次回は二四日ころを予定しています。
お楽しみに

第2話 好きは嫌いで嫌い好き!? 其の二

いきなりの高収入を手に入れると人つてのは知らず知らずに、にまにましてしまうものらしい。

茶封筒を手に、この少年も例に漏れることなくにまにましていた。一言で言えば意外だった。はつきり言って五万も貰えると思わなかった。ちよつと夢を見るように、微かな望みに手を伸ばすように宝くじを買うような感じでそれがまさかの四等（一〇万円ぐらい）が当たったような信じられない気持ちと少しだけ不安な気持ちが彰の頭の中を交差していた。

「天邪鬼か……」

不安な気持ちがつい言葉に出てしまった。彰は鬼も少し苦手だが特にこの天邪鬼と言う生き物は苦手を飛び越し、嫌いに届く部類だ。隣で歩いていた十四歳ほどの金色の髪を揺らしながら少女が話しかけてきた。

「苦手なの……?」

彰は顔を上げながら、

「苦手って言うか……あんまり会いたくないと言うか……」

「昔喧嘩した友達と一〇年来久々に会う感じ?」

「そんな微笑ましいものじゃないよ、ただ嫌なんだよ、アリス」

アリスは先ほどオカマな鬼の堕鬼に渡された耳栓を手に取りながら、

「そんなに嫌……なんだ、天邪鬼に会うの」

「うん……その耳栓失くすなよ。次から金取られるから。初回無料の怪しい通販の健康食品みたいに次はぼったくられるから。でも

効果はぼつちりなだけだな」

「そう、……なんだ、これって何に使うの?」

「天邪鬼に会えば分かるよ」

彰は茶封筒をポケットにしまうと代わりにぐちゃぐちゃに書きな

ぐった地図を取り出した。

「しかし 相変わらず汚い絵だな、これで場所が分かるって方が変じゃないか？」

これが地図と分かるのは多分あのオカマの絵を何度か見たことがある経験と勘。ひよろひよろと伸びたミミズみたいな線が幾さも交差して所々の地点には四角だか丸だかの何とか形が分かる幼稚園児の粘土細工のようなものがあり、ミミズみたいな線が道とするのならこの粘土細工みたいな丸や四角はきつと建物の場所なのだろう。そしてその幾つかある粘土細工のひとつにはばってんのマークがある。

「ここ……か？」

曖昧な地図を頼りにふたりが来たのは日曜であるにもかかわらず子供の声が聞こえる小さな幼稚園だった。何度も道を行き来し、この宝の地図にも似た堕鬼の地図のばってんの場所がこの幼稚園だと言ったことがやっと分かった。

砂遊びやら鉄棒やら幼稚園の敷地内で遊んでいる子供たちは大人の目もなく陽気に遊んでいた。人数にしておよそ一〇人くらいか。

その時点でおかしいとふたりは気付いた。

どうして子供だけなんだ。どうして子供以外誰もいないんだ、と。

この霧ヶ崎^{きりがさき}崎町の育児施設や学校はどこも日曜はイベントを除いて全てが休日になる。それには理由があるのだが

そんなことよりもこの異変に彰は、

「お邪魔します」

とりあえず施設内に入って考えることにした。

彰が一步幼稚園の施設内に足を踏み入れると異端のものをみるよ
うな目でふたりをぎろりと、幼稚園内にいた全ての子供が一齐に凝
視した。

その後ろでアリスが一步、彰の後につくと、

「？」

不思議そうな顔で周りを見回した。外国にひとり取り残されたその国の言葉を話せない日本人のように周りをきよるきよると見回す。

その様子に、

「どうした？」

そう彰がそう尋ねると、

「何か……変。分かんないけど変」

「変？」

「うん、空気が変わったみたいに変。よく分かんないけど」

「変 か」

ここに異変があるとするのなら目の前にいる一〇人ほどの子供たち。ぎろりと凝視したままふたりから視線を一切ずらそうとしない。殺気にも似た視線。

その瞬間、

「これは、もしかすると」

彰が小さく呟くと一〇人ほどの子供の中の一人が、

「お兄ちゃんたちだね？」

そう聞いた。その言葉を聞くと彰は片耳に小さな耳栓を右耳にあてがった。

子供がもう一度、

「お兄ちゃんたちだね？」

そう聞くと彰が、

「やっぱりか、はあ……」

うなだれながら肩を落とす。アリスは小首を傾げ、

「どうしたのシヨウ？」

そのアリスの問いかけに彰は振り向かず自分の右耳を指差した。

その合図が何を意味するかをすぐに理解すると墮鬼から貰った耳

栓を両耳にあてがう。すると、

「お兄ちゃんたちだね？」

アリスは何が起こったのかを理解出来なかった。一瞬耳疑い、次に頭を疑った。先ほどは可愛らしい子供の声できょんとした仕草に心奪われてしまいそうなほどだったのに。

「ここに何か用なの？」

聞き間違いである可能性はこの一言で消えた。今度ははつきりと聞こえた。子供の声に重なるように重低音の大人の男の声。

「これが天邪鬼だよ。天邪鬼は特徴がふたつある。そのひとつが思っていることは絶対に口に出さないのが人だろうと人外だろうと最低限のマナーなんだけど、天邪鬼はそんなことお構いなくに言葉にしちゃうんだよね。ま、普通にしてたら聞こえないからこの耳栓使うんだけどね」

見た目だけなら無邪気な子供たちがすくつと音もなく立ち上がり始める。そしてじりじりと羊を追い込むように距離を詰め始める。

「何しにここに来た」

リーダー格のような一人の子供がそうふたりに尋ねた。彰は一度息を吸うと、

「ここは貴方たちの場所ではなく、持ち主がいると言うことを知っていますか？ 知らないのであれば今すぐにここから立ち去っていただきたいのですが」

彰の言葉に天邪鬼がけらけらと笑い始める。一人が笑い始めると二人が笑い、二人が笑うと三人が笑い始める。まるで機械のように無表情に、でも、あざけ笑うように。その笑っているのに無表情な顔がどうしても苦手だった。

あざけ笑うなら本気であざけ笑えばいいものを、感情を知らない人形のように無表情で笑う子供と言うものは何よりも不気味だった。無機質な笑い声のBGMがこのまま延々続くかと思われた。

ふつと、何かをきっかけに笑い声がぴたりと止んだ。見定めしていた眼は鼻のように眼球をぐりぐりと動かしてあたりを見回し、

「お前たち……だけか？」

子供と大人の声が混じったような機械的な声で一人が彰に聞いてきた。それに彰が小さく頷くと、

「かかかかかかかかかかか」

再びけらけら笑い始める。面白い冗談でも聞いているように子供たちだけはどつと沸いている。

「お前たちだけかつ！ かかかか、面白いねえ、面白いよ。お前たち！ 俺たちの正体ぐらいは分かっているみたいだけだな。暇なんだよ、暇なんだよ！ お兄ちゃんたち遊ぼうよ！ 俺たちが鬼やるからお兄ちゃんたちは狐になってよ、狩られる狐にさー！！ それが嫌なら喰われる豚でもいいからさ、とにかく俺たちに遊ばれてよ！」

「特徴二つ目、相変わらず喧嘩早いな！ 早漏が、」

黄色い帽子が似合う子供の皮膚がぼろぼろと崩れ落ちるとそこからは人間の筋肉のようにはつきりとした筋や脈動が分かるようなくすんだような赤い鬼特有の皮膚が現れ出す。明らかな殺意と明らかに笑み。その全てが楽しむ気配を感じさせる。遊びを

じりじりと汗が蒸発してしまうような殺気の中彰はそれに怯えることなく、

「落ち着いて、貴方たちがここから立ち去ってくれたらそれでいいんですから」

子供をあやすように落ち着けと言い聞かせるが彰の顔は引きついている。

子供ではなく完全に天邪鬼になった一〇人ほどが全員が笑いながら、

「暇なんだって」

「暇だって」

「だから」

「遊ぼうよ！」

地を思い切り蹴って五メートルほどの距離を一気に詰めて、細くもきつちりと筋肉の発達した赤い腕を空気を裂くように彰目掛けて一気に振り下ろした。

一人の天邪鬼の腕が彰を通り過ぎ硬い土の地面に直撃するとドンッ！ と、地震が起きたような強い衝撃が足元を震わせると、クレインで地面を無理やりえぐったような深い傷跡が残る。それを見て彰は大きな息を吐いた。

あの細い腕の一つ一つが小さなクレーンのようなもので一つでも

まともにあたれば骨どころか内容物を吐き出すほどの威力があるとこんな状況に会ったことのない子供ですら分かる。それに恐怖する前に呆れた。話をきかないところはそのまま子供みたいだなと。

「あくまで抵抗すると……」

冷静に彰は言った。そして「仕方ないな」とアリスにも天邪鬼にも聞こえないように呟くと、ポケットから“何か”を取り出した。その“何か”はどこにでもあるようなものです。すぐくや手品などにも使うような玩具屋にでも一〇〇円シヨップにでも売っているようなもので、

「“さいころ”？」

アリスが見たことのある“それ”が頭の中の記憶を辿っても“それ”が“さいころ”にしか見えなくて口に出したことでそれで何をするのかを理解出来なくなった。“さいころ”で出来ることなど遊ぶということぐらいでそれでクレーンのような力を持つ天邪鬼に対抗出来るなどとは思わない。

それでも彰は愛想笑いを浮かべたままで、

「わんぱく坊やたちにはお兄さんからの折檻でもしてやらないとな」「それでか！ かかかかか」

天邪鬼たちが笑うのも当然な気がする。彰が手にしたのは殺傷能力のある刀や銃などではなく子供の玩具の“さいころ”。さいころに爆薬を仕込んでいる高性能な手榴弾や焼夷弾と言う訳でもない。

そのただの“さいころ”を親指の上に乗せると、

「さあここからは種も仕掛けもある楽しいマジックシヨウの開催します。用意するものは二つ、まずはこのさいころを」
指を天邪鬼に向けるとコインを弾くようにピンと指を屈伸させてさいころを天邪鬼に向けて飛ばした。

「出演者の一人にこのさいころを受け取ってもらいます！ さあどつぞ」

条件反射のように飛んできたさいころを見事キャッチする天邪鬼に彰が、

「ナイスキャッチ！ そんないい子に注意だ、出た目は六。無数の光弾にご注意ください」

そう叫ぶとさいころを思わずナイスキャッチしてしまった天邪鬼が慌ててさいころを放る。放ったさいころが天邪鬼から五センチほど離れると空中で音もなく四散すると、そこから白い光が六つ、ぽつぽつと蛍の光のように現れる。その光が何かを天邪鬼が聞く前にその光は銀色の弾丸が射出されるように人間の動体視力では見ることの出来ない速度で天邪鬼の寸前を通り過ぎる。

光は天邪鬼には当たらずに天邪鬼の後方に見えていた幼稚園の本館の白い壁に銃痕のような傷を残す。その傷は銃で撃つたように壁が剥がれたみたいだとか少し焦げているだとかそう言うものではなく、綺麗に銃痕サイズの穴が綺麗に空いているという方が正しい。その傷は壁を貫き、その奥には綺麗な背景が見える。

一つ一つの破壊力は天邪鬼のクレーンにも似た腕の力よりも確かに劣るがそれを補うさいころの目だけの光を放出出来る力というのは確かに脅威ではある。銃を同時に射出したように一発一発の力が蓄積されるとその威力はクレーンよりも遥かに増すと天邪鬼たちは確かに悟った。

だから目を細め、足に力を入れ、本能をむき出しにする。

「面白い！ 面白いよお前、お前は狐じゃない！ お前は鋭く牙を剥く草食動物に認定してやるよ！ だからもつと歯向かえ、そのぼろぼろの牙で俺たちといっぱい遊ぼうよ！！」

きやつきやつと新しい玩具でも与えられるように天邪鬼たちは歓喜する。目の前には豚でもなく狐でもなく、追い詰められた草食動物のように見た目とは違う脅威を放つ最高の玩具がいるのだから。

ある者は手を叩きながら。ある者は足を踏みながら。ある者は精神を昂ぶらせながら。

喜びを思うままに表現する。

その様子に彰は大きく息を吐く。諦めたように、大きく、そして疲れたような息を吐いた。

「お前たちさ……あれで本気だなんて思っていないよね」

その言葉に天邪鬼がまたけらけらと笑い出す。

「あれで本気に決まってるだろ！ あれが人間の限界、あれが草食動物の限界！」

あくまであれが彰の限界と決め付けた。自分たちの方が彰よりも一〇〇倍、いや一〇〇〇倍強いと思いついでいる。その様子にアリスが我慢出来なくなり口を出した。

「あなたたち馬鹿？ それともただの世間知らずのお坊ちゃんですか？」

小金色の髪を鬱陶しそうに掻きあげながら、

「あれが本気だと思うならあなたたちはこの“日本最強”には永遠に勝つなんてことは出来ないわね。蟻が象に勝てる？ 赤ん坊が有段者に勝てる？ そんな次元。あなたたちが勝てる見込みなんてこれっぽっちもないわよ」

指と指で薄っぺらいコピー用紙でも挟むように小さく隙間を空けていたその隙間をぐりぐりと指で潰す。お前たちが勝てる見込みなど〇だと、お前たちが勝てる訳がないと、そう言う意味。

それに腹を立てた天邪鬼たちが地団太を踏む。本当の子供のように、それを信じることで出来ずに、悔しそうに。

「俺たちが人間に負ける？ ありえないね、ありえるかよ！ かかかか、さっきお前のことを草食動物だなんて言ったがな。……撤回だ、撤回！ お前は何にも出来ないただの人間だよ、ああ。最低ラシクの間様だよ！ 遊ぶころすのも疲れた！ だからさ、死ねよ！！」

頭に血が上がりきつた天邪鬼たちは遊ぶのを止め、殺意と敵意をむき出しにした肉食動物のように獲物に一直線で駆けていく。

目の前しか見えない。アリスも他の何も見ずに、ただ、獲物である彰に目標を定めた。

天邪鬼が地を蹴ればそこには落石でもあつたような強いひびが入り、土埃も舞う。そんな様子を眺めていた彰がアリスを戒める。

「アリス、俺、嫌なことは初めに言っておくタイプだから言ってお

くけど」

「何？」

「二度と“日本最強”だなんて言わないでくれよ」

「どうして？ 名誉なことじゃないの？ だって“最強”なん」

アリスの言葉を遮るように大きく土を踏み、そして“さいころ”

を四個ほど振った。その顔はどこか寂しげで、どこか苦しそうで、

「嫌いなんだ、その言葉」

さいころの目はその全てが六。まるで綺麗な絵でも見ているようにその全てが綺麗な数字を出した。さいころが数字を出すとそのさいころが四散する。

そのさいころから現れた光の弾が彰に突っ込んでくる天邪鬼たちを見つけると彰が大きく指を突き出し、

「賽さいの式・鬼弾！ 敵を捕らえろ」

その指を台風の目にするように指ごと腕を振り、そして台風のように何度も回転させると、光の弾も彰の指に反応するように、大きく回転し始める。風が唸りを上げるように大きく鳴き、土を舞い、天邪鬼を台風の目の中に閉じ込めていく。

台風の目の中にすっぽりと天邪鬼たちが入ったのを確認すると彰は指を横に切ると、もう一度、“さいころ”を一つ台風の目の中に入れた。

「これで終わり。賽の式・五。結界」

確かに数字は五だった。それを見ることの出来たのは天邪鬼と神だけだったと思う。“さいころ”が地面に着くよりも早く、彰は言った。“さいころ”の目が五だと、そうなる

それはもう運だとかそう言う問題じゃない。まるで出る目が彰の思うままに動くように。運が彰に服従するように、“さいころ”の目が彰に従った。

“さいころ”がパキンと、ガラスとガラスが触れ合い、そして砕けるような儚くも綺麗な音が鳴った時には天邪鬼たちを取り囲んでいた台風の光の弾たちは跡形もなくなり、代わりにあったのは透明の

カーテンのような物の中に取り残されている天邪鬼たちの姿だった。天邪鬼がその綺麗なカーテンをいくらクレーンのような破壊力の腕で破壊しようとも風に靡くカーテンのような物がその行動を全て受け流すように天邪鬼の一撃には見向きもしない。

そして刹那、彰が息を止めると、

「な、何だ！ 何をした人間！」

透明なカーテンが見る見る内に圧縮していき、カーテンから透明な水晶のように形を変えていく。その透明な水晶の中に蜘蛛の糸でも捜している罪人のように悲願する天邪鬼たちの顔が凍結していく。「狭いけど我慢してくれよ」

野球のボールぐらいまで縮んだ透明な水晶を拾いあげる彰を見ながらアリスは体が震えているのを感じた。

これが彰の強さ。圧倒的なまでの運のよさと言うべきだろうか。

“さいころ”を振って望む目が出る確率は簡単に計算しても六分の一。確かに何回かはその望む数字が出ることも、運がよければ可能ではあると思う。でもそれが何度も何度も繰り返されるとそれがもうすでに運ではなくなる。

普通の人間が“さいころ”を振る時に「出る〜、出る〜」などと何の根拠もないまじないを言ったとして“さいころ”がそれに応えることなどまずありえない。“さいころ”はまじないなどには一切応えずに馬鹿のように確率と言う物に従う。何分の一かは場所、振る時の手の角度や、振った後の余韻のようなものがその確率を更に複雑化させ、人間が一〇〇回“さいころ”を振って、一〇〇回とも望んだ目が出ることなどありえない。山に籠ろうが、一〇〇〇回振って、一〇〇〇回同じ目が出ることはない。

しかしそれを彰は簡単に、当たり前のように成し遂げた。

きつとこの運のよさと言うか、運を支配出来る力が彰を“日本最強”と言わしめることが出来る。この“日本最強”の名が伊達ではないと納得せざるを得ない。

「シヨウ、それどうするの？」

しゃがみながら何かをしていた彰にアリスが話しかけてきた。彰はひらひらと何か一〇〇〇円札ほどの大きさの紙をアリスに見せると、

「手品の最終段階だよ、もう一つの仕掛けはこれ。墮鬼お手製の転移札。これを結界に閉じ込めた天邪鬼たちに貼り付ける、すると

」

札を貼った水晶を空に放り投げると吸い込まれるように空の中に消えていった。

「どこに行ったの？」

「うん、オカマのところ」

「オカマ……って、あの変な生き物のいる」

アリスは震えながらあの奇妙で珍妙で奇奇怪怪でUMA的で近づきたくもないあの変な生き物のことを思い出して、体がバイブ機能でも持ったかのように震えだした。がたがた震えるアリスの肩にぽんと彰の手が乗ると、アリスのバイブ機能は停止した。

「まあ、そういうこと」

「でも……さ」

アリスは一つだけ不思議だった。

「どうしてあの天邪鬼を……」

殺さなかったの？ そう聞いたかった。でもそれを聞いてしまったら嫌われてしまいそうで、口に出すことが出来なかった。だから、

「シヨウ」

この言葉を口に出してみた。天邪鬼になったつもりで、背中を彰に向けながら、

「大嫌い」

思ってることを口にせずに

Short Break もんぶらんけーきと死霊の女の子

呼び寄せるのは自分を殺す者。自分に殺される者。

与えるモノは安らかな死。受け取るモノは殺意。

ただ命を喰らい、命を弄び、命を悪戯に殺していく。

それが自分の……。

夢から覚めた時にそんな感情を思い出してしまった。昔の自分、今の自分、ずっと変わらない自分。

心が何だか割れそうに苦しい。このまま引き裂かれるのではないのかと思った。ふと顔を上げると見慣れない天井に月の妖しい光が射していた。暗くもなく明るくもない、そんな自分の心のような。

思い出した。眠たい目を擦りながら夢と現実の中の入り組んだ迷路を進んでいく。夢の記憶と現実の記憶を捌いていく。

今日、私は夢を叶えた。大好きな人の力になる権利を手に入れた。自分の指を見てみると、確かにそこに権利があった。小さく輝くシルバーリングが。

指輪を見ながら笑ってみる。泣きまねをしてみる。怒ってみる。拗ねてみる。でも、どうしてだろう。嬉しそうな顔を作ることができない。

あんな夢を見たからだろうか、……きつとそうだろう。

喜ぶこともなく、悲しむこともなく、ただ、朝起きて歯を磨いてご飯を食べるように当たり前の日常のように無表情に人の命を殺していたころの夢、過去

小さな少年と出会う前の。

少年は私を助けた。ただ、可愛そうと言う理由だけで。殺人鬼よりも恐ろしいはずの“死霊”の私を

私が出会った人間は私が全部殺した、みんなみんな殺した。あの少年以外は殺した。

それが少年と出会う前の過去。

少年はただ可愛そうと言って助けた。理由なんてそれだけ。くだらない理由。

命の重さも分かっているほど少年の小さな優しさ。それが私には眩しく見えた。太陽に直接触れたみたいだった。熱く触れることなど出来る訳も考えたこともなかった。でも少年は触れてきた。

“死霊”である私に。

思い出すだけで体が嬉しく感じる。

思い出すだけで心が悲しく感じる。

どうしてだろうか？　ただ、矛盾が感情を複雑にさせていく。

眠っていた部屋のドアがふいに開かれた。私がそちらに視線を移すと少年　彰がいた。彰は何か小さな紙で出来た取っ手が付いている箱を手を持って帰宅していた。

「ん？　寝てたの、アリス」

帰って来た彰を見て思い出した。ここは彰が暮らしている外観がかなり古びている1Kのアパート。そして彰は堕鬼のところに行くと話して「一緒に行く？」と聞かれたがアリスはまたあの変な生き物に会うのは嫌だと理由を付けて一緒には行かなかった。本当はあのオカマに会うのが嫌だったと言う訳じゃない。ただ何となく一人になりたかったから、たったそれだけ。

一人部屋に残されたアリスは倒れるように敷かれていた布団の上で眠りこけた。

「寝癖付いてる、はい」

そう言い彰はアリスに櫛を渡した。

アリスの黄金の髪は重力に反するように乱れていた。アリスは慌てて櫛を受け取ると、

「こつち見ないで！」

急いで髪を梳き始めた。

「はいはい」

彰はそう言いながら茶の間の中央に指定席のように鎮座してある丸いちゃぶ台の上に持っていた小さな箱を置いた。アリスは彰に背中を向けながら髪を梳いていたが、何かが置かれる音は聞こえていたので、

「何？ それ？」

と、聞いた。彰はちゃぶ台の前に座りながらその箱を開ける。

「んゝあの幼稚園の園長からの副収入っばい」

墮鬼の所に行った彰はそこで天邪鬼の討伐を依頼した幼稚園の園長に会った。彰が言うには園長は見た目だけならヤの付く自由業の方にも見えて少し怖かったのだが、お金の払いが物凄くよかつたのでいくら顔が強面だろうと、笑顔が絶えることはなかったそうだ。

いつも会う人、すれ違う人に怖がられている園長がそれに気分を好くして、園長が持っていた箱を彰に譲ってくれた。

何とか髪を梳き終わったアリスが彰の方に振り向いて見ると見慣れないものが箱の中に三つ入っていた。カップの形をした柔らかさそうな、多分食べ物だと思う。カップの上には螺旋状の山のように盛られた黄色い何かが綺麗に飾られている。そしてその山頂には甘露煮の栗が山頂に直撃した隕石のように乗せられている。本当に見たことがないから何と表現していいのかも分からない。

でも一つだけはなんとなく分かる。

とても美味しそう。

思わず出たよだれを慌てて拭うが、そのよだれは洪水のように止まらない。

「これ何！ これ何！？」

向かいに座っていたアリスが身をぐいっと乗り出して聞いてくる。彰は不思議なことを聞いてくる子供に答えを教えるように優しく、

「何って……ケーキだけど？ モンブランケーキ、知らない？」

今回の仕事の報酬は五万円とこのモンブランケーキ。彰は本当に機嫌がよさそうに、にこにこしている。

「もんぶらん……けーき？ って何？」

不思議そうに小首を傾げるアリスに彰が何も言わずに食えと言わんばかりに箱の中に付属していた透明なプラスチックで出来た薬指ほどの大きさの小さなスプーンをアリスに押し付ける。

「食べてみれば分かる。と言うか食べてしまいなさい、食べなさい。俺は甘い物が苦手だから食べれないの。このままじゃキッチン三角コーナーの片道切符をこのモンブランくんが手にしてしまうの。生ものだから、腐りやすいから」

アリスは彰の言っていることの半分も理解出来なかったし、しようとも思わなかった。今は目の前にあるもんばんらんけーきとやらに興味がある。

鼻から香る栗の匂いも見た目の鮮やかさも見たことも、感じたことのない物ではあるが、とてもとても、心を攪る。彰から渡されたスプーンをもんばんらんけーきに伸ばす。ふんわりとしたもんばんらんけーきの一口分を慎重に掬う。それからちらつと彰を上目遣いで見やる。

「俺は苦手だけど美味しいから食べてごらん？」

「……………」
アリスはこくりと頷くと、スプーンに乗せたもんばんらんけーきを口に運び、もふもふと口を動かす。と、突然。

「!!」
体がふるふると震えだす。確かめるようにもう一度口に運ぶ。

「!!」
ビデオの再生を見るようにまったく同じようにまた震えだす。彰は、

「ア、アリス? ……で、どう? 美味しい?」

少しびっくりするものの自分では食べきれないモンブランケーキを物凄く美味しそうに陶醉しているアリスに嬉しそうだ。

「…………しい、…………美味しい。これ、美味しいよシヨウ!」

今まで食べたことのない味だ。暗い森の中の木の实とも違つとつても幸せな甘さ。こんなに甘くて、こんなに幸せになる食べ物彰

の何一〇〇倍も生きてきて味わったことがない。思わずここで踊ってしまいそうだ！

なんて美味しいんだろう。なんて甘いんだろう。なんて幸せなんだろう。

口にケーキを運ぶ回数がどんどん増えていく。

モンブランケーキを一つ食べ終わるとすぐに二つ目に手を出す。

二つ目を食べ終わるのに時間はほとんどかからなかった。三つ目も同様に。

あっという間にモンブランケーキを一人で平らげてしまった。ケーキを食べ終わったアリスが感慨に浸る。

大きく息を吐きながら、

「美味しい……すごく美味しい。こんなもの食べたことない」

ゆっくりと目をつむり、

「本当に美味しい……こんな食べ物があったなんて私知らなかったな」

少し自分の人生に後悔を持ち始める。何でこんなに美味しい食べ物を私は知らなかったのだろうか。自分は馬鹿だ、大馬鹿だ。

そんなことを考えながらもスプーンに付いた僅かな栗のクリームを赤い舌できつちり舐め取る。これで本当に全部平らげた。モンブランケーキと言う甘美なお菓子は綺麗さっぱりなくなった。

そう思うと悲しくなった。少し涙目になるアリス。

彰は泣きそうなアリスを見て慌てて、

「モンブランケーキぐらいならまた買ってあげるから泣かないで！」

「ほんとう？」

「ホント、ホント！こんなにアリスがはまるなんて思わなかったよ。本当にケーキ食べたことないの？」

彰がそう尋ねると少し影が落ちたように、僅かだけアリスの顔が沈んだ。

「……うん、食べたことのある物は森の中にあった木の实とか野草とかキノコとかそんなのばかり。こんなに甘くて幸せになる食べ

物なんて口にしたことも、見たことも、聞いたこともなかった」

「そっか……」

彰は沈んだアリスの頬を指でつつく。拗ねた子供をからかうように。案の定アリスの顔が真っ赤に染まり、頬を河豚のようにぷっくりと膨らませ、ふん、と、顔を横に向ける。

「何よ！ もう、止めてよ！」

彰は優しく笑って、

「また美味しい食べ物持ってきてあげるからまた感想聞かせて。本当に美味しそうに食べるからこっちもお腹一杯になっってきたよ」
アリスは顔を赤くしながら俯いた。

この笑顔だ。まただ。

心臓がとくと悲鳴をあげる。苦痛な悲鳴ではなく、幸せな悲鳴。彰と話すだけでさっきまで見ていた夢も過去も、全部が吹き飛ばす。ただ彰が笑うだけで“死霊”としての私が私を殺してしまう。人をこれまで一体何人、何一〇人、何一〇〇人、何一〇〇〇人、何万人と殺してきた私が私を喰い殺そうとする。

こんな私の前で彰はただ笑う。何も考えていないのかは分からない。でも、笑っている彰を見ると、もんぶらんけーきを食べた時よりも心が満足する。満たされる。

だから私は彰の所に来たのかもしれない。この少年を助けたい。一緒にいたい。ただ、それだけの理由で。

この気持ちがあきつと『大好き』という気持ちなのかもしれない。この気持ちが伝わることはないのかもしれない。でも『大好き』なこの気持ち私を“死霊”から“ヒト”に変えた。
ずっと隣で笑っていたい。『大好き』な人の隣で

第3話 青鬼と赤鬼の輪舞曲 其の一

「いつものください」

水曜の午前。とある玩具屋。

ぼさぼさとした茶髪の少年がまたやってきた。

まだこの玩具屋でバイトを始めて間もない新人でさえ彼のことは知っていた。

定期的に来てはいつものをくださいといってくるなどの少年。

この玩具屋にとって彼はお得意様になっていた。

十六歳くらいの少年で玩具屋の中でも話題になりニックネームが付いていた。

この少年を玩具屋の人々はこう呼ぶ。“さいころ少年”と。

この名前は決して伊達ではない。店長も呆れるほどの“さいころ”の量を買っている。

これが彼の“いつもの”。

「今日も五〇〇個でいいですか？」

「はい」

研修生と書かれた札を付けている店員が少年にそう尋ねると少年はいつものように頷いた。

さいころは二、三個もあれば十分だろう。それを五〇〇個もこの少年ひとりで買っている。

さいころを五百個も何に使うのかこの少年に対応した店員はいつも考えている。

大すごろく大会か。それともただの趣味か。

なんにしてもなぞである。

少年は満足そうに玩具屋を出て行った。

この時店員が少年には聞こえないように呟いた。

「変な人」

学校に病欠届けを出した少年はある民家の前にいた。

民家といってもここは病院で少年の知り合いが院長をやっている。病院の前に立った少年は体が悪くてここにいるわけではない。

しかし顔はかなり嫌そうな顔をしている。

緑色を基調としたブレザーの制服を着たまま立っていた。ぼさつとした茶髪を掻きながら病院に入るかどうかを青鬼彰は悩んでいた。足元から、

「入らないの？ 私もそれがいいんだけど……」

黄金の髪を揺らしながら彰と同じように嫌な顔をしたまま顔を上げる死霊のアリス。

「まあ……入らないわけにもいかないし……。入るか」

息を吐きながら彰は財布の中身を確認する。現在の全財産、二五〇〇円。ちよつと厳しいかな。

霊能者の仕事ははつきりいって少ない。多分バイトをした方がお金は貯まるであろうがバイトをするわけにもいかない。自分の人外に好かれる体質が妬ましく思う。

とあるバイト先では自分を探すためだけにその地域全体に浮遊霊が数百と集まってきたり、また違うところでは気配を出すだけの人外の赤足のパレードが開催されたりと散々だった。

自分のせいで迷惑をかけるわけにもいかずにもう二度とバイトはしないと心に誓った。

仕事があると墮鬼から連絡があったときは初めは喜んでいたものの、しばらく時間が経ってから気づいたのだが、墮鬼に会わないといけないことを思い出す。それは嫌だ。

あきらめたように息を吐くと、ふたりは病院の中に入った。

病院の中はいつものようにからがらだった。

「相変わらずだな……おい墮鬼たき！ 来たぞ！」

彰が大声をだしても返事がなく部屋はしんと静まりきっていた。

長い沈黙。

「おー来たぞ！ おかま！」

彰がもう一度叫ぶと、

「はい！ 聞こえてるわよー」

嬉々とした男の声が聞こえてきた。

奥から出てきたのはいつもの白衣の下に世にも珍しいホットピンクのスーツ。それに何を勘違いしているのかこの日本には絶対似合わないであろうスーツと色を合わせたホットピンクのテンガロンハットを赤みがかった茶髪のベリーショートが隠れるほど深くかぶっていた。

男は猫の手のこぶしを握りながら体をくねくねさせながら彰に近づいてくる。

そしてそのまま彰の前に立つと、

「つて……誰がおかまじゃー！ー！ー！」

どすの利いた低い声でぐいぐいとコブラツイストをかけてくる。

「お前だー！」

この美男子の名前は墮鬼^{だき}。

色々完璧な鬼なのだが欠点のひとつだけある。

それは、

「もう！ 彰ちゃんったら私がおかまだなんて失礼しちゃうわ。私は立派な乙女よ」

頬を膨らませながら体をくねらせる。とても女らしい仕草。

これが彼の最大の欠点であり個性。

アリスはさつきから彰の後ろに隠れたまま。

彰はおびえるアリスの頭をくしゃくしゃと撫でると、

「で？ 仕事って何？」

墮鬼に向き合い仕事の話 시작했다。

そんな彰のつれない態度に墮鬼は上目遣いの顔をしながら、

「そんなに仕事が大事？ 私と仕事どっちが大切なの！」

「一〇〇パーセント仕事です！ 断言できます！ というか仕事以

外であんたとは会いたくないです。一生」

「もうつれないわね！　ここは『ばかつ……お前に決まってるだろ？　何だったら今……形で証明してやるうか？』とか言うべきですよ！」

声色を変え、気持ちの悪いことをぬかす墮鬼に彰は、
「死んでも言わん！！」

一蹴すると目つきを鋭くして墮鬼を睨んだ。

「もう、怖い顔しないで。はいこれ」

墮鬼は懐から一枚の名刺を出してきた。

彰がそれを受け取るとそこに書いてあったものを口に出した。

「HOTEL『ホテル』？　何だこりゃ？」

「だからホテルよ。立派なね」

名刺をうちわのようにして扇ぎながら墮鬼に尋ねた。

「で？　どんな仕事なの？」

墮鬼はいつものピンク色のファイルを開きながら話し始める。

「ええ。このホテルの社長さんからの依頼なんだけどね。お客さんからの苦情があつてね。夜眠つてるとうめき声が聞こえるって」

「ボガード騷霊の一種かそれとも地縛霊か？」

「それはわかんないけど、とにかく困ってるんだって。で、どうする？　受ける？」

「うーん……」

顎に手を当てながら彰は考えこむ。

しばらく考えこんだ後に彰は小さく頷いた。

「分かった。とりあえず仕事はしないとイケないしな。このホテルにいけないんだろ？」

ぴつと名刺を指で挟み、

「じゃ、行つてくれるのね」

彰は名刺を自分の制服ポケットの中に押し込んだ。

墮鬼は手をぽんと叩くと、

「じゃ、日にちは明日ね。彰ちゃんががんばってね」

墮鬼からの依頼を受けた彰は服やらなにやらを一日で用意するとホテルのある町に行くバスに乗り込んだ。

墮鬼がいうには依頼料は全て依頼人から受け取るようにということ。前金はなし。

しかしその分報酬はいいそうさ。この仕事を受けない理由も見当たらないので簡単に依頼を受けたのだ。

交通費も負担してくれるそうさ。

ここまで気前がいいと少しだけ不安にもなる。

仕事先でいきなり『さあ龍退治お願いします』なんて言われた日には即ぶっ倒れるのにそう時間はかからないだろうな。

少し憂鬱そうな息を吐きながらさいころを指でいじっていた。

「ねえ？ この間何買ったの？」

「この間？」

ホテルに向かうためにバスに乗っていた彰の隣には不可視状態のアリスが座っていて、足を伸ばし気味に座り少し眠たそうにまぶたを擦る彰の顔を覗きながら聞いてきた。

「何って見たまんまだよ」

彰は自分のズボンのポケットからひとつのさいころを取り出した。

「さいころ？」

「そ、さいころ」

さいころを指でいじりながらそれを指で弾いてアリスに飛ばす。

アリスは飛んできたさいころを両手でキャッチするとそのさいころを手のひらの上で転がす。

「でも何でこんなに買ったの？ 五〇〇個だっけ？」

「仕方ないだろ。俺のさいころは消耗品なんだし」

アリスはさいころを転がしながら小首を傾げる。

「消耗品？」

その言葉に彰は苦笑しながら、

「そー。嫌だよな。力を使うたびにさいころが消滅しちゃうからす

ぐになくなるし、そのたびに新しいさいころを買わなきゃいけないから困るんだよな“さいころ”つかいつてのは」

「ふーん」

アリスは急に興味がなくなったように小さく頷いた。

彰はさいころを転がすアリスを見ながら一枚の名刺を取り出す。

「もうすぐか、^{ホガード}騷霊か地縛霊ね……」

少しだけ不安そうな顔をする彰。

そんな彰を知ってか知らずかバスは揺れ、ホテル前に向かっていった。

バスに揺られることおよそ一時間ほどで彰たちは目的地についた。着いた場所は温泉街で平日というのに栄えていた。来ている人たちは老人ばかりで隠居生活を楽しんでいるのであろうか。

「……くさい」

硫黄の癖のあるおいにアリスが鼻をつまむ。

「硫黄だよ。ちょっと癖があるけどすぐになれるから我慢して」

「……くさい」

「とりあえずホテルに向かわないとな」

鼻をつまみながら歩いているアリスの隣の彰が辺りを見回しホテルを探す。

温泉宿がいくつも軒を連ねていて、結構探さないといけないようだ。

息を吐きながら、頭を掻いているといきなり声をかけられた。

「お客様！ 我が温泉郷にようこそ！」

肩に手を置かれ驚いた彰が慌てて振り返る。

彰が振り返るとそこにはにこにここと営業スマイルを浮かべた老人が立っていた。

しわだらけの顔に弓のように曲がった腰。

まだらに残った白髪の頭の老人がいた。

「な、何だ……客引き？」

びっくりした彰は大きく息を吐くと老人に向かいあう。

「ご予約の旅館はあるのですかな？」

「あー一応。HOTEL“ホテル”ってところらしいんだけど」
老人はびくりと眉をしかめるとこそつと彰に耳打ちをする。

「そこだけは止めておいたほうがいいですよ。ここだけの話……あのほてるにはでるらしいですよ？」

「何が？」

幽霊か何かならそこで当たりだろうと思ひ彰は老人の話が終わったら道を聞くかと思つていた。しかし返ってきた言葉は幽霊ではなく、

「……変態がでるらしいですよ」

「は？ もつかい言ってくれ？」

彰は聞き間違いなのではないかともう一度聞いてみる。

「ですから変態ですよ。変態」

しかし答えは同じ。

「幽霊じゃなくて……変態？ 本当に？」

「はい」

営業スマイルのまま頷く老人。嘘を言っているとも思えない。

「夜眠っているとうめき声が聞こえるのですじゃ。それはもう嬉しそうなうめき声が」

「嬉しそう……？」

彰は顎に手を当てながら首を傾げる。

「それを気味悪がり誰もあのほてるに近付かなくなつたのですぞ。ですからお客様もあの変態がでるほてるよりも我が旅館をお使いになつた方が賢明ですよ」

幽霊じゃなくて変態？

話が違つぞ墮鬼。

依頼を受けてしまつたものは仕方がないので老人にホテルの道を聞くと顔を俯かせながらホテルに向かつた。

「……くさい」

ホテルの前は先ほどまで栄えていた温泉街とは思えないほど寂れていた。

アリスはにおいに慣れてきたのかたまに鼻をつまんでいた指を時折はずそうとしていたがやはり、

「……くさい」

そういいまた鼻をつまむ。

その仕草が少し可愛らしい。小さな生き物みたいだ。

何てことを思いつつ彰は古びたホテルの中に入ってしまった。

ホテルの中は赤い絨毯じゅうたんがしかれていて、高級な雰囲気を感じさせた。とても問題があるようには感じなかった。

彰がきよるきよるとホテルの中を見回していると、

「失礼ですが……青鬼彰さまですか？」

ひとりの男がゆっくりと近付いてきた。

がっしりと筋肉がついた体にびちびちになっている黒いスーツを着て、オールバックの黒い髪にはたつぷりのジェルが光沢を放っていた。

「ああ。あんたボディーガードか何か？」

男は彰の問いに小さく首を横に振る。

「いえ、私はこのホテルを運営させてもらっております。穴戸あなとと申します」

一礼をしながら穴戸は一枚の名刺を差し出してきた。

彰はポケットに入っていた名刺を出して、

「ああ、あるからいらないよ。穴戸さん」

「そうですか」

穴戸は名刺を懐に戻すと彰の右手を握ると、

「貴方さまがあ有名な“日本最強”の霊能者さまですか！ このようなお若い方だとは存じ上げませんでした」

涙を流しながら感動していた。

彰は握られていない左手で頬を掻きながら、

「いや……そんな大それたものじゃないですよ。それよりもどうい

うものなのか詳しく教えてもらえませんか？ その貴方が困っているって言う霊について」

宍戸は声のトーンを落としながら彰に顔を近づける。

「はい。実は私も見たことはないんですが、ある部屋に宿泊した方たちがおっしやるには眠っているとか何か声が聞こえるそうなので。妙なうめき声が……」

彰は近づく顔を左手で押しつけながら、

「声って……もしかして嬉しそうな声とか？」

彰の声に宍戸が歓喜の声を上げる。

「おお！ さすがは“日本最強”の霊能者さまです！ もうすでにどのような霊なのかを知っておられるのですか！」

「いやさつき聞いたんだけど……」

「さすが“日本最強”です！！」

「聞けよ」

彰の言葉が入らないほどに宍戸は興奮していた。

「でしたら話が早い。今夜その霊を何とかしてくれませんか？」

「……夜つてことは泊まりかな？」

「もちろんお部屋はご用意させてもっております！ ぜひ！ ぜひ

ひにー！」

「無料？」

「もちろんですとも」

無料タダという言葉に人間はかなり弱い。この言葉が嫌いな人間などほとんどいないと言ってもいいぐらいに。特に金欠状態の人間ならなおさらだ。

しばらく霊能者としての仕事がなくバイトで何とか食い繋いでいた彰もその言葉に負けた。

宍戸の手を取ると、

「分かりました。この依頼はこの私たちに任せてください」

「ありがとうございます！ んーっま！ んーっま！」

宍戸は彰の手に顔を近づけてしつこいぐらいに接吻をしてきた。

彰はそれを嫌がるそぶりを見せずに涙を流していた。

「久しぶりの温泉……」

その言葉を聞くと穴戸は顔を上げた。

「温泉ですか？」

「まあ温泉に來たし、夜までは何も出来ないしとりあえず温泉にでも入ろうかな」

「でしたら当ホテルの自慢の温泉がございます！ 青鬼さまとそこのお嬢様のおふたりがご満足間違いなしの究極の温泉が！！」

澄明な空気の味わいが都会では感じる事が出来ないほどに濃い。立ち昇った湯気の向こうには満天に広がる星空。星々のひとつひとつが輝きを放つように闇を照らし出す。そつと頬をなでる優しい夜風が火照った体には心地よく感じた。

手ぬぐいを頭に乗せ、野趣満天の露天風呂に青鬼彰はひとりで浸かっていた。

ごつごつとした岩の間から白濁したお湯が豊富に沸いている。

ホテル自慢の美人の湯。

気持ちのいい湯だがアリスがここにはいない。

「こんなに広い風呂なんて銭湯が実家の風呂しか入ったことがない気がするな。さすがに混浴じゃアリスは入らないか」

ホテルにはこの温泉しかなく、男湯女湯などの仕切りもなく混浴しかなかった。

売店には水着なども売っていたのだがそれを着て入るのも嫌だそう。

「やっぱり女の子か……。まあ後で一杯堪能してもらうか。そうすりゃこの硫黄の香りもいいものだってことが分かるだろうし」

そんなことをひとり呟いていると。

「広いねー」

露天風呂の入り口の方から声が聞こえてきた。しかも若い女の声。いきなりの声に彰は本能のままにごつごつとした岩場の中で一番

大きい岩の影に身を潜めた。

少女の声。

あまりにも綺麗な声に彰は岩場の影からその声の主を覗き見る。十代半ばの小柄な少女。やや険のある切れ長の翡翠色の瞳にピンク色の小さな唇。絹のよう長い赤い髪。

彰が短パンにも似た湯着を穿いているというのにそれに対し少女は白い肌の上には体を覆い隠すバスタオルが一枚だけ。

すらりと伸びた肢体の華奢な体に合う小さな未成熟な胸も控えめながらも主張するほどに、少女は無防備な姿だった。

少女は空に浮かぶ三日月の光を浴びながら一歩、一歩露天風呂に近付いてくる。

それを見とれるように眺めていた彰が我に返る。

(何見てるんだ。とりあえずここから出ないと)

岩場の影からどこか逃げ道がないかと辺りを見回すが、どこにも逃げ道などなく、ここから出るには少女の後ろを通るしかない。

そんな絶望的な状況。

そんな彰のことなど知らずに少女は岩のひとつに腰を下ろしながら三日月を仰ぎ見た。

細身の足だけをちゃぽんとお湯に浸せる。

「綺麗だねー」

少女は誰かに話しかけるように言葉を発する。

それは彰に向けられたものではないのは分かるのだがそれが誰に對するものなのかは分からない。

しかし少女は会話をしているように楽しそうに頷く。

何がどうなっているか彰には分からないが今が唯一のチャンスだとかくりと頷くと意識を足に集中させた。

それがまずかった。

ここは野趣満天の木々も顔を覗かせている露天風呂。

腐り落ちた木の枝なども落ちていてそれを彰は足で踏んでしまった。

パキ

彰は痛みよりも先に音を出してしまったことに焦る。その音を少女はばつちり聞いていた。

少女はタオルを押さえながらゆっくりと立ち上がると、

「誰？」

音の出た方に顔を向ける。

つまり彰のいる岩の辺り。

心臓が情けないほどに激しい音を立てる。岩に身を潜めて誤魔化そうとしたのだが、

「痴漢は死ね！ 咲鬼！」

少女が右手を突き出すとそこに赤いグローブのようなものが具現化する。霊力が高まるのを彰は感じた。

「同業者！ やばい！」

慌てて彰は身を精一杯伏せる。

少女はそのまま高く跳躍すると一気に彰のいる岩の真上にまで詰め寄った。

「はああああああ！！！」

気合の入った声を上げるとそのまま霊力の高まった右手を振り下ろした。

彰が身を潜めていた岩は少女の拳に耐えることが出来ずに木っ端微塵に吹き飛んだ。

吹き飛んだ岩の破片から垣間見えた白い肌と赤い霊力の正体に彰は心当たりがあった。

心当たりがあったのは彰だけではなく、少女も身を潜めていた彰に心当たりがあった。

「青鬼……彰……？」

「よ、……陽菜？」

少女は彰のよく知る人物だった。青鬼家の従兄弟の赤鬼家の娘赤鬼陽菜。

いきなりの激しい動きに耐えれなくなったバスタオルが陽菜の体

からぽたりと滑り落ちる。小さな胸も白磁のような肌もすべてがあらわになって

第3話 青鬼と赤鬼の輪舞曲 其の二

赤い絨毯じゅうたんが廊下にまっすぐ伸びていた。天井には煌びやかに輝く小さめのシャンデリアが鮮やかに全てを照らしていた。

廊下には二人の影があり、影は廊下に並ぶ部屋をひとつひとつ開けては『違う』『ここじゃない』などと話しながら何かを探していた。

「いたか」

ひとりの少年が声をあげると、向かいの部屋から、

「いない そっちは？」

疲れきった少女の声が聞こえてきた。その少女の声に答えるように少年は、

「こつちもない」

「まったく使えないんだから。覗きしか能がないわね」

炎にも似た赤い髪のパニーテールを揺らしながら少女が部屋から出てきた。

「俺だつて穴戸さんがいなくなるとは思わなかったんだよ。仕方ないだろ。それと覗きつて言うのはやめて、お願い」

「覗きに覗きつて言うて何が悪いの？ 覗き魔さん」

にっこりと笑いながらパニーテールの少女が少年の隣に立つ。隣に立つと分かるのだがお風呂上りの石鹸の匂いや女の匂いが鼻に香ってくる。少年は思わず息を吞んでしまい、少女がそれを怪訝に思う。

「どうかしたの彰。まさか私の言ったこと気にしてるのか？」

「そんなわけないだろ、陽菜」

彰はそう言いながら陽菜から二、三步後ずさった。彰が少し気まぐずく思っていると、

「シヨウ。やつぱりいないよ」

床からずすと陽菜よりも少し小さめの体型の少女が現れた。

ふたりはそれに驚くこともせずに、

「ご苦労様、アリス」

ただ小さく首を傾げた。

「どこに行っただんだ？」

三人は消えたこのホテルの支配人の穴戸を探していた。どこの部屋に問題があるのかを聞こうと彰が穴戸を尋ねにホテルのフロントに向かったところ、そこには穴戸ではなく陽菜がいた。

「あれ、陽菜？」

陽菜は彰の声に気付くと、振り向き、

「これはこれは……どこの誰かと思っただら露天風呂で会った覗き魔さんじゃないですか」

皮肉たつぷりの笑みを浮かべて彰を出迎えた。

彰は申し訳なさそうに頭を下げ、

「悪かったって」

「なんてね、冗談」

「え？」

頭を下げていた彰は思いがけない言葉にびっくりして一瞬顔を上げられなかったがすぐに顔を上げた。

「まあ……もう謝ってるんだし、京都の女じゃないんだからねちねち言わないわよ。今度はちゃんと気をつけてよね」

「ん、ああ。分かった。で」

「ん？」

一番気になつてゐることを彰は聞いた。

「何してたの？」

陽菜は彰の質問に蚊が鳴くような声で、

「いないのよ」

「いない？ 何が」

「文句言いに来ただけだし、支配人がいないのよ」

「え？」

「何で私たち以外がいるのよっ！　ってね。仕事は私とこの子だけ
って聞いてたからね」

そう言いながら陽菜の肩に透過していた小さな子猫のような鬼の
子の頭を人差し指で軽く撫でた。

撫でられた子鬼は本当の子猫のように小さく嬉しそうに鳴いた。

「咲鬼さきか。いたんだ」

「いたんだ……って、あんた思い切り殴られたでしょうに」

陽菜は彰を見付けた後に一発お見舞いした。見事な右ストレート
だった。

彰は苦笑しながら、

「あのことは忘れたい。記憶喪失になりたいぐらいにね」

「情けない」

「ごもつともで　そんなことより……穴戸さんいないの？」

話題を変えるように彰がそう尋ねると、

「そうなのよ。まったくどこ行っただか。支配人どころか人の気
配がまったくしないのよね」

「それは俺たちが来たときからそうだったな。穴戸さんひとりで経
営しているのかと思ってたけど。穴戸さんがいない？」

彰は受付に近づき、受付に置いてあったガラス製の鈴を鳴らす。

音は静かに鳴り響くだけで返事が返ってくる気配など微塵も感じな
かった。

「あれ？」

鈴を鳴らしても何の返事も返ってこないことに首を傾げていると、
陽菜が近付き、

「ね。いないでしょ？　私もさっき鳴らしてみただけだし、返事
が無かったから妙だなんてね」

「どこ行っただら？　買い物かな？」

「そんなわけないでしょ。もしそうでも客を残して買い物に行くよ
うな失礼なホテルならとっくに潰れてるわね。もしかして困ってる
問題ごと、このホテルを潰そうと爆薬を仕込んでとんずらしたとか

じゃない？」

陽菜のとんでもない発言に彰は、
「そんなわけないだろ。あの人そんなに悪そうな人じゃなさそうだったし」

陽菜は肩をすくめながら、

「どうだか？ 善人ぶった悪人かもよ」

「失礼なこと言うなよ！ とにかく探してみない？」

「しょうがないわね」

「ねえシヨウ？」

首を傾げているふたりよりも深く首を傾げ、アリスが彰に尋ねてきた。

「どうした？」

「そういえば聞くのを忘れてたんだけど……この人誰？」

視線を陽菜の方に一瞬だけ移すとすぐに視線を彰に戻した。彰は納得したように小さく頷くと、

「陽菜だよ。あかぎょうな赤鬼陽菜。同業者ね」

「同業者ってことは……？」

アリスが深く首を傾げる前に陽菜が、

「そう。彰と同じ霊能者のひとり。よろしく？」

陽菜がアリスと挨拶の握手を交わそうと手を伸ばしたとき、アリスの異変に陽菜が気付いた。

陽菜の肩で気持ちよさそうに警戒心を薄めていた咲鬼が急に怯えるようにアリスを睨んだ。まるで何か奇異のものを見るかのような目つきだった。

その様子に陽菜は気付かずに、

「この子、何？ 霊力はかなり微量だし、角はないし」

不思議そうにアリスを眺め、アリスの力を見極めていた。霊能者としての勘と実力で。

実力だけなら陽菜の方が数年ほど上だ。彰はつい先月に霊能者と

しての活動を始めたまさにひよつこだ。自分で立つことすらままならないほどに経験が圧倒的に陽菜には劣っている。

その陽菜がすぐに妙と感じた。さすがというべきか、何というべきか。

「言えることはふたつ。名前はアリス、あと鬼じゃない」

「はあ？ 鬼じゃない？」

呆れるように大きくため息をつくど、

「相変わらずね、その鬼嫌い」

「悪かったな」

「青鬼と赤鬼あかきの者は鬼を従え、人外じんがいを罰し、人外を指揮し、人外を守る“鬼つかい”に誇りを持って。人外を守ることが人を守ることになり、人を守ることが人外を守ることにもなる。この言葉、忘れたわけじゃないでしょうね」

「瞬鬼の言葉だろ？ 忘れるわけないだろ」

この言葉は瞬鬼と言うか、青鬼家と赤鬼家の両家が掲げた文句みたいなものだ。生業と同様に何万回と聞かされた言葉だ。

聞かせているときの瞬鬼の顔はそれはもう嬉しそうに、誇らしそうに話す。自慢話を延々聞かされるように耳に入った言葉のほとんどを聞き流していたので、よくは知らない。

第3話 青鬼と赤鬼の輪舞曲 其の二（後書き）

少し遅れて申し訳ないです。更新はだいたい二週間をめやすにと考えております。これからも暇なときに目を通していただくとありがたいです

第3話 青鬼と赤鬼の輪舞曲 其の三

穴戸を探し始めて何時間が経ったのか、もう時計は夜の十一時を越え、もうすぐ〇時を向かえ始めるくらいまで時が経っていた。月が妖しく輝き始める時間帯だ。

二階建ての小さなホテルの全ての部屋をくまなく探したが、穴戸はおるか、一人見つかることが出来なかった。

三人は疲れきりラウンジの床に砕けるように座り込んでいた。ラウンジにいくつか備え付けてある高級そうな黒革のソファに寝そべるように座っていた陽菜が初めに声を出した。

「もうどこ行つたのよ、あのおっさんは！」

もう疲れきつた陽菜は穴戸が見つからないことに心配する前に腹が立ち始めた。むきーつと犬歯をむき出しながら手足をばたばたと駄々っ子のようにさせていた。

「落ち着けて」

彰の言葉に陽菜は体を起こすと、

「だって、いないのよ！ もう疲れた。帰りたい！」

本当の駄々っ子のようになりつつある。

彰は駄々っ子をあやすように、

「もう少し探してみよう、どこかにいるかもしれないし」

「どこを？」

じつと視線だけを彰に送る陽菜。大人の嘘を見抜いた子供のような目で見られた彰は自然と視線が陽菜からずれていく。

どこをと言われてもホテルの中は全て探し、もう部屋のひとつも残っていない。そんなことは彰も陽菜も分かりきっていた。

重苦しいため息をつく陽菜。

「本当に……疲れた」

ばたばたと手足を動かしていたが、疲れたのか大人しくなった。そのときアリスが、

「ねえ、シヨウ」

何かを思い出すように話を切り出した。

「そういえば私が一階を探してたときのことなんだけど」

「どうしたんだ？」

「入れない部屋がひとつだけあつただけ……」

「鍵がかかってたとかか？ でもアリスなら霊体になれば壁くらい簡単にすり抜けられるだろ」

「そう……なんだけど」

歯切れの悪い返事にひとつの可能性が出てきた。彰は小さく頷くと、

「よし。そこに行ってみようか、で……どこ？」

「二〇三号室」

アリスを先頭に三人は廊下を歩いていた。

赤い絨毯じゅうたんがひかれた長い廊下だった。真っ直ぐ伸びた絨毯はぴちぴちと皺が伸ばされていて、まさに整備された歩道のような感じだった。

しかしある地点まで来ると整備された道はぐちゃぐちゃに乱れ始める。さっきまでぴちちりと皺が伸びていた赤い絨毯はだらしなくしわくちゃのまま、靴汚れなども目立っていた。ここだけどこか違う雰囲気を放っていた。誰も寄せ付けないようなそんな雰囲気。

「確かに……怪しいね」

彰は廊下の壁を伝うように手をあてがいながら廊下を進んでいた。時々何かを確かめるように、指で軽く音を立てる。コンコンと叩かれた壁は寂しげな音を放つだけだ。

「何してるのシヨウ」

奇妙な行動をしている彰にアリスがそう尋ねる。

「ん……何でも」

「これでホテルなんてね」

陽菜は呆れるように息を吐く。

「壁にはペンキの跡に、天井の明かりも切れ掛かってるし、特にひどいのはこの空気ね。最悪最低」

陽菜の言う通りだった。この廊下だけ何故か空気が淀んでいるように感じた。冷たく、重たく　何より暗く感じた。

「ここ」

歩いている内にアリスは立ち止まっていた。アリスが言う二〇三号室の目の前で。

「ここか」

彰が二〇三号室の扉に手をかけるとドアノブは抵抗することなくすんなりと回った。

「あれ？」

彰は不思議に思いつつも部屋の中に入っていった。その後ろに陽菜がついていく。

部屋の中は薄暗く、

「明かり……明かりっと」

陽菜が明かりを探していると、

「お、あった」

陽菜が明かりのスイッチを見つけて明かりをつけると、

「うわ……これはひどい」

部屋は荒れ放題だった。ぼろぼろの備え付けの小さな白いテーブルの木が剥がれ、いくつかの三脚の椅子の脚は確実に折れた状態だった。床や壁にはナイフか何かの刃物で切りつけられた傷や何かで強く擦られた少し焦げ付いているような焼けこけた跡などが到るところにあった。

ベットなどはもう人がそこですやすやと寝ることなど出来ないほどに古びていた。

「何なのここ」

「何って部屋でしょ」

「これが……部屋？　これが部屋だって言うなら私は外で寝た方がまだマシね」

「まあ……確かに……ね　　ってあれ？　アリスどうかした？」

アリスは部屋に入らずに扉の前で立ち尽くしていた。

「ううん、ただ……入れないだけだから」

「入れない？　もしかして　？」

アリスの言葉に彰は壁を触り何かを探し始めた。そして、

「あつた」

彰が探していたのは壁紙と壁紙の僅かな隙間だった。彰は床に落ちていた鋭く尖った木々の破片を取ると、壁紙の間の隙間にねじ込み、壁紙に大きな傷を入れると、その間に指を入れて壁紙を一気に引き剥がした。

絶句だ。見事な絶句だったと我ながら思った。

「さっきの違和感はこれだったんだ。アリス入って来ちゃだめだからね」

引き剥がした壁紙は二重に重なっており、元々の壁紙の上には隙間なく、結界を創る札ふだが貼られていた。壁、天井　全てに貼られていた。

「心配しないで。まず入れないから」

アリスの体質ではこの結界はまず越えられない。触ることすら厳しいとアリス。

部屋には彰と陽菜とアリスと同じ人外の咲鬼もいた。

死霊の弱点であるどんな壁でも床でも土でもすり抜けられる霊体であることが仇となっているアリスはこの部屋に入ることが出来な
いでいた。

ここまで綺麗に札が貼つてあると不気味と思う前に呆れる。

「はあ……まったく馬鹿みたいに貼つて。これじゃ何の意味もないの」

陽菜はそう言いながら壁から一枚の札を剥がす。

ひらひらと札を揺らしながら、

「しかも術式がばらばら。いったい何人の霊能者がここに来たのかしらね」

「わかんない。でも、それだけ大変ってことでしょ」

「まあ……そう言うことかな。でもここに閉じ込められるだけってのは納得出来ないけどね。何の解決にもなっていないじゃない、これだから二流は困るわ」

陽菜の表情はどこか憤慨しているようにも見えた。

「あつ」

アリスが静かに声を上げ、細い指で明かりが届かない部屋の置くを指差した。

彰がそれに気付き、

「何？」

「今何かがいた気がしたんだけど」

アリスの指先に彰が近づくと、

「あれ……誰か いる？」

薄暗い闇の中に人影がぼんやりと見えた。

何となくだけど、心当たりがあった。本当に何となく。

だから少しおどおどしながら、

「穴戸……さん？」

そう聞くと影はゆっくりと振り向いた。

見当どおりだった。振り向いた人物は確かに穴戸だった。夜になつたと言うのに多量のジェルがびったりと付着していたぎらぎらと油ギツシユな輝きを放っていた。しかし穴戸の口には見慣れない物がついていた。

「あれ何？」

「……猿ぐつわでしょ……多分」

猿ぐつわという物の知識はあった。しかし実物を見たことはなく、それが本物だと認識出来ずに、初めは何かの冗談ではないのかと疑った。

でも、それはやはり知識の中の猿ぐつわと同じで、

「ぐう」

穴戸が言葉を発するたびに空気が遮断されたような妙な音になる。

それが何度も続き、

「……シヨウ」

最初にアリスが気づき、

「

次に陽菜の肩に乗っていた咲鬼が気付いた。

目の前にいる人物は確かに三人が探していた穴戸ではある。しかしそれが今の今まで気付かずになっていたが 穴戸は霊体であった。

霊体と人間の違いはほとんどない。霊力が僅かにでもある者は霊を見る事が出来る。霊は昭和で活躍した白黒テレビのように淡白な色などではなく、現代のプラズマテレビよりも鮮やかだ。それを霊と認識するには相当の霊力と何百人という霊を見た経験が必要だ。彰も陽菜も今やっと気付いた。穴戸が霊であることに。

穴戸は手足を縛られているわけでも、身動きが取れないわけでもない。ただ、猿ぐつわをしている。その光景は妙だ。

「ぐう ぐう」

穴戸は嬉しそうな悲鳴を出す。その様子に陽菜が、

「気持ち悪い」

そう言った。穴戸を見る目は虫を見る目よりも酷く、目の前のものを生物として認めていないようなそんな目。

穴戸はその言葉に傷つくどころか、

「ぐう

「!」

今までよりも嬉々とした悲鳴を上げる。言葉は何を言っているのかわからないので言葉のニュアンスだけでそう判断しているのだが、何故か自信はあった。喜んでいると

人間と言う生き物は異国の人間とニュアンスだけでコミュニケーションをはかれると言うが、流石に悲鳴だけでは意見の交換など出来るわけもなく、

「外しなさい」

そう陽菜が彰に言う。

「え、俺？」

「そう」

彰の謎かけに陽菜は即答した。彰は仕方なく穴戸の猿ぐつわを外
そうと手を伸ばす。

穴戸は抵抗するかと身構えたのだが穴戸はあっさりと猿ぐつわを
解いた。

穴戸はぶはつと口の中の空気が一気に吐き出し、新しい空気を一
気に吸う。そして、

「素晴らしい！」

そう言いながら陽菜の足元に擦り寄っていく。陽菜の顔が一気に
引きついていくのが離れていても分かった。

「貴方のその相手を蔑む血にも似た赤く淀んだ瞳にその端正ではあ
るけれど冷厳たるその顔も全てがこの私のMマの心を燻る！ 昂ぶら
せる！」

ぺろぺろと陽菜の靴をなめ始める穴戸。陽菜はぶるぶると震えだ
し、

「離れる！ この屑がああああ！！！」

足先を穴戸の顎に入れると一気に足を振り上げた！

穴戸は蹴られた球のように天井、壁に何度も跳ね返り陽菜の足元
にぼろぼろになって戻ってきた。

「もっと私を蹴ってください！ お願いします！！！」

素晴らしいながら穴戸は高く臀部でんぶを突き上げる。

「誰が蹴るかあああ！！！」

そう言いながら陽菜は穴戸の臀部を高く蹴り上げる。

今まで傍観していた彰が思い出したように、

「穴戸さん……ですよね」

この目の前にいる人物は確かに穴戸ではあるが、明らかに昼ごろ
に会った穴戸ではない。どこか壊れた感じがする。

穴戸は彰の問いに、

「そうですね？ 何か問題でも？」

酷く冷静にそして紳士的に答える穴戸に彰は自分がおかしいので

はと思い始めた。

しかしおかしいのはこの目の前にいる穴戸だと思う。どうして高く臀部を突き上げて少女に蹴られて喜んでいる人物を普通だと思えるのか。冷静に考えればおかしいのはこの目の前にいる穴戸である。まず何から聞けばいいのか彰が長考していると、

「殺す！ この変態殺す！」

はあはあと息を切らしている陽菜に、

「もう死んでるから」

と、一言だけ言っておいた。

「説明させてもらいます」

と、何故か服を脱ぎ始める穴戸。服の下は何故か亀甲縛りだった。「ここは宿泊施設ではございません。もちろん連れ込み宿でもありません。ここは世の紳士、淑女が集うSM倶楽部と言う名のホテルです」

穴戸が言うにはここはHOTEL『ホテル』ではなく、SM倶楽部『ホテル』だったらしい。

となるとひとつの疑問が出てきた。彰は墮鬼から渡された一枚の名刺を穴戸に見せた。

「じゃあこれは？」

名刺には確かに、HOTEL『ホテル』と書いてあるのに穴戸はここはHOTELではないと言う。

穴戸は彰から名刺を受け取ると、

「何ですかこれは？」

見たこともない物を見た人物はまず疑問を口に出す。

「私の名刺はこれですよ」

そう言い穴戸は一枚の名刺を彰に渡す。

名刺にはSM倶楽部『ホテル』と書いてあった。

ということは、

「あのおかま……謀ったな」

この名刺は穴戸の物ではなく、堕鬼が作成したことになる。とりあえず帰ったらおかまを一発殴ることを心に決めた彰は、「穴戸さんはどうして今だに成仏していないんですか」「霊が成仏しないのにはふたつの原因がある。ひとつはこの世に未練があること。そしてもうひとつが単純にあつちの世界に行きたくないかのどちらかだ。」

未練があるならそれを満たすのが霊能者の仕事である。

穴戸は悲しげな表情を浮かべながら、

「満たされないのです」

「満たされないとは？」

「私はSMプレイ中に女王様に殺されました。もちろん不運な事故でそれを恨んだこともありませんが、むしろそれはもう本当に幸せな死でした……私の夢が叶ったのですから」

「夢……とは？」

「プレイ中に亡くなることが私の夢だったのです」

他人が聞いたらドン引きするような夢を男の浪漫であるように話す穴戸の目は子供のようで、

「気持ち悪い」

陽菜の素直な感想も出る。

「ですが」

ふつと顔を上げ、遠くを眺めながら話す穴戸は三浪した受験生が誰もいない崖の上にひとり佇んでいるように不安定な感情に支配されているように、ぼんと何か余計な一言を言ってしまうとそのまあいなくなってしまうようなそんな表情だった。

「初めはよかったのですが、気付いてしまったのです」

「気付いたって何にですか？」

「死んでしまっただけはもう二度と痛みを感じることが出来ない！」

「は、はあ……」

彰の味気なく、感情の籠らない相槌に、

「あのおっさんが天国に行くなら私は望んで地獄に行く！ 絶対にあのおっさんとはもう二度と会いたくない。て言うか死ね、あの世でも死ね！ あとお前も死ね！」

そう言うてからまったく口を利いてくれなくなった。

彰があれこれ陽菜の機嫌を取ろうと、陽菜の近づこうとすると咲鬼が本気で殺そうとする視線、いやこれは最早 死線と言った方がいいのではないかと思う目つきで睨んで来るものだから近づけなくなっていた。

「やっぱまずかったかな……？」

陽菜がぴくりと動くと、

「まずかったかな？ じゃない！ お前は何ですか、隠れSですか。それとも天然Sと言う属性の悪魔ですか！ SとMならあんだとあのおっさんで気持ち悪い儀式をやればよかったんじゃないのですか！」

「そんなに怒らなくても」

「うるさい！ 死ね、誰からも看取られることなく死んでしまえ！

まったく……無料働きでこんなことするなんて思わなかったわ」

陽菜の言葉に彰の耳がぴくぴくと反応する。

「今何と？」

「だから無料働きよ！ あのおっさんが依頼主本人なら前金なしなんだから依頼料なんてもらえるわけじゃない！」

無料。金欠の人間が聞けば泣いて喜ぶ言葉なのだが、どうしてだろつか。

血の涙が出てくるのは。

「無料働き……」

P.S.

「そつえばあのお爺さんは何だったの？」

「お爺さんって？」

「ほら、ここのことを教えてくれたお爺さんだよ」

「ああ、あの客引きしてたお爺さんか。多分あのお爺さんも幽霊だったんじゃないのかな？ 穴戸さんが亡くなった時とほとんど同じ時期に亡くなったんだってさ」

「ぞおおお」

「……無料働き」

「まだ言ってる……」

第4話 少女の敵 序章

一体何が起こっているのかを理解するのかを考えた。それが無駄なことだと理解するのに時間はかからなかった。いつものように仕事をして帰ろうとしたときに急にその少女は現れた。「あなた人外？」と少女は尋ねてきた。少女は灰色のプリーツスカートに長袖のブラウスという冬空の下では少し肌寒そうな格好の中学生ぐらいの少女だった。自分はその言葉の意味を履き違えた。自分の正体を知っている青鬼あおきか赤鬼あかきの霊能者の人かと思った。自分がこの町で仕事ができるのも全て青鬼と赤鬼の霊能者がこの霧ヶ崎町きりがさきに暮らしているからだ。感謝をしている。人外も人も暮らすこの霧ヶ崎町の霊能者に

だから「はい」と答えた。それがきつと大間違いだった。

人が急にいなくなった。今までは町の雑音がうるさいくらいだったのに、夜の浜辺のようにしんとした静けさが自分の心に警報を鳴らしていた。闇の中に立つ少女が自分の問いが求める答えだということを知ると、どこから出したのか。大きめのクッションの付いていたヘッドフォンを取り出し、音楽を聴き始めた。シャカシャカとどこかで聞いたことのあるような音楽の漏れる音が自分と少女の闇の中のBGMになった。このBGMが自分と少女の命がけの鬼ごっこになるとは思いもしなかった。

少女はヘッドフォンから流れる音楽を無表情で聴き、

「人外……、そう」

そう言うと、プリーツスカートの裾から小さな何かを取り出した。それはどこかで見たことのある何かで、

「将棋の駒？」

それにしか見えなくて、意味が分からなかった。自分が人外であるとして将棋の駒が関係してくるのか。将棋のプロという訳でもない自分と将棋でも打ちたいとも言っのたろうか、などと、甘

く、緩く、生ぬるく、愚かな考えがそもそも間違いだった。

生暖かい肉を切る音が耳を尖らせた。何事か、それを理解するのは思考ではなく、痛覚だった。

「あ、……あ、な、……に、？」

自分の左腕がずるりと、ずれていた。それは義手が外れたなどと優しい事故などではない。自分の現存する肉の塊が確かにずれ始めていた。その状況を視覚した途端、

「うああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

現実を理解した。何が起こったのかを目視した。

腕がなくなった。

紙粘土をプラスチックのナイフもどきで切った時のような、がさがさとした断面ではなく、筋肉と骨がくつきりと分かる“ヒト”の断面。慌てて腕を取るがこんなものが何の役に立つと言っのだろうか。もしこの腕がくつきく可能性が確かに一パーセントでもあるとしよう。しかし命が助かる可能性は一パーセントよりも限りなく〇に近い。少女は自分を殺そうとしているのだ。存在を消そうとしているのだ。

「死んで」

そう少女は自分の肉を切った時に誰にも聞こえないような細かい声でそう言った。思い出した。私が生ぬるい現実の中で確かに目の前にいる中学生ぐらいの少女がそう言った。

私は自分の肉の塊を少女にぶん投げると、少女から逃げ出した。

もう関係なかった。腕がなくなろうとそんなものどうでもよかった。人外としての勘が私に告げている。逃げろ！ でなければ死ぬぞ！

少女が見えなくなるところまで逃げる！

そんなこと言われずとも分かっている。この鬼ごっこに負ければ待っているものは死のみ。

「止めてくれ、頼む　　っ、もうこの町から立ち去る、本当だ！
だから、なっ、」

宵闇が迫るころ、誰も来ないように『立ち入り禁止』と書かれてあるまったく意味の成さない立て札が扉を塞いでいた鎖ごと灼熱のナイフで裂かれたような鮮明な断面が見えたまま、真つ二つに引き裂かれていた。

ビルの屋上には一人の少女が立っていた。頭には大きなヘッドフォンをしていて、そのヘッドフォンからポップな音楽がシャカシャカと漏れていた。少女は音楽を聴きながら男を追い詰めていた。

その少女の印象は人形に命が吹き込んで動き出したような無表情の恐怖が男の動きを茨の鎖で縛るように動きを制限させていた。動けば腕がもげる。動けば殺される、その茨の鎖は確実に男の命を削っていた。

表情はない。ただ目の前の者を殺そうとする殺気みたいなものもこの場には合わないポップな音楽がそれをかき消していた。それでも男は腰を落としたまま後ずさる。あまりの恐怖に力が出ずに、立つことが出来ないでいる。この光景を一言で表すのなら“異常”だった。音楽を聴く少女が男を気圧だけで男をビルの屋上の端まで追い詰めていた。あまりにも見たことのない光景に“異常”と感じることしか出来ない。

「頼む、助けてくれ！」

男は無愛想な顔を精一杯にして無愛想な笑顔を作る。壊されないように、殺されないように、命乞いをする。

その男の体はすでに傷だらけだった。刃物で切られたような傷は一つもない。ただ、目立つ傷は体に油をぶっかけて灼熱の炎の槍で油の上から突いたような中心は突かれる前に金属が溶けたような人間の皮膚に大きな焦げ痕の傷が幾多にもあった。痛覚などはほとんどぶつとんでいて、すでに男は痛いという感覚が麻痺していた。痛みを訴える前に命を訴えた。助けてくれと、何度も。

少女は手に持っていた将棋の駒を指で空中に弾く。そして目を細

めながら、

「で、終わり？ 懸命な命乞いは？ はい、死亡確定。あんたが生きてようと意味なんてないの。ただ、ひとりの人外じんがいが消えるだけ、ひとりの人口よりも軽くて浅い。そんな薄っぺらい命の重さもない屑みたいな命が消えるだけ」

少女から出た言葉はあまりにも無機質だった。機械が用意された文字の羅列をただ再生しているだけの機械的な少女の声に男は絶望した。

そう告げられた男はすべてが切れた。息も、感情も、目も、口も、本能も、手も、指も、何もかもが切れた。男の内から出てきたのは触手の先に刃物のように鋭く研ぎ澄まされたその男の正体がすべてを切るように現れて、少女に襲い掛かる。

少女はその正体に、

「人外A確認。存在を消去」

その一言だけぶつけると先ほど弾いた将棋の駒を指で挟むと、

「金ジン」

少女がそういいながら掴んだ将棋の駒は確かに少女の言う通りの金だった。

将棋の駒が少女の手に合うように巨大化していくと少女が持つには不釣り合いな一本の矛に変化していく。小柄な少女の一五センチの身長よりも大きい一八〇センチほどの大きな矛。これだけ大きければそれなりの重さがあるはずの矛を少女は重さをまったく感じていないように軽々しく振り回す。

舞った矛からは線香花火のような弱弱しい小さな火花がちかちかと暗闇の中に光を照らす。

人外の男に対するせめてものの、手向けの花なのか、それとも、男を殺す火花なのか

答えはすぐに分かった。

「あ、……あ、」

少女は男を手向ける気などミクロほどもなかった。ただ、

「消去確認」

男の存在すべてを消去した。

少女の持つていた矛が男の体を貫いた瞬間に矛全体が真つ赤な炎に包まれ、男の存在を抹消した。もし、この世に男の存在がまだあるとするのなら男を包み込んだままコンクリート部分に焼け残った『影』のみ。それもうつすらと残っているだけだ。こんなものバイトの清掃員でも簡単に消すことが出来そうなくらいに弱く、儂く。

少女は焼け消えた男に見る目をやらずに、音楽を止めた。

「お前は死んだ。それだけ、たった　ね。私がここに来たのはお前のためじゃない。あいつを殺すためだ、“偽りの日本最強”」

そう言う少女の表情には憎しみの念しか残っていなかった。

第4話 少女の敵 序章（後書き）

ちょっと長めの長編です。出来ればお付き合いください

第4話 少女の敵 其の一

一月二〇日から二月十八日生まれの水瓶座の貴方の運勢は現世において絶対最強の日！ 今日、行動を起こすのは吉、いや大大吉の最強日！ 恋愛運仕事運健康運においてこの日よりもいい日など貴方にはありえない！ だから何かをするのはこの日にしましよ。好きな女の子、男の子に告白して青春を謳歌するのもしよ。でもあまりにも謳歌しすぎて他人の嫉妬を受けてしまうのもどうかと思っからほどほどにしておけよ！ お姉さんとの約束だぞっ

そんな怪しい宗教にでも誘うような言葉をさぞ楽しそうに垂れ流したテレビ局を軽く恨みながら一人の少年が町の大通りを走り抜けていた。

「運は確かにいいのかもしれない。でも さ、」

ぼさぼさの茶髪を掻きながら少年、青鬼彰は走りながら今朝見たお天気お姉さんの『幸せのための絶対最強の占いコーナー』なんて言う今だに世間の占いブームに乗った朝、テレビを付ければどのニュース番組にもあるような信用の欠片がこれっぽっちもない誰が考えてるのかよく分からない占いコーナーことを思い出していた。

青鬼彰は確かに運はいい。ちょっと調子に乗っていた時に気の迷いで買った宝くじが四等（一〇万円くらい）当選したこともある。

ちょっと喉が渴いたから近くにあったルーレット付きの自動販売機で二二〇円分の缶ジュースを買えばルーレットがまさかの確変状態に入ってしまった二〇倍の二四〇〇円分の缶ジュースが荷物になったこともある。そう、運だけはこの少年のとりえだった。神様がえこひいきでもしているように少年が願えば運が傾く、はずだったはずだったという理由が今まさに彰を追いかけてきていた。

「待て！ 待てっつてんだらうが、青鬼彰！」

後ろをちらりと振り返ってみる。確実に距離が縮まっていた。彰の後ろには白いジャージ姿の女が鬼の形相で追いかけてきていた。

「これはないだろ！ 何が絶対最強の日だよ！ 絶対最悪の日だよ！ 真逆だよ、もう信じないからな！ 見ないからな！ あのいちき低俗占いコーナーなんか！！」

この状況のどこが絶対最強の日なのか、あの占いコーナーにクレームの電話を一〇件ほど抗議したくなる。走りながら逃げる少年は目の前に転がる青いポリバケツを蹴り上げる。

日曜の昼から追いかけてこをする羽目になるとは彰自身思っていなかった。ただ町をぶらぶらとして、適当に時間を潰そうと思っていただけなのに全力全開で町を舞台にした壮大な鬼ごっこをする羽目になると誰が思おうか。

人がうじゃうじゃいる町の大通りを人を掻き分けて高速で通り抜けていく。彰の思惑はこうだった。とにかく人が多いところを何度も通り人ごみの中に紛れ込んで消えるという姑息な手段を考えてはいたのだが、

「逃げるな！ 待て！ つつ、邪魔だ！」

この考えが間違いだったことに町を何周かして気づいた。彰を追いかけていた彼女が目の前に塞がった人を力強く右腕で払いのける。そういえば彼女が迷路を解いていた時に名言が生まれたのを思い出した。『道は俺が作る、邪魔なものは全て排除！ 排除！！ 排除！！！！』そう言った彼女は迷路の道を消しゴムが何かで消していたのを思い出す。

今まさに彼女は道を作っていた。目の前に塞がる人を腕で払いのけ、まっすぐ彰に迫っているのに対し、彰は八工のように右往左往して人をよけながら進んでいる。真っ直ぐ突き進むのとちよこちよこ右に行ったり左に行ったりとどちらの距離が短いかと聞かれれば、そんなものはクイズにならないくらいに簡単だった。足の速さが同等ならば当然、

「捕まえたぞ、青鬼彰」

彼女に追いつかれるのは必然。鬼ごっこは彰の敗北で幕を閉じた。

「言い残すことはあるか？ 青鬼彰」

近くの彼女の家まで連行された彰は壊れた人形のように抵抗の色さえ見せずに彼女に従った。彼女に抵抗すれば痛い目に遭うのは目に見えていたから。

部屋の中は脱ぎ捨てられた下着やらタバコの吸殻の山がいくつもあつたり、ビール缶が部屋を埋め尽くすほどにあつたりと、独身女性の部屋という感じの部屋だった。下着が脱ぎ捨てられているのも彼女は気にもしない様子で、

「言い残すことはあるのか？ 俺の授業をボイコットしてくれた青鬼彰くん？」

年中敷いているのか少し湿った布団の上で正座をしていた彰が彼女を見上げて、

「……ありません」

顔を俯かせたままそう返事をした。目の前にいる彼女は佐倉唯^{さくらゆい}。彰の学校の担任。

佐倉は正座で座っている彰の目の前に座り込み、あぐらをかくと煙草を吸い始める。ぷはーっと、白煙を口の中から吐き出すと、

「お前の本業は何だ？ 仕事か？ 学業か？」

佐倉が彰を連行した理由がこれだ。佐倉は彰がどついう家系で何をしているのかも全て知っている。それでも佐倉には許せないことがあつた。

「学業です、はい」

自分の授業に出てこない奴がどんな言い訳^{いじやく}を重ねようとそれはまったくの無駄に終わる。

それでも多少は言い訳^{いじやく}をしたくなるのが心情というものだ。その言い訳^{いじやく}がどれだけ効果をもたらすのかはどうでもよくて、心を落ち着かせるための材料にはなる。

「せ、先生……ひとつ質問いいですか？」

びしっと授業参観に来た母親の前でいいところを見せようと答えも分からないのに手を上げる子供のように迷いなく上げた手を佐倉

は息を吐きながら、

「何だ？」

仕方なく指差した。

頭の中はすでにパンク状態で何を言うべきなのか分からなかった。彰はとりあえず頭の中に浮かんだ言葉を口にすることにした。

「僕が助かる可能性は何パーセントほどありますでしょうか？」

目の前にいる体育教師のような風貌の数学教師に彰は答えを求めた。返ってきた答えは求める数字の五〇パーセント以上ではなく、「ゼロ」

笑顔の佐倉はそう言い彰に立ちふさがる。

目の前にいる佐倉の正体があらわになる。佐倉の頭には人間にあるべきではない鬼の角がぼんやりと佐倉のぼさぼさの頭に視覚できた。

「優しい俺はどんな悪党でもこう言ってきた。仏のような笑顔でこう言ってきた、一発で勘弁してやる、と」

そう言いながら佐倉は右の拳をふるふると震わす。その拳がどこを捉えているのかと言うのは因数分解などよりも簡単で、

「ちょ、まっ」

「歯あ食い縛れえ！！」

「お前をここに連れてきたのには理由がある。だからそんなに痛がんな！俺が悪者みてーじゃねえか！お前を殴ったのはついでだ、つ・い・で！」

「普通ついでで人の顔面を思いつきりぐーで殴りますか！ジャイアニズムMAXのわんぱく坊主ですか！鬼ですか！」

顔をすりすりと摩りながら彰は佐倉に言う。すると佐倉はにっと笑い、

「鬼だよ、知ってたんだろ？」

佐倉は自分の頭の天辺にある人間にあるべきではない角を細い指で指し示す。彰の視線がゆっくりと佐倉の頭の上に移る。彰の視線

が頭の角に移り終わるころに佐倉の煙草が小指の第一間接よりも短くなつた煙草を何一〇ほどに積まれた煙草の山の底辺に微かに見えただい緑色の灰皿に突っ込む。そしてもう一本の煙草にまた火を付ける。

「生徒の前でよく何度も煙草吸えますね」

彰が呆れるようにそう聞くと、

「煙草は俺にとっちゃ空気を吸うのも同義なんだよ、吸わなきゃ死んじゃうんだよ。俺は誰の前でも煙草は吸うぜ。陰湿な教頭の目の前だろうと瞬鬼様の目の前だろうとな。ま、お前の前じゃ何の気兼ねなんかありゃしないがな」

佐倉唯と言う人物はこういった人だ。

教師という立場でありながら自由奔放というか傍若無人というか、とにかく自分が大好きな人には変わりない。そして彼女は人間ではない。人間に角が生える訳もないのだから佐倉の頭の上にある角こそが彼女が人間ではないと証明している。彼女の本名は唯鬼^{ゆき}。元々は青鬼に従える鬼だったが、佐倉が従えていた契約者が死んでからは霧ヶ崎町の教師になった。この風貌でかなり頭がいいので教師になるまでそれほど時間はいらなかった。時間がかかることと言えば、やはり人の中に紛れ込むことだった。

この町は人と人外の者が共存している。ただし、青鬼と赤鬼の者意外の人間は町に人外がいることは知らない、知ってはいけない。それが人間側に対するルール。

人外がもし人間に存在がばれてしまうと青鬼にある鬼門から町を出て行かなければならない。そして二度と町の敷居をくぐつちやいけないっていうルール。あともう一つだけ人外にはルールがある。それが佐倉の右指にはめてあるシルバリング、これで人外がどこにいるのかを青鬼の現当主である青鬼春が把握出来るように。この町に住んでいる人外は常に監視されているようなものだ。暮らしにくいと言えそのままだが、今まで一度も文句を言いに来た人外は一人もいない。意外に満足しているのだろうか。

「で、だ、彰」

二本目の煙草をふかぶかと吸っていた佐倉が一冊のノートを渡してきた。少し古びているがまだ使えそうなノートだ。彰がそれを受け取って中を見てみると、

「名前？」

人物の名前がぎつしりと書き込まれていて、何人かの名前の上には黒い線が引かれていた。まるで、

「気づいたか？ そこに書かれているのはこの町に住まう人外」

佐倉の言葉に心臓が驚づかみされたような妙な悪寒が走った。自分が想像した答えがもし当たっていたならば、どれだけ怖いものかを一瞬想像してしまう。その恐怖を振り払うように首を横に振ると、

「この線って何？ まるで……」

「お前の想像通りだよ、線が引いてある名前の奴はいなくなった、ぱったりとな」

「いなくなっただって……、旅行 とか？」

空気が重くなり始めたので少し和らげようと軽くポケというものをやってみただが、どうもそういう空気ではないらしい。佐倉は目を細め、

「冗談は止めとけ、マジだからな」

「マジ……ですか」

佐倉の目に引き込まれそうになる彰は冗談やらを言う空気ではないな、と、もう一度佐倉に渡されたノートに目を通す。

いなくなっただけ人外に共通点は見当たらない。男だったり、女だったり、大人だったり、子供だったりとはらばらだった。唯一共通点があるとするのならこの一点だけ、全てが『人外』であることでも『人外』だからいなくなっただなんて、『気に入らなくなったから捨ててしまおう』なんて我が侘な子供の言いそうな理由だ。そんな理由で町に住む『ヒト』を消していい理由などとは思えない。もし、そうだとしても理由はあっても、目的というものが存在しなくなる。自分たち人間は生きると言う目的のために牛や豚などの動

物を殺すことは確かにある。でもこうも無差別に『人外』を消してしまうことに対しては納得することなど出来ない。

「ま、お前を呼んだ理由てのがこれだ。……はあ」

佐倉は煙草を灰皿に突っ込むと大きくため息を吐いた。

「情けないよな、ほんと……」

そう言いながら佐倉は三本目の煙草に火をつけ始める。煙草の煙を天井に向けて大きく吐く。もわもわと天井周辺に白煙がたまり始める。

「お前に仕事なんか頼むまで落ちぶれちまったか、俺も」

「それは俺を馬鹿にしてると受け取っていいんですか？」

「ご自由に。ま、頼むわ。仕事の内容はなんとなく察してくれ
たかよ」

最後の煙草をまた山盛りの煙草入り灰皿に突っ込む。彰は煙たそうに小さく咳き込むと、

「なんとなくね」

佐倉の部屋を出て行くこうとしたとき、彰の後ろからまた煙草に火をつける音がした。

第4話 少女の敵 其の二 行間(前書き)

ちよい短いです

第4話 少女の敵 其の二 行間

黄金の髪を揺らしながら人ならざるものにしか見ることの出来ない少女アリスが空の絨毯に座り込んでいた。

アリスは町を見下ろしながら、呟いた。

「また……ひとり……消えた」

ここ最近は特にひどくなっていた。

小さな気配が何かを探すように次々に町の人外の気配を消していた。存在さえも。

「躊躇しないんだね。あなたは」

小さく白い手を町に伸ばす。そしてそれを握りつぶす。

「ふふ……」

アリスの雪肌の顔に赤い弓の月が浮かび上がる。

「やりすぎ……かな？」

アリスはゆっくりと立ち上がると、アリスの姿はその場から消え失せた。

意味のない搜索を続けてかれこれ2時間近く経ったのかもしれない。

彰は歩き疲れて公園のベンチにぐったりと座り込んでいた。

町の人外を消しているという人物を探すことは分かる。しかし、手がかりになりそうなものがこの名前の書いてあるノートだけ。しかも全員が全員彰の知らない人物ばかり。

そんなに大きくはない町とはいえ町の中から人を見つけることは出来ない。森の中から一本の杉を見つけるのでさえ何ヶ月もかかる作業というのに、数日でこの人物を見つげるなんてことは出来る出来ない以前に不可能な気がしてきた。

「はあ……」

「どうしたの？」

彰が声の方向に顔を向けるとアリスが立っていた。

朝からいらないと思っていたアリスはいつものようにそこに立っていた。少し心配していた彰は少しだけ安心した。

「どこに行つてたんだ？」

そう彰が聞くと、

「女の子の秘密」

それだけ言うとアリスは彰の隣に座ってきた。

「なにそれ」

「ねえ、シヨウ」

アリスはいつものような口調でいつもと違う顔になっていた。それがどうにも気になった。

「また、消えた」

「消えた？」

アリスには人外が消えたことは伝えていない。なのにアリスはそれを知っていた。だから何が消えたのかを確認するつもりで聞いた。

「何が？」

「シヨウは私の特技って知ってる？」

「特技？」

「そう。私ね、一応死霊なんだよね。シヨウはあまり気にしてないかもだけど。死霊ってね、他どの有機物、生物の気配　ううん、魂って言った方がいいのかも。その探知が特技って言えるの」

「魂……」

ぞくりと背中が凍る。忘れかけていた死霊の気配が彰の全身を襲った。

「魂を狩る死霊……なんて素敵な響きでしょ？　もちろん響きだけじゃないよ。死霊の目には人や人外の姿は魂と一緒に見えるの。でね、ここ最近……人外だけの気配が消えてるの。昨日で一〇人、今日で五人。人外だけが次々にね」

その顔にはそうした人物に対する同類である人外を殺されたこと

により発生する憎悪がまるで無かった。あるのはただの、笑み。

そう、笑ってる。アリスのことはよく知らない。そう考えていた。でもただ見ていなかっただけなのかもしれない。

“ヒト”としてのアリスじゃなくて、“死霊”としてのアリスのこと

第4話 少女の敵 其の三

ひたすら町を歩き回った。

もはやこうするしかないと思ったからだ。これ以上被害者は出たくない。そう考えた。アリスの目が怖くも寂しくも見えたからかもしれないし、でもそれもただの言い訳なのかもしれない。

ただ、不安だったのかもしれない。

町を歩き回って、走り回って、少しでも気を逸らそうとしているだけなのかもしれない。

ただの言い訳から意外にも手がかりは見つかった。

目の前に広がる光景はただの異常だった。いつもは人がごった返す大通りだというのに人の気配を感じられない。あるのは彰自身とその隣で冷たい表情をしているアリスだけだった。

ここで戦争でもあったのか、町の壁という壁が焼け焦げていた。火炎ビンか何かで壁や地面をダーツの的にでもしたように、所々が円状に広がる焦げ跡が目立っていた。

「……、」

アリスの眉がぴくりと動いた気がした。

勘違いだったのだろうか。すぐにアリスはいつものような笑顔を浮かべた。そして、

「私、つまらないから帰るね」

そっくりアリスは雲がかかる薄暗い空に消えていった。

一人残された彰はアリスが消えていった空をしばらく眺めていると、

「あら？ 来てたの」

後ろから全身が身震いするような気持ちの悪い声が聞こえてきた。これほどの気持ちが悪い声の持ち主は彰の記憶の中でたったひとりしかない。

くったりとした白衣をブランド物の黒いスーツの上から羽織って、

気持ちの悪い内股で歩いて見ている見た目イケメンの堕鬼だ。

どうしてここにいるのか、理由は聞くまでもなかった。

「これは何だ」

聞いたのは彰だ。

堕鬼は顎に手を当てながら大通りを見回す。

「戦闘でもあったんじゃないかしら。それもレベルの高い追走者が逃走者を、追い詰めた感じの、ね」

ということはつまりは、誰か誰かを追いかけ、誰かがやられた。それもあつという間に。焦げ跡はいくつもあるが、それ以外の物が存在しないということは、

「抵抗しなかった、……違うか、抵抗したんだ。意味はなかったけど」

自分の命が関わっているというのに、何の抵抗もしない“ヒト”なんて存在しない。それでも追走者は非情にも逃走者を消した。

ぎりつと、喉を鳴らす。冷たく感じるはずの唾が熱く感じた。どうしてこうも簡単に命を消せるのか、理解出来なかった。

「彰ちゃん、怒るのは勝手だけど……手がかりがなくなる前に何とかしないと」

その堕鬼の言葉に耳を傾けると、救急車がパトカーのサイレンの音が聞こえてきた。

「人払いの効果が消えてきたのね。早くしないと全部洗い流されちゃうわよ」

「わ、分かった」

サイレンの音はかなり近い。もう間もなく仕事熱心な人たちがやってくる。何とかここで手がかりを見つけておかないと、かなり面倒なことになる上に、また被害者が出るかもしれない。そんなことはさせない。絶対だ。

町は荒れているわけではなく、ただ壁が焼け焦げているだけで、それ以外に変わったことと言つとやはりこれが。

彰はずつと気になっていた物の目の前にやってきた。

焦げ跡の中心に何か小さな駒のような物が突き刺さっていた。それを取ってみると、それは確かに駒だった。壁は完全に焼け焦げていたのだが、それだけは焼き焦げた様子もなく、新品同然の将棋の駒。

「金」？

将棋の駒は金と書かれたものだった。

どうしてこんなものがあるのか、答えは簡単だ。

「見つけた、手がかり……」

小さな手がかりだ。それでもやっと前に進める。

「そういえば……」

堕鬼が不思議そうに首を傾げる。

「あの子はどこなの？ ほら、いつも一緒にいる」

「あ、ああ。アリス？ いつも一緒ってわけじゃないけど、『つまんない』とか言っただけで行った」

「はあ……」

堕鬼はこれ以上無理なのではないかと思うほどの大きなため息をついた。それにむっとした彰が、

「何だよ」

「バカね、バカ。それ以上の言葉をぶつける必要性さえないわ」

「ふう、……彰ちゃん。あの子って死霊なんでしょ？ 死霊の特徴って知ってる？」

「知ってる、……ていうかさっき知ってたけど」

堕鬼は更に大きなため息をつく。そして、作った拳で彰の頭を思い切りどつく。

女口調とはいえ体は成人男性の中でも筋肉がいい感じについている大人の男の拳は鈍器でぶっ叩かれたような衝撃に似たようなものがあり、彰は思わず頭に手を置こうとした。しかし堕鬼がそれを許さなかった。

「頭に手を置いたら今度は顔を蹴る」

どすの効いた声に彰の手は凍ったように止まった。

「あの子が何でいなくなつたか本当に分からないの？」
はっ、と気づく。

とても簡単な理由だった。どうして叩かれるまで気づかなかつた。
気づこうとしなかつた。

アリスの特技は魂の気配に敏感なこと。ならどうしてアリスはこの場からいなくなつた？ 不器用な言い訳を並べて、彰に気づかないように、自分ひとりで、どうして？

情けなく笑う。そしてアリスのことを多少なりとも怖がっていた自分に腹が立つ前に呆れた。

そして、似てる　とも思った。自分に、すぐく。
だつたらなおさらだ。

「墮鬼、これ預けとく」

そう言い彰は将棋の駒を墮鬼に投げた。墮鬼は呆れるように将棋の駒を受け取ると、

「早く行きなさい」

彰を急かすように、顎を触る。

「ああ」

彰は小さく頷くと、精一杯の力で走つた。自分によく似た答えを導き出す優しい“死霊”の少女の下へと。

第4話 少女の敵 其の四

闇が町を包み始めた頃、アリスはとある少女を見つけた。

焼け焦げた町の中でヘッドフォンをしながら音楽を聞いている少女の姿があった。その光景は明らかにおかしい。音楽を聴くのはどうでもいい、ただ、場所がおかしい。戦場の中で音楽を聴く余裕があるほど人間は精神が出来ていないはずだ。なのに、この少女はどうだ。この場がいつもの光景のように、変わらない日常のように、少女は無表情に音楽を聴いている。

「あなた本当に人間？」

彰と別れて、人外の気配が消えた場所に来たアリスの目の前には彰とほとんど年が変わらないような少女がいた。戦場には似つかわないほどの華奢な少女だ。しかもそれが、ただの人間。アリスは少し驚いた。

少女がぴくりと動きを止めると、アリスの方へとゆっくりと体を向ける。短く切られた茶色の髪の毛の周りが陽炎のようにぼんやりと赤く鈍く光った。

(霊力はそこそこ……)

向かい合うように立つ二人の少女。

ひとりには死霊。もうひとはただの人間。この光景がアリスには面白く感じた。

アリスを目視する少女のつりあがった茶色の瞳に光が挿す。少女は半歩下がると、何かをアリスに向けて風を切りながら投げた。

アリスは投げられたブーメランでも受け取るように右手で少女が投げた何かを受け止めた。

「何？ 監禁趣味でもあるの？ 危険人物ですか、……まあ、危険っちゃ危険よね。人外^{わたし}たちにとっては ね」

受け取った物は犬の首輪のようなものだった。とてつもない霊力の込められた拘束具のようなものにも感じた。

「あんたは、」

少女はゆつくりとヘッドフォンを外していく。そして何かを確認するようにアリスを何度も見眺める。

「……ふ、」

そして確信を得たように、小さく頷く。

「なにかしら？」

嘲笑を浮かべる少女にアリスは上に立つように、霊力を少しだけ漏らしてみる。しかし少女は動じることもなく、ただ笑った。

「人間に飼われている哀れな人外……ならよかったのね」

「なら私は何だと思う？」

「人間^{クッス}に飼われる人外^{カス}」

アリスは静かに目を閉じると、一度だけ笑った。

「私のこと知ってるみたいね」

「死霊でしょ？ 最悪最低の人外^{カス}」

「酷い言い草ね、そんなに嫌い？ 人外^{わたし}たちのこと」

そうアリスが問うと、少女は唇の端を噛み締める。そして感情を飲み込むように、

「ええ、殺したいほどに ね」

町の空気が全てが少女を賞賛するように、賛同するように、そして死霊を蔑むように風がアリスに押し、舞う。

少女の人外に対する敵意はこの世の全てを恨むような、独りよがりなものだ。それでもその思いがどんな思いよりも強いと、それはとてつもないプレッシャーとなる。押しつぶされるような殺気がアリスに笑みを零れさせる。

「そういえば聞きたいことがあるのよね」

少女は押し黙る。

「さっき言ってたわよね、人間^{クッス}に飼われる人外^{カス}って」

「ああ」

少女は悪ぶれる様子もなく小さく首を縦に振った。

「その人間^{クッス}ってのは知ってるの？」

敵意が更に強くなった。人外に対する敵意よりも一〇倍も一〇〇倍も強くなった。そして小さく呟いた。

「知ってるさ、」

声がどんどん大きくなっていく。

「知ってる……ああ、知ってる……知ってる知ってる知ってる、」
闇を切り裂くように少女は吼えた。

「私が殺すべき男だ！ あの“偽りの日本最強”のな！ 青鬼彰！」
少女はアリスの奥の幻影を見ていた。何よりも憎むべきの青鬼彰のことを。

アリスは黙ったまま動かなかった、人形のように、話をただ聞いていた。青鬼彰というアリスがこの世界で一番愛する名前が出てくるまでは。

「今……言ったわよね、うん。言った。聞いてた。あんたは言ったの、確かに、言った」

顔から全ての笑みが消えた。あるのは“ヒト”としての全てを消し去った“死霊”の顔。

「私は今までの罪を忘れない。だから私のことをいくらクズだの力スだの言われても構わないのよ。けどね、許せないことがひとつだけあるの。それはね」

今まで押さえつけてきた殺気を全て吐き出すように、少女に向かい、小さな体を向ける。

「彰のことをバカにされるのがどうにも耐えられないの」

殺気で相手を殺せるなどというが、まさにアリスの殺気がそれだった。脅しも同情も通り越した圧倒的な殺気は心臓を握られているように、命を握る。ただの人間なら失禁すらしてしまう。しかし少女は動じなかった。

それにアリスは少し驚いた。拍子抜けしたアリスはぷつんと糸が切れたように力を抜いていく。

見た目華奢な少女が不気味に感じた。感情がない人形のように感じたからだ。そして、この少女に力の差を見せ付けたかったからだ。

自分の信じる偽りではない真正銘の“日本最強”の。

アリスは今まで握り締めていた首輪を眺める。そして小さく笑うと同時に頷く。

「ふふ、あなた本当に彰を殺せるなんて思ってるの？」

あまりも馬鹿馬鹿しい質問だった。アリスは自分自身の言葉に笑いがこみ上げてくるのを感じていた。それでも少女は、ごく当たり前のように、

「当たり前だ、あんな運だけ男」

そう言った。それが起爆剤になった。

「じゃあ分かるといい。自分の未熟さを」

そう言いアリスは首輪を自分の首につけた。全身の力が抜けていく。自分が人形になっていくようだ。指を動かすことも、筋肉を動かすことさえもつらくなっていく。

「馬鹿か、アンタ？ 自分からそれを付けるなんて、馬鹿の極みだ。どういふものか分からなかったのか？ それでも死霊か」

少女はアリスをあざ笑うが、アリスはそれ以上に笑った。

「餌になってあげるって言うてるのよ、哀れなアンタのね」

「餌……はっ、」

右手で顔を隠し、大きく笑う少女。

「ははっ、 何？ アンタどこまで馬鹿なんだか。自らを餌にする鼠がどこにいる？ 何を企んでる」

細い指の間から見える目は微塵の光もない。

「まったく、少しは善意というのを知りなさいよ。あんたにチャンスをおあげるって言うてるのよ。一生来ないチャンスをおね」

「チャンス？」

この状況だけを見れば不利な状況にいるのはアリスだ。しかし、アリスの顔は自らが上にいるように少女をあざ笑っている。それが酷く少女を苛立たせた。手の中にあつた何かを握りつぶすと少女の右手から巨大な矛が炎に包まれアリスの頬を掠める。ちりちりとアリスの髪を焦がす。それでもアリスは笑う。ずっと、笑う。

「怖い、怖い」

顔は笑ったままで、不気味なほどの笑顔。

「弱ったあんたを殺すことだって今の私には出来る。命を握っているのはあんたじゃない、この私。それを理解出来ないなら、あんたは獣以下。そうでないなら、その薄ら笑いをやめろ人外！」

矛の刃をアリスのすらりと伸びた首元にあてがう。アリスは命を握られようと笑うことを止めない。ゆつくりとアリスは腕を上げて、自らの髪をいじる。その行動すら少女には鬱陶しい。腹立たしい。少女は自らの唇の端を噛み切る。

「止めるって言うてんだよっ！ この人外がっ！」

左手の甲でアリスの頬をはたく。音も頬の赤みも少女の念がにじみ出た証だ。それでもアリスは笑うのを止めない。

「何が怖いのかしら？」

「っ、！」

その言葉が少女の中の記憶を呼び覚ました。

人外に対する圧倒的な殺意。少女は小さく俯くと、

「分かった……」

本当に小さく呟いた。

「これ以上翻弄されてたまるか、貴様ら人外どもに、」そう呟く。矛が炎に包まれ、消えていく。

「お前がそんなにあの男の死を望むなら見せてやる。あの“偽りの日本最強”が無残に骨になる様を」

少女はゆつくりと振り向く。

「なあ、“偽りの日本最強”さん」

少女の後ろ数メートル先に、

「アリス！」

そこに“日本最強”と呼ばれる少年がいた。

第4話 少女の敵 其の五

少女は“偽りの日本最強”を視認すると、子供のような笑みを浮かべた。

死霊を捕らえたことよりも、この町の人外を消していたころよりも数倍の喜びを表していた。今日の前には少女が殺したくて仕方なかった男が息を切らしながら立ち尽くしていた。

彰はアリスを見つけるとすぐさまに叫んでいた。

「アリス、大丈夫っ！」

明らかに弱っている姿のアリスにひどく後悔した。どうしてこうも自分は情けないのかと、心がきりきり痛んだ。どうして気づかなかった。アリスの優しさに、アリスの無謀に。あんなに自分とよく似ているというのに。

少女はアリスの首に付けてある首輪に指を引っ掛けると、無理やりにアリスを立たせた。

「見えてるのか、この私が。ええ？ “偽りの日本最強”さん」

「アリス大丈夫？」

もう一度彰はアリスに問いかける。アリスは乾いた笑いを浮かべながら、

「はは、大丈夫……夫……ってわけにはいかないかな？ ごめんね、シヨウ」

目を伏せながら呟く。まだ喋れるなら命の心配はない、そう考えた彰は大きく息をはく。そして少し顔を上げる。

「……、」

少女の姿に今気づいたように、驚いた表情を見せる。

「女……の子？」

自分とほとんど変わらないような少女がアリスを捕らえていた。それにも驚いていたが、

(……何、これ?)

自分が“日本最強”と呼ばれることに“嫌悪感”すら覚えるその感情を通り越して彼女は“殺意”さえ覚えている。この名前がただの飾りではないことを知っている。だからこそ自分からその名前を名乗ることはない。なのに、名前というのは伝わる。そして誰もが認めてしまう。霊能者のほとんどが“日本最強”は『青鬼彰』だと、認めてしまった。

でも目の前の少女は“殺意”が湧き出すほどに認めたくないのだ。だからこそ、

「ああ、知ってるさ」

言葉を交わす必要もない、義務もない。世の中が話し合いだけで通じるほどに優しいものではないことを蓮水は知っていた。だから、すつと、蓮水はポケットから手を出すと、その指にはあの時手に入れたものがあつた。

「将棋の……駒？」

それが彼女の霊力を使うための媒体。彰がさいころを使うように彼女は将棋の駒を選んだ。それは野球選手がバットとグローブを選ぶように、サッカー選手がシューズを選ぶように、その個人の力を最大限に引き出すための道具、それが霊能力者の媒体。

将棋の駒を親指で駒を上空に弾くと、駒に霊力が込められる。殺意と共に、溢れるほどの霊力が具現化する。

「何度あんたを求めたか、分かる？ 分からないでしょ？ あの時からよ、あんたが“偽りの日本最強”になってしまった五年も前からあんたを求め続けた。……あんたを殺すために、ねっ！ 歩兵！ 歩兵！」

空中に指で弾かれた反動で回転する駒の文字が見えた。その文字は“歩兵”。其の名の通りに駒が見る見る内に人の形に変わっていく。戦国の戦場にいるような槍を持った、歩兵が。

「式神っ、」

歩兵が形を成すのに時間はかからなかった。完全な、形になる前に彰が動いた。

「させない！」

ポケットからさいころを取り出すと、それを歩兵目掛けて投げる。形になる前に崩す。形になる前に、

「それがあんたの武器ね、イカサマ師」

「鬼弾、！ 奴を崩せ！」

泥人形に水を加えて、泥自体を固くするように、蓮水の靈力と、将棋の駒の神力を融合するように、歩兵が見る見る内に形づいていく。木で出来た人形、木人こんねん、これが完成すると、かなり面倒なことになると彰は直感的に感じた。その前に歩兵を崩そうと、靈力を込めたさいころを放った。

さいころの目は六。その全ての白い光が歩兵を捉える。光は迷うことなく、歩兵に直撃した。確かに直撃したはずだ。白煙と音がなよりの証拠。

蓮水は余裕そうに笑うと、

「少し遅かったみたいね、さすがイカサマ師。何も出来やしない」
目の前にいる歩兵には傷ひとつつかなかった。六つもの、鬼弾が確実に直撃したというのだ。

カタカタと、歩兵が倒れそうな体勢だった歩兵が背筋を伸ばしていく。木目の目がこちらをぎろりと睨むように、彰を捉える。

「う、そ、だろ？ 杯水車薪ってか、ったく、」

彰は再び、さいころを手に取り、それを投げようとするがそれよりも早く、蓮水が指で将棋の駒を弾く。

「やっぱり大したことないわね、傷ひとつ、ついてない。でも……残念がるのはまだ早い。日本じゃ、この駒のこと歩兵って言うんでしょ？ 歩“兵”ってさ」

蓮水の口にする“兵”という言葉に一瞬で焦る。

しかし焦ったところで、意味がないこともすぐに分かるはめになった。その場には戦国の時代の火器のない兵たちが形づいていく。

鬼弾の効かない兵たちが九人、彰を取り囲むようにじりじりと迫ってくる。

彰はちらりとアリスに目を配らせると、アリスは何かを了承するようによく頷く。それを確認すると彰は、兵たちに取り囲まれる前に、ザッ！と、地を蹴って走り出した。

この状況がかなりまずいことなのも分かった。そして九対一なんていう無謀な状況の喧嘩を買うほど自分を過大評価もしていない。まず喧嘩でこの人数差では“勝てない”。二対一、三対一などと、地形や時間をかければ勝てる生易しい人数差ではない。“勝つ”、“負ける”ではなく、勝負にならない。

だったらやることは一つしかなかった。

この不利な状況を打破する前に、“逃げ出す”こと、この場から即座に離れること

「情けないな、……ったく、」

彰は町の中に消えていった。

「逃がさないっ、」そう言い蓮水は九体の歩兵で彰の後を追わせる。唇の端の肉を噛み切った蓮水の口元の血も乾ききっていた。

第4話 少女の敵 其の五（後書き）

総合PVが20000を超えました。ありがとうございます。
これからも頑張って執筆していきたいと思えます。

第4話 少女の敵 其の六

ザッざっざッザ、と、リズムを刻むように同じ動きをしながら動く歩兵たちに気づかれぬように気配も息も殺して物陰に隠れる少年。

自分の一番の得意技である鬼弾が効かない相手。そして自分を殺そうとする圧倒的な少女の殺気に、すっかり参っていた。

少女がどうして自分に対してこうも敵意を通り越した“殺意”を持っているのか、どうしても彰には分からなかった。少女の生み出した歩兵は戦場に生きるモノ全てを消し去るように、動く殺人木人（にんぎょう）のように感情の一切がない、その恐怖に押しつぶされる。

それでも、少年は立たなければならなかった。

少女がいくら自分を恨もうとも、立たなければならぬ。頭で考えても仕方がないなら、直接聞けばいい。虫のいい話かもしれない。でもどうしても聞かぬやいけぬ。理屈よりも先に感情が働くのはまだ、自分の心に余裕があるからかもしれない。

自らを信用してくれたあの女の子のためにも自分が動かなければ助けることすら出来ない。

蓮水から話を聞こう。

アリスを助けよう。

「どうして、こうも人外を恨むのか、この俺を恨むのか聞きたくなかった」

だから、

今は、

戦おう。喧嘩を買って、話を聞いてみよう。

さいころをその場に置くと、体勢を低くしたまま駆けた。さいころが安物のロケット花火のような軽い爆発音が鳴ると同時に宙に白い光が放出する。

と、同時に、歩兵たちが空に目をやる。その隙が木人の限界だっ

た。意思のある人間と意思のない木人の差だった。

彰は歩兵たちに近づきながらさいころを放り投げる。さいころは水上を弾く飛び石のように、地面を弾き、歩兵の目の前まで風を切るように、飛び跳ねる。

さいころは彰が望むように回転し、彰が望むように彰の手の中に飛び込んでくる。

鬼弾が効かないならそれ以上の威力のある一撃を加えればいい。放出系の霊力が効かないなら打撃系の一撃を与えてみればいい。

寸先まで歩兵との距離を詰めると、彰はさいころを取った手に力を込める。歩兵の振り向き様を狙った一撃！

歩兵は避けることも出来ずに、彰の一撃を受けなくてはならなかった。ただ無様に、ただ、壊れるほどの衝撃を！

「賽の式・四、『剛』！」

一体の歩兵の振り向く顔を目掛けて振りかぶった彰の一撃は歩兵が木人であることを証明する形となった。木はめきめきと音を立てながら朽ちていく。めり込む拳は、その形を壊し、衝撃は木で出来た歩兵の中から外へと逃げる衝撃に変わる。その衝撃に耐えることも出来ずに歩兵の木人は朽ち、その形を終焉させる。

一体の歩兵が彰の姿を見つけると、手に持った剣を構え、更にもう一体の歩兵がその剣を持った歩兵を庇うように、自分の姿が覆い隠されるような巨大な盾を持ち、剣を持った歩兵の前に出る。

まずは一体の歩兵を破壊したことに、安心していたが、歩兵は残り八体もいることに警戒はしていた。歩兵のそれぞれが違う武器を持ち、それぞれの役割を果たす。木人とはいえ、訓練された兵士のような統率された動きについていくほど、彰は戦い慣れはしていない。

歩兵の一人が槍で彰の体目掛けて、伸ばすと、彰は体を捻りながら横に飛ぶ。

槍をかわしても、次の斧を持った歩兵がその斧で彰の頭蓋骨を粉碎しようと、斧を振り下ろす。

それよりも早く、彰が斧を持った歩兵の脚を自分の足で払うと、そのまま立ち上がり、また町の中に消えていく。

この人数差なら基本的な攻め方はヒット&アウェイが一番だ。一体を潰し、そのまま姿を晦まして、その繰り返し。まともに相手にするだけ無駄だ。

歩兵は人間と同じような視界であることが先ほどの距離の詰めと、上空に飛ばした鬼弾の光で確信した。前を見れば後ろを見ることは出来ないし、上を見れば下を見ることも出来ない。人間となんら変わらない視界。あくまで人間をモチーフにした木人こごみん。付け入る隙はいくらでもある。焦らず、確実にいけばいい。

(やれる……)

鬼弾が効かなかった時はかなり焦ったが、『剛』なら効いた。おそらくは放出系の霊力には何かしらの抵抗みたいなものでもあったのだろう。でも打撃系の霊力なら効く。

それが分かっただけでもよしとしよう。それに早く、歩兵たちを何とかしなくてはならないことに変わりはない。式神がやられたんだ。何かしらの方法でこの情報は蓮水の元に届くはずだ。どこでやられたのか、という最悪の情報が

位置を割り出される前に歩兵たちの数を減らす。一体でも多く、

「賽の式・四『剛』！」

減らす必要がある。

一体を後ろから襲撃する。歩兵は後ろからの一撃に耐えることが出来なかった。これで残り七対。そしてその体勢を崩す前に、前に飛び込み、歩兵の足元に着地する。そのまま拳の中にあっさいこの残りの霊力を搾り出して、もう一体の歩兵の顎の辺りに立ち上がりながらアッパーカットをお見舞いする！ 残り六対。

そして崩れる体勢のまま後ろに飛ぶと、再び、歩兵から離れる。

彰は走りながら蓮水のことを思い出していた。

(そういえば俺のことをイカサマ師だつて……、)

自分の望むようにさいころの目を出す。そんな人間離れたこのカラクリにあの少女は気づいていることになる。

「見つけたぞ、“偽りの日本最強”！」

走る目の前にその少女が立っていた。今、この状況では、まだ会いたくない少女が。

「何体か歩兵フイビンがやられたみたいね、……確かにお前を舐めていたな。鼠の飼い主は狐だったか、それとも狸か？ どっちにしる、お前を舐めるのは止めだ」

怒るか悲しむかどちらの表情か、その少女の顔は引きつることもせずに、ただ、無表情だった。

「これ以上時間をかけても、歩兵フイビンたちでは、お前に勝つなんて出来ないな、さすが最弱こしみだ。糞の役にも立たない、ま、あんたはそれ以下だけどな……解除ジエチュ」

そう蓮水が言うと、彰を追っていた歩兵たちが一瞬にして消えて、一つ一つが一個の将棋の駒に戻った。

不敵に笑う蓮水の手元には“金”の駒があった。

第4話 少女の敵 其の七

今この瞬間にも殺気は放たれている。笑みを浮かべながらの圧倒的な殺気というのは不気味を通り越して、少しだけおかしいと思うのはおかしいのだろうか、などと頭の中で妙な考えが浮かび上がってくる。

それでも殺気は確かに彰の足を止めている。ちりちりと焦げ付いた空気が彰の手足に絡み付いてくるようだ。それでも喉の奥の言葉を無理やり掻き出した。

「待って、話がしたいっ、」

瞬間、

「私はしたくない」

即答だ。そりゃ、そうだ。誰が憎んでいる相手と話がしたいだろうか。多分陽気で狂気で猟奇的な愉快痛快な人物以外そんなことしたいとは思わない。それでも彰は言葉を続ける。

「どうして人外を消している、趣味だなんて可愛い理由なんかいら
ない」

四葉のクローバー集めなどと可愛い理由な訳が無い。もし、そんな理由だったら、きっと許せないと思う。

でもそんな理由で人外を殺している人間などいる訳も無かった。

でも、蓮水の言った理由はとても極端で、とても難しく、とても簡単で、とても 人間っぽくなくて。

「嫌いだから」

その言葉は文字にすればたった六文字程度の簡単な言葉。でもそれが少女の言葉とは思えなかった。何もかもを否定して、何もかもを奪って、それでも、ただ、嫌いという言葉で片付ける。そんな人間臭さの欠片もない少女の顔がどこか、似てて

「……そんな、理由で……」

彰が聞こえない程度に呟いた言葉も蓮水の耳には届いていた。

「五月蠅いッ!!」

闇も空気も全てを切り裂くような轟声。蓮水と出会って間もない。その彰が初めて見た少女の感情。自分を殺すと言った時でさえ、感情を殺していた彼女が初めて見せた感情に、彰は押し黙ることしか出来なかった。

「誰が何と言おうかなんて関係ない! 嫌い、死ねばいいと思ってる! あのお方以外!!」

「あの……お方……?」

「もう話はしない、殺す。あんたをね、」

そう言い蓮水は全ての音を遮断するように、首にぶら下げているヘッドフォンを耳に付け始める。音楽が大音量で流れているヘッドフォンからは陽気なJポップのような音楽が漏れていた。

「何度も言う、お前を殺す。今度は確実に、」
手元にあつた“金”を蓮水は握りつぶす。

歩兵の時とは違う靈力。具現化する靈力ではなく、開放するような靈力。

「死んでしまえばいい、なあ、そうだろ! 金、!!」

駒を握りつぶした手が発火するように炎に包まれていく。炎が形づくように巨大に炎が伸びていく。熱で空気がゆらゆらと揺れる。

炎が完全に形づく前に、蓮水が一步、彰に詰め寄る。

そして、一閃。

彰の首元を狙った一筋の炎の揺らめき。炎が完全に治まった赤い矛が彰の命を脅かす。

「喧嘩が話し合いで解決すると思うか、なら、お前は这个世界において、居場所はない、っ」

話し合いの余地はない、そう少女は言う。だから、本気で『戦え』と言う。命の危険が迫れば、誰もが牙を剥く。それが獣の本能、ヒトの本性。

首元に当てた矛を、彰の首を刈り取るように、横になぎ払う。その矛の刃に彰はさいころを押し当てる。

「っ、賽の式・五、結界！」

そこに壁でもあるかのようには、矛はそれ以上、進まない。さいころから出た青白い光の壁が矛を遮っている。

「やはり、そうか！ イカサマ師が！」

ぐっと、矛を持つ力を強めると、矛の刃の先から、壁を回りこむように炎が彰に伸びる。これは賽の式・五の結界でも防ぐことが出来ないかと判断した彰は、矛の刃にさいころを押し込むと、一歩半ほど後ろに飛ぶ。

炎は、さいころを溶かした。するとさいころから出ていた青白い結界も崩壊する。

ブン！ と、炎を切るように、矛を思い切り振り下ろす。

「確信したぞ、お前の力は強大な運なんかじゃない！ ただのイカサマ。何の力もない、ただの雑魚だ」

蓮水は更に殺気を強めた。

「そりゃ、そうだ。一〇回賽を振って、一〇回同じ目が出る訳がない。だったらどうするか、……答えは簡単だ。賽自体に仕掛けを施せばいい。何のことは無い。お前はやはりただのイカサマ師だったな！ そうしてイカサマを重ねたか！ “偽りの日本最強”！」

確かに彰は人より多少運がいい。宝くじにも当たったことがある。くじを引けば確実に当たりが出る。神に愛されたような人間だ。それでも賽の目を自由に操ることは出来ない。だから、賽に仕掛けを施したのは事実だ。

さいころ使いはただのさいころイカサマ使いだった、という何のことも無いオチだった。

蓮水は鼻で笑う。何が“日本最強”だ。

殺す相手がそれだけの大それた名前の奴だ。もちろん調べていた。青鬼彰という男は運がいいなんてものではなく、まさに“豪運”の持ち主だということ。強運よりもさらに上の、そしてその“豪運”を最大限に生かす“さいころ”という武器。だから、偽りとはいえ、“日本最強”だなんて名前がついたのだと思った。諦めるよう

なものだ。あいつは“運”がいい。だから、仕方ない。俺たちは“運”がなかった。何もかもが“運”だ。“運”で全てを諦めるのが人の弱さでもある。だから、あのお方も諦めたのだと思った。

でも、なんてくだらないオチだ。

奴はイカサマ師だったという、絵本のページ目で悪い魔法使いが正義を信じる自らは非道と思っていない王子さまに殺されるようなものだ。何もしていない悪い魔法使いをいきなり殺した王子さまはみんなには英雄と慕われ、悪い魔法使いを踏み台にした、くだらない幸福の始まりを作りあげた非道の王子さまがこの“偽りの日本最強”だったという訳だ。

どうしようとイカサマはいつかばれる。それをこの馬鹿な王子さまに教えてやる。正義を信じる非道な王子さまの幸福な始まりから不幸な結末に王子さまを叩き落としてみせる。悪い魔法使いが、“最強”であるべきだと信じる、悪い魔法使いの一つの駒が全てを変えてしまうことがあるように、墮としてみせる。

「お前のどこが“最強”だ！ お前は“最弱”だよ、最低最悪の、なっ！」

そう吼える少女は見せたことの無い満面の笑みで ヒトを殺す。

第4話 少女の敵 其の八

目の前に立つ少女は一体何を見ているのだろうか。

“青鬼彰”なのか、

“日本最強”なのか、どうにも分からない。

「どうして俺を恨む！」

言葉を交わそうとしても、少女の耳には届かない。ヘッドフォンがあるからじゃない。きつと届かないのだ。いくら言葉を交わそうとも意味などない。ならば剣を交わすしかないのか。

殺気を放つ相手には言葉は届かないのだろうか。

矛が彰の心臓を貫こうと、幾多も伸びてくる。腕で保護しようともそんなのは腕ごと心臓を貫かれて終わりだ。ならさいころを使い、何度も防ぐしかない。何度も何度も、矛を防ぐ。ビデオの再生を見るような、まったく同じ光景。

それでも守るものと攻めるものの差はあった。命を脅かされる緊張感には限界というものを作り出した。

動きが一瞬止まった。その一瞬が命のやりとりにおいて、どれだけの隙なのか、考えるまでもなかった。

矛がさいころを捕らえると、矛対さいころの力比べとなる。そんなの答えははつきりと出ていて、さいころが負けるに決まっている。しかし、蓮水は力を抜いた。そして、にやりと笑った。

「解除」

そう言いながら、蓮水は矛を軸に彰の後ろに回りこむ。矛はだんだんその形を崩していき、蓮水は新しい将棋の駒を取り出す。

「フェイチェア
飛車」

頭では反応できた。しかし、体が追いつかない。蓮水は彰の後方に回り込むと、左足で砂利を踏みつけ、右足を彰の脇腹をえぐるように、蹴り上げる。めきめきと骨と筋肉が悲鳴を上げる。

「が、」

今までの矛が優しく感じるほどのダメージ。今までが木製のバツトなら、この一撃は金属のハンマーだ。殺傷能力以前に、質が違う。痛み。

頭を支配する感情がそれだけになったとき、無意識にさいころを取り出す。

「今更それで何が出来る。種は分かった。なら仕掛けを見抜いた後に、行動すればいい。それがお前が“最弱”である証、！」

彰は構わず、さいころをがむしゃらに投げる。霊力も籠らない、ただの小石を投げるようなものだ。この場において、何の意味も持たない。そんなことも彰は分かっていた。だから、無意識だった。

幾つかのさいころは蓮水の顔を通りすぎる。でも、

「っ、っ、っ、」

幾つかのさいころが蓮水のヘッドフォンに当たると、ヘッドフォンは蓮水の耳からずり落ちる。それでも、蓮水は止まらない。蹴りを加えた蓮水は更に、もう一度、彰の体をサッカーボールを蹴り上げるように、容赦なく、蹴り上げる！ 彰の足が地から二〇センチほど離れる。

血反吐を吐きながら、彰は腕で地を殴りながら立ち上がる。そして彰は言葉を交わす。

「どうして俺を恨む、それはいい！ 本当に『嫌い』だなんて理由で人外を消して いや、殺しているのか！」

彰にはどうしても信じられないのだ。年がほとんど変わらないで、あるうこの少女が酷くも、人外の全てを奪おうとする理屈が。ただ『嫌い』という理由だけで人外を殺すその、意味が。

だから話を聞く。言葉を遮るものがあるのなら、その全てを退けてでも聞かなきゃいけない。

そんな彰を見ながら、蓮水は哀れむように笑う。

哀笑。

悲しむように、それでも、おかしいように。

「敗者はどうしてこうも喋りたがるのか、……理解に苦しむよ。喧

嘩の途中で言葉を交わすお前が哀れだ。必死に命乞いをするのなら、それはまだ獣である証拠となるというのに、お前はどうして『人外を殺すのか？』なんて聞く？」

ぼろぼろになった体で立ち上がる彰。

自分も『鬼』が嫌いだ。自分勝手に、我侭で、横暴で、無茶苦茶で、それでも、仲良くできるのは自分がただ、気づかなかつただけだ。『鬼』というのはただの、種族カテゴリーなだけで。彼、彼女自身ではない。そんなことに気づいたのも最近だ。“人外”だって一緒だ。人外は“ヒト”なんだ。

「確かに、人外の中には人間を食い物にするものがある。でも、それは“人外”だからじゃない。そいつだからだ、“人外”が全て悪だなんて……俺は思えないんだ」

「人外が悪……ね。その考えがムカつくんだよ！ 悪だ正義だなんて言葉を簡単に使うような奴の言葉に動かされるほど、私は大人じゃないし、子供でもない。それでもたった一つだけ言えることがある。……人外は全てが悪だ！ お前の言う通りだよ、ああ……その通りだ。悪の中に美学を求めるものもあるだろう、けどね、人外のほとんどが美学の欠片も持ち合わせないクズなんだ！ だから、私は消すんだよ、この世界から！ 人外を！ それを庇うお前も悪だ！」

彼女に一体何があったのだろう。彼女は信じきっている。人外が“悪”だと。全てが憎いと、思っている。殺意も決意もきつと変えられない。それは彼女の過去が原因だと思う。

だったら自分の信じるものを守るために剣を取るべきなのだろう。そう、頭では分かっている、のに、なのに、どうしてこうも、

心が痛むのだろう。

彼女は泣いているようにも見えた。肉体的ではなく、精神的にだ。

悲しみや同情の心ではなく、恐怖による涙が見えた。恐怖を誤魔化すように、彼女は人外を殺しているのではないかと、何故、思ったのだろうか。

彼女の殺気も決意も本物だ。それはこの状況が物語っている。少年を殺すために、人外を殺し、人外を庇う少年は悪だと、信じている。

「俺は……アリスと仲良くなれた」

「……」

そうだ。人外が“悪”だなんて思わせなければ、彼女の恐怖も無くなるかもしれない。自分が人外に対する恐怖感がなくなつたように、彼女も恐怖が無くなればこんなこともしなくなるかもしれない。弱ったアリスは彰たちに牙を剥いたことがある。何もかもが恐ろしいと、自分さえも分からなくなってしまうからだ。今、蓮水は人外の全てを憎んでいる。アリスを恐ろしいと思つたこともあるこの情けない自分の言葉が彼女に届けばいいと思つた。

「知ってるか？ アリスってさ、モンブランケーキが好きなんだ」

「……」

「ケーキ食つてるときのあいつ、馬鹿みたいに幸せそうな顔なんだ」

「……い、」

「なんてことのない、女の子の顔なんだ」

「……さい、」

「それってさ、人外とか死霊とか理由にはならないと思うんだよ、な、そうだろう？」

「五月蠅い！ 知るか！ そんなこと！ 金^{ジン}！！」

彼女にとつて、どれくらいくだらない話なのか、考える必要もない。それでも少年は話すことをやめない。耳に届かなくていい。心に届かなくてもいい。そう少年は考えていた。ただ、少しだけでも、記憶の中に、あつてほしい。微かに、記憶の片隅にでも、留めていてほしい。だから、

「あいつはあいつだ。人外^{カテコリー}って分類されない……そうだろう？」

剣を交わすことはせず、言葉を交わす。優しい、甘い、
—
人の少年の戯言。

第4話 少女の敵 其の九

少年の精一杯の戯言はやはり少女の耳には届かない。

ヒュン、と風を切る音が少年の口を黙らせる。矛が彰の顔先で止まる。

「……、れよ、 黙れよ、三下。知るか、……知るかよ。んなこと。お前の価値観なんて知らないんだよ、言ったでしょうが！ 私 は人外という存在自体が嫌いだって！」

蓮水の瞳に殺気の光が籠る。

それでも、彰は言葉を続ける。今のこの状況がどういうことか何て、誰が見ても、不利な状況ということが分かる。なのに、言葉がすらすらと出てくる。甘い言葉が、優しい言葉が、残酷な言葉が、次々に出てくる。

「俺を憎むのは勝手だ。お前にとって人外を庇う俺が“悪”だっていうなら、きつと俺は“悪”だ。でも、人外だからって、それだけで……殺すのは止める」

悪いことだから止める、って言っている訳じゃない。そんな正論を言うほど子供じゃない。ただ、
どうしても、止めてほしい。

もちろん一人の人間の言葉で信念が変わるほどのことじゃないのも分かっている。それでも、

言葉を続ける。たった一つの戯言を

「『嫌い』だって理由だけで殺すのは止めるんだ」

蓮水は小さく呟く。

「解除、飛車」
ジエチュ フェイチエア

矛よりも凶悪な一撃を持つ飛車の拳を彰の腹に刺す。何度も、何度も、何度も、何度も、

なのに彰はさいころどころか、拳さえ握らない。『戦わない』と言わんばかりに、一切、拳を握ろうとしない。

それが蓮水にとってどれだけの侮辱になるか、それすら分からない。だから彰の言葉がどれだけ残酷か、少年には分からない。

だったら、死を目の前に晒してやるう。

「、あああああああああああああああああああ！！！！！！！！！」

死ねばいいと思っていた相手がどうしてこうも憎らしいのかも忘れ、何度も少年の腹を殴る。全ての内臓物でも吐き出せば『戦う』か！ なら、吐き出させてやる！

機械マシンのように、同じ動きで、同じ角度で、彰の腹を殴る蓮水は感情を吐き出すように吼える。

「、え……、戦え！　そして死ね！」

自分でさえこんな感情に出会ったことのない蓮水は、吼えるしか出来なかった。

「戦え、戦え、戦え、戦え！！」

右の拳、左の拳、右の拳、左の拳。何度も腹を殴る。

それでも、彰は拳を握らない。

「……っ、！」

電池が切れるように、蓮水の動きが止まっていく。それでも、殺気が蓮水を動かせる。右の拳で彰の腹を思い切り殴る。ぬいぐるみでも殴ったような空しさが拳に宿ってくる。彰は殴られた反動が出てきた。腹を押さえながら、崩れ落ちていく。

「あ、……ぐ……」

喧嘩に勝ったのは蓮水だ。

なのに、唇を噛みながら顔を歪めているのは勝者である蓮水の方だ。

（何だ……これは、！）

殺したい相手が今、目の前に、弱って、声を歪ませているというのに、

どろして、

(殺せない、っ　！)

もう一度、矛でこの男の心臓を貫けばいい。たったそれだけのことだ。今までやってきたことをすればいい。なのにどうして出来ない。

やり方を忘れたように蓮水は困惑する。手が固まり、足が固まり、思考が固まる。

「めろ、……」

声が聞こえた。もちろん蓮水自身の声ではない。憎らしい少年の声。ずつとつぶやき続けていたのだろうか。

「や……め……ろ……」

今にもかき消そうな声だ。その弱りきった声は蓮水の耳に届いてしまった。

「な、……に、を……」

無意識に返事をしてしまった。聞かないと決めた言葉に耳を傾けてしまった。

「……………」

蓮水の返事に彰が答えることはなかった。そのまま彰は気絶したからだ。死んだように動かない彰を見下ろしながら蓮水は固まる。

「喧嘩はあなたの勝ちみたいね……」

固まった蓮水の後ろに首輪を小さめのリングを指で回転させるように遊びながら笑っている死霊アリスの姿があった。

蓮水は振り向くことさえしなかった。どうやって首輪を取ったのか、そんなことさえどうでもよかった。

アリスは笑いながら話す。

「思った通り……あなたの勝ちよ？　もう少し喜んだらどうなのよ」

勝ち？　これが？

「あなたの方が強いと思ったもの。喧嘩はあなたの勝ち。予想通りにね」

幾度とアリスは蓮水がこの喧嘩を勝ちという。だが、

「……、どこ、が、」

納得など出来る訳がなかった。凍り付いていた感情に一気に熱が帯びる。

「どこが、……どこが勝ちだ！！」

蓮水はアリスに振り向き、吼える。アリスは静かに目を閉じながら、彰の元へと歩いていく。

「この状況が物語ってるじゃない？　彰はぼろぼろ、あなたはピンピン、一〇〇人に聞いてみなさいよ。一〇〇人が一〇〇人あなたに軍配を下すわね」

確かに傷一つ付かずに、蓮水は命を賭けた喧嘩に勝った。ならどうしてこんなな心が晴れない。殺したい相手を追い込んだ。なのにどうして、負けただなんて思う。

「さあ？」

そう笑うアリスは彰の元まで来ると、しゃがみこむと、彰の顔を優しく指の腹で撫でる。そして彰の腕を取ると、自分の肩に持って行く。

「彰は優しいからね、……ほっとけなかったんじゃない？」

「、……だれが、だ、」

アリスは笑いながら、立ち上がる。そして蓮水に向かい、

「……“あなた”と、……“私”のことが」

そう言いアリスは彰と一緒に姿を消した。

その場には唇を噛み砕きそうになるほどの顔を歪ませる少女だけが残った。

第4話 少女の敵 其の九（後書き）

次で4話が終わります。長かった……

第4話 少女の敵 終章

彰が目を覚ますと、そこは暗い病室だった。

起き上がろうとすると胸の辺りに鈍い痛みが走る。痛みを耐えることも出来ずに、そのまま仰向けになったまま、彰は目だけを動かして辺りを見回す。外は完全に闇に染まっている真夜中だった。部屋の感じからして、ここは堕鬼の病院のようだ。普通の病院は病室の個室の壁紙が真っピンクなわけがない。ここに来てからそれほど時間が経っていないのか、着替えやお見舞いの品などは一切なかった。あるのは、自分の手を掴んでパイプ椅子の上に座りながら眠っているアリスだけだった。

「どうやら……死んじやつてる訳じゃなさそうだな」

アリスの手の暖かさが何よりの証拠だ。少し嬉しくなった彰はぎゅっと、アリスの掴んでいる手に力を込めた。彰が力を入れると、ぴくりとアリスの体が動いた。アリスは半目で彰のことを見つめた。そして、刹那、

「え……、シヨウ？」

何かを考えるように、一瞬の間が空くと、

「シヨウ！」

感情を抑えきれなくなったアリスは彰の体の上に飛び上がり、抱きつく。しかし、包帯をぐるぐる巻きにしてある彰の体はぼろぼろな訳で、

「いたたたたたたつ、どいて、お願い！マジでマジだから！」「いくら体重が軽めのアリスとはいえ、今の彰には凶悪な痛みの元となる。」

「シヨウ、シヨウ！！」

彰の叫び声など無視して、アリスはすりすりと、自分の顔を彰の頬に摺り寄せる。彰は痛みを我慢しながら、アリスの肩に手を置く。「だ、大丈夫だから……と、とりあえず落ち着こう。な、本当に死

んじゃうから。無邪気そうに抱きつくな！ 無垢こそ残酷なんて言葉も今なら信じられる！ 痛い凄く痛い！」

「それで……結局、あの子は俺を殺さなかったのか……」
「……、うん」

アリスは静かに話してくれた。怒る訳でもなく、悲しむ訳でもなく、ただ静かに話してくれた。

彰が蓮水にぼろぼろに負けたこと。アリスが彰をここに連れて来たこと。蓮水が彰を殺さなかったこと。蓮水が吼えながら彰の腹を無我夢中になりながら殴っていた時、彰は既にほとんど立っていることも出来ないくらいに意識が途絶えていた。覚えてるのは、何度も言葉を呟いていたことだけ。何を呟いていたのかは覚えていないが、『何か』を伝えようとしたことだけをおぼろげに覚えていた。

それだけを話すとアリスはテレビか何かで知ったのか「お見舞いの基本ってこれなんでしょ？」と、言い、不器用に剥いて皮がまだらに残っている林檎を小さな口を開けてもぐもぐと食べ始める。

「それって普通はお見舞いした人が食べるんじゃないかってベツトに横たわってる人が食べるものだと思うと青鬼彰くんは宣言しますよー」

「でもシヨウは起き上がることも出来ないからここは優しさで私が食べてあげるのがベストなんだと思うよ、うん。絶対そうだよ」

「だからと言ってこれ見よがしに林檎を食べるの止めてくれませんか、怪我して物は食べられませんがお腹は空くんです。林檎何個あると思ってるんですか？ 瞬間だけ林檎に目を配っても一〇個はあるんですけど、その小さな体のどこにそれだけの食べ物収納するハイスペックな物置があるのですか」

もぐもぐと林檎を食べながらアリスが、
「怪我したのは自業自得だと思っけどな」

そう言つと、五個目の林檎をごくんと飲み込む。

彰は天井を見上げながら呟いた。

「まあ……そうかな」

悲しげな瞳で天井を見上げる彰の顔をアリスは静かに見つめた。
「自業自得……だよな。俺のこと憎んでるあの子に……、説教なんて、な。そんな偉そうなことと言える立場じゃないよな、」
少女はどれだけの人外を殺していったのだろうか。それはどんな理由があるうとも許される訳ではない。そんなこと頭でも理屈でも分かってる。それでも、

「でも、さ、可愛そうだったんだよな。あの女の子が」

彰の言葉にアリスは林檎を食べる手を止めて、

「私……みたいに？」

アリスの言葉に彰は息を呑んだ。

「……そう、……かも……」

自分のやったことが正しかったなんて思わない。それでも一人の少女を助けたかったのかもしれない。だから「戦わない」ことを選んだ。それでも少女は一人の少年を殴り続けた。何度だって、少女は少年を殺そうとするだろう。それでも自分は決して「戦わない」。そう選んだのなら、永遠に彼女とは「戦わない」ことが彼女を救うことになるのかもしれない。そんな夢物語を眺めながら少年は一つの夢を見続けた。

少年が次に目を覚ますと、病院の外は明るかった。夜から朝を迎えていた。

「おや？ お目覚めですか」

そう言ったのは青鬼家に仕える鬼の瞬鬼しゅんきだった。椅子に座ることもなくずつと立っていたようにも見えるのだが、その顔には疲れなどが一切見えない。

「ん、……瞬鬼か」

「おはようございます。坊ちゃん」

瞬鬼は小さく頭を下げると、彰が「いつまで立ってんだ？ 椅子あんだから座ればいいだろ？」そう言うと、「失礼して」瞬鬼は口元をいつも持ち歩いている鉄扇で隠しながら、腰を下ろす。

彰はベットに横になったまま瞬鬼に話しかける。

「悪いな……来てもらっちゃって」

「いえ……アリスから連絡を受けたものでね」

「ははっ、そうか……。そういえばアリスは？」

今気づいたように彰が病室内を見回すと、そこにアリスの姿はなかった。ちなみに彰のすぐ傍の机の上にあった一〇個近くあった林檎も全て無くなっていた。

「一晩中坊ちゃんの傍にいて少し疲れたのでしよう。私が来てすぐにお帰りになりましたよ。人外と言えど、疲れは出るものです」

「後でケーキでも買っておくさ。そうすりゃ疲れなんか吹き飛ばさる」

「甘味は婦女子の原動力ですか」

「ガソリンなんかより効くみたいだぜ」

「と、すると……かなり安上がり、ですね」

「おう、その分燃費はかなり悪いけどな」

彰と瞬鬼はしばらく雑談を続けた。彰にとって今、瞬鬼と話をしていることさえ嬉しいからだ。本当ならここにいないことだってありえた。

「、なあ瞬鬼……」

と、彰。

「俺……間違ってるのかな……？」

瞬鬼は黙って彰の言葉を待つ。彰は静かに続ける。

「アリスの時と同じだよ、また同じ理由で助けようとしちゃったんだよな」

微かに覚えている記憶の断面が同じだった。

アリスの泣き叫ぶあの姿と、

蓮水の心で泣いているように見えるあの姿が、

まったく同じに見えた。手を伸ばすことも苦しそうで、助けを呼ぶにも声が乾いていて、何も出来ず鎖で雁字搦めにされているように苦しそうにもがいているあの姿が、とても “可愛そう” で。「頭じゃ分かってんだよ、あの子がしてきたことが許せないことってのは」

彼女がこの町で始めて人外を殺したとしても何一〇人も彼女の手によって殺されている。一人の命がどれほど重いのかも分かっている。その殺された人外たちの命を踏みじじる行動だったのかもしれない。それでも彰はあの “可愛そう” だという理由だけで、彰は彼女を助けたいと思った。それが間違이었다のかどうなのか少年には分からなかった。

瞬鬼は少年の言葉に、
「間違ってますよ」

とだけ伝えた。簡潔な言葉で。

「簡単に言うんだな。普通慰めるものじゃないのか？ こういう場合」

瞬鬼は鉄扇で口元を押さえながら、小さく笑う。

「そんなものに何か意味が？」

釣られるように彰も笑った。

「だな、意味なんかねーな」

「言えることはただ一つです」

「？」

「坊ちゃんは正しいと思ったことをなさい。それが坊ちゃんを生かし、坊ちゃんを殺しますからね」

瞬鬼の言っている意味が分からない彰は首を傾げた。それを見て瞬鬼がもう一つ付け加えた。

「坊ちゃんは後悔したのですか？ 蓮水を生かしたことに、蓮水を救ったことに」

瞬間だけ、考えた。でも答えは簡単だった。

多分、変わらないと思った。この答えを導き出すのに時間はかか

らないが、この答えを否定するには時間がかかると思う。それでも少年は笑う。

「しねーよ、後悔なんて」

そう笑う。

第4話 少女の敵 終章（後書き）

これで4話が終わります。

蓮水は書いていて楽しかったです。

しばらく更新遅れるかもしれないです。でも執筆はしてると思っています感想や評価をいただけるとありがたいです

第5話 さいころへいかさま《使い

二月一四日。世間がお菓子業界の陰謀に踊らされていたころ、私こと青鬼彰はそれなりの二月一四日を過ごしていた。怪我もそれなりに治り、「あんた邪魔だからもう退院していいわよ」と、追い出されるように見た目だけならこの時期の男たちの敵となりそうな、オカマな鬼の墮鬼だきの病院を退院した彰は赤く彩られている街中にいた。

「はあ……」

ぐったりと歩いている彰の目の前に、大きく手を振りながら彰の名前を呼ぶ少女がいた。少女は宙に浮いている訳でも、他の人間にも見えるただの少女と、言うわけでもない。今日はたぶん普通の女の子とほとんど変わらない。それでもこの少女アリス、ただの人間という訳でもなく、ただの死霊である。

少女は急かすように何度も彰の名前を呼ぶ。人波からぴよこぴよこと手だけが見えるだけなのだが、少女は楽しそうだ。それもそのはずだ。

「もんぶらんもんぶらん」

アリスは彰が退院したことよりも、今日の前にある店の中に入りたくて仕方が無いのである。ファンシーでファンタジーなピンク色に染められた外装のスイーツ店。看板には天使のような子供のモチーフの子供がにっこりと微笑んでいるのだが、今この時だけは憎らしく感じるこしか出来ない。その店先には憎むべき日の特別価格のキャンペーン中で店の全品二割引とでかかど書かれた看板があり、それをアリスが見つけてしまった。最近文字を覚えてきたアリスは何割引という意味を分かってしまっていた。安くなるにはなるのだ。しかし、それに加えて、いつも以上に食べてもいいと誤解している。

いつも以上に食べるということは二割引などと、些細な埃も積も

って山になってしまふということである。人より食べる家の死霊さまは、遠慮というものを知らない。今日食べるものなら今日中に食べてしまふし、明日のものも今日中に食べてしまふ。そんな大食漢（スイーツ限定）にこの店は危険（主に財布の中身）である。どうかしてやめさせなければならぬという状況だ。

「早く、早く！」

目をきらきらと輝かせながら、店の前にいるアリスの下へ行くの出来るだけ時間をかけているのは、ほんの少しでも考える時間が欲しいからである。店のショーウィンドウのパフェの値段（豪華絢爛当店オリジナルモンブランパフェ 二〇〇〇円）を見てびびっている訳では、決してない。

しかし、パフェ一つが普通二〇〇〇円もするものだろうか。この世界の七不思議の一つにでも追加しておきたい。

ゆっくり歩を進めた所で、一步、一步確実に歩んでいけば店が近づくのは必然である。

「早く入ろっ」

店に入った時点で、この勝負 彰の負け。ならば、入らなければいい。と言うわけで作戦開始。

作戦その一

【正直に話してみよう大作戦！】

アリスだって鬼じゃない。正直に話せばきつと、納得してくれるはず。

「なあ、アリス」

申し訳なさそうにアリスに顔を合わせると、
「？」

アリスのニコニコビーム。ぐはっ！ と、良心が一気にえぐられそうになる。それでも、目を逸らしながら、彰は、

「今日は、や、止めとかない……、か……」

どこでそんな技を覚えてきたのか、アリスは自分の瞳をうるうると滲ませる。これには降参せざるを得なかった。

作戦その二

【くっ、傷が痛むぜ大作戦！】

今自分が持つている最大限の武器はやはりこれだろう。そう言いながら彰は自分の腹に手を当てる。怪我はまだ完全に完治していない、つまりは生身の傷こそ、武器になるという訳だ。アリスは彰が怪我をした日はずっと一緒にいた。それだけ心配していたということになる。少しの罪悪感が残ると思うのだが、財布の中身を重視するなら仕方のないことだ。

という訳でさっそく彰は腹に手を当てながらその場にしゃがみこんだ。出来るだけ重傷であるように、わざとらしく声を歪ませたりもしてみる。

これならどうにかなると、本気で思っていた。でも、アリスは、「そんなこと」より、早く入ろう」

今のアリスにとって、彰の怪我よりもケーキの方が大切なようで、彰が墮鬼の病院にいるときにはどこにも行かずに看病してくれたアリスは仮病ではあるが、“そんなこと”と言い切り、彰の後ろに回りこむと、彰の完治していない怪我の一部をぐいぐいつと押すと、店の中に入る。

完全に、目が豪華絢爛当店オリジナルモンブランパフェに染まっている。確実に五個以上は食べる気がする。

アリスが悪いんじゃない。今日、二月一四日である憎むべき日バレンタインデーが悪いのだ。

今日は憎むべき日ということもあり、店の中はカップルなどがほとんどだった。店内には白いカフェテーブルに木製のラウンジチェアが向かい合うように置かれており、完全にカップル専用のような空間になっていた。店員から豪華絢爛当店オリジナルモンブランパフェを五つトレーに乗せて、にこにこ満面の笑みで空いていたカップル席に着くと、ぱくぱくと食べ始めた。

彰はぐったりと疲れたようにアリスの向かいに座りながら目だけ

を動かして周りを動かすといちゃいちゃらぶらぶとカップルたちが席を埋め尽くしていた。他に行くところはないのか、と、口にしそうになるのも億劫になるほど青鬼彰の財布の中身は瀕死状態にあった。アリスは店に入るやいなや「店の前にあったあのガラスの中にあつたもんぶらん五個くださーいっ」と、豪華絢爛当店オリジナルモンブランパフェを一度に五つも頼んでしまった。この豪華絢爛当店オリジナルモンブランパフェの値段は二〇〇〇円とふざけているものが、憎むべき日のサービス期間で二割引で一六〇〇円に下がっただけで、結局は大金には違いない。

一六〇〇円×五。お金を払うことが出来たこと自体奇跡のようなものだった。英世さんが八人ほど遠い世界に旅立ってしまった。

「……おいしい、」

尊い犠牲など知ってか知らずかアリスは幸せそうに豪華絢爛当店オリジナルモンブランパフェを口いっぱい頬張っている。この顔を見ると、少しだけいいのかなと思ってしまうのはいけないことだと思う。せめて一つだけにして欲しかった。

「……何？」

幸せそうに大好きなモンブランケーキを食べるアリスにこれ以上何もいうことも出来ずに、一言。

「おいしい？」

もぐもぐと、口いっぱいケーキを飲み込むと、

「うんっ」

これ以上の幸せそうな顔がどこにあるのだろうか。この笑顔を見ただけで、彰は満足した。英世さん八人ほどの価値はあつただろうと、

「ははっ……」

英世さんへ黙祷を捧げた。

「そついえば……さ、聞きたいことがあるの」

豪華絢爛当店オリジナルモンブランパフェを五つも食べたアリス

はさすがにお腹いっぱいになったのか、時折お腹を摩りながら彰に話しかける。彰は「なに？」と、財布の中身を確認しながらアリスの声に答える。

「この前の女の子……覚えてる？」

アリスの言う女の子とは、羽神蓮水うかみはすいのことだ。彰の命を奪おうとし、人外じんがいを酷く憎んでいる少女。そして、

「うん、覚えてるよ。俺が喧嘩に負けた子」

命を賭けた喧嘩に負けた。それでも彰は生きている。今、この瞬間、アリスと一緒に会話をしているのが何よりの証拠。この状況が今でも彰には信じられない。彰は『死んだ』と思っていた。次に目を覚ますのが地獄だか天国だか、どっちにしる三途の川は渡りきったと思った。でも、実際は三途の川は拜んだのかもしれないがそれを渡ることはなかった。だから、

「『運』がよかつたんじゃない？」

全ては青鬼彰の『運』がよかつたから、なんて答えに行き着いた。彰はそれを誇ることも悔やむこともせず、ただ頭の中で何度もそう納得する。他人よりちょっと『運』がいい。他人の『運』でも喰っているみたいに、だ。少年が拾った宝くじは必ず当たりを引いたこともある。少年が引くくじは必ず当たりを引く。何度も変わらない豪『運』。だから今回もきつと『運』がよかつた。そう考えるのが少年にとっては当たり前なのだ。

神に愛された子なんて言う大人もいる。それ自体にどうこう言うつもりは彰にはない。ただ、この“日本最強”という名前だけが彰は何よりも嫌いなものだった。蓮水と名乗る少女はこの名前に“偽り”とつけた。それが彰にとって、少しだけ嬉しかったのかもしれない。命を狙われていたというのに、嬉しく思った。

だって、そうだから。彰は自分が“日本最強”だなんて思っていない。もしそうならこの前の喧嘩もあっさり勝って、めでたしめでたしだった。彰が“日本最強”でないことを蓮水は証明した。

「ま、あの子強いから仕方ないのかな……イカサマもばれちゃった

し」

小さく呟いた言葉だったのだが、アリスは、

「そう！ それっ！」

大きな声を出して体を大きく乗り出してきた。

「な、何が」

「イ、カ、サ、マのこと！」

蓮水は彰のさいころがイカサマだと言った。アリスは確かに聞いていた。鼻を鳴らしながら顔を近づけてくるアリスに彰は少し押されながら、ポケットから三つのさいころを取り出した。

この世界には『運』だけを頼りに生きているものなどいない。いたとしてもそれは『駄目』だと彰は思っている。確かに『運』がいい。『運』が悪いなんてことは考えたりもする。それが不器用な人間らしさだし、でも、この世界においてさいころを一〇回投げて、一〇回とも同じ目を出せる人間はいない。それは彰も例外ではない。「私それって信じられないの。ショウは確かにさいころを投げて何回も望んだように数字を出してたじゃない」

「……実際にさいころを持ってみれば分かるよ」

そう言い彰はさいころをアリスに投げる。アリスはそれを受け取って、指でさいころをいじってみるが、

「……………？」

不思議そうに首を傾げることしか出来ない。

「じゃ、これも」

そう言って彰はもう一つのさいころをアリスに投げた。アリスは受け取った後、少しだけ首を傾げていたが、何か違和感を感じた。

それが何かなのかすぐには分からなかった。それでも時間をかけていくと、それが明確になっていく。

初めのさいころと二つ目のさいころ、少しだけ重みが違う。何ミリグラムの差で、両方を一緒に持ち、それを比べないと分からない

くらいに僅かなのだが、確かにさいころの重みが違う。

「それがイカサマの種。この世界にさいころを一〇回振って一〇回同じ目が出せる魔法使いみたいな人間いないよ」

そう言っただけ最後のさいころをアリスに投げた。

「……これも違う」

三つが三つとも重みの違うさいころ。微々たる差だが、確かに重みが違う。それが確かに手の中で感じると、アリスは手の中からさいころをテーブルに落とすように転がした。さいころはからんからんと音を立てながら転がる。それを見ながら彰が、

「二つ目が六、三つ目が四」

そう呟くと、二つ目のさいころの目が六、三つ目が四になった。

確かになつたのだが、初めに渡されたさいころだけ彰は先に数字を言わなかった。出た目は五、だった。アリスは細い指で初めのさいころを持ち上げる。

「ねえ？ これは……どうして分からなかったの？」

どうせなら全てのさいころを細工してしまった方がいいのではないか？ そうアリスは考えた。どうせイカサマをするのなら、全部にしてしまった方が効率がいいのではないか？ でも彰はある、さいころには細工を施していない。それがこのさいころ。これが母の形見とか父の形見とかだったら、なんとなく理由はあるがそれでも不自然だ。

「勝手に人の母と父を亡き人物にしてんじゃねーよ、今この瞬間も生きてるっての」

彰の父と母はかなりの変わり者だった。それは彰が一〇歳にも満たない子供ながらに感じていたことだ。父、母ともに霊能者としてはかなり有名だったのだが、個人の性格が飛びぬけておかしかった。いい年を重ねた大人が魔法と言うものを信じきっていた。それはまあ人の趣味と言うものでよかったのだが、ある日父と母が「そうだ、アイスランド行こう」などと言い出して家を飛び出して、六年近く経ったのだが、たまに電話で「彰よ！ 霊能者を辞めて魔法使いに

ならないか！』などと素っ頓狂な連絡をしてくるだけで、とりあえずいつも返事は『くたばってくださいね。お父様』とだけ言っている。

まあ……元気なことはいいことなのだが、魔法を一切信じようとならない息子の気持ちを多少なりとも理解してもらいたいものだ。

そんな父と母だが確かに遠い空の下で生きているのだから死んだ人呼ばわりは止めてもらいたい。

「それは単純にいじっちゃだめだからだ」

アリスが手に持っているさいころはポリシーとかプライドとかでいじっていないという訳でもない。

アリスは不思議そうに首を傾げるが、それに構わず彰はさいころを三つ奪い取ると、

「イカサマだつてするさ。この世界に魔法使いなんているわけねーだろ？」

そう笑い飛ばした。

第5話 さいころへいかさま《使い》(後書き)

最近停滞モード……………

中々ネタが出なくなりつつあります。で、他の小説執筆でさらにネタが出ないという停滞の中の停滞モードに陥っています。

更新が遅れる可能性が高いです。すいません

第6話 喫煙教師

霧ヶ崎町。^{きりがさき}人外と人間が共存するこの町には歩いている姿でさえ、
霊力のある人間にとつては喜劇のようなものだった。頭には山羊の
角のようなものが生えている人間が新聞配達をしていたり、足の無
い人間がジョギングをしていたりと、中々な光景が広がっている。
霊力が微塵もない人間には普通の人間が町を行き来しているだけに
しか見えないし、もし見えたとしても、それは九〇パーセント以上
が同業者であるし、残りの一〇パーセントに至つては電波扱いされ
るだけで、ほとんど平和である。

ただこの平和の中を。

ぐったりと歩いている青鬼彰の姿があつた。

「つ、……疲れた……、何でこんな坂道を毎日全力疾走しなきゃい
けないんだ……」

この町に学園と呼べるものは一つしか存在しない。町を見下ろす
ことの出来る大樹を取り囲むように建てられた霧ヶ崎学園^{きりがさき}だけ。小
学、中学、高校、受けるべきであろう学業が学園の中に閉じ込めら
れていた。それも人外を監視する目的が配慮された結果だ。

そのことは今どうでもいい。今気にしなければならないことは、
「とりあえずこの坂道を誰か買い取つて平地にすべきだ、うん」

この目の前に広がる急斜面三五度のありえない坂道だ。いくら立
ち止まろうとも坂が緩やかになることのない非情さを知っている彰
は、恨めしい言葉を吐くだけで、止まることはしなかった。もちろ
んこの坂道を回避するために学園が馬鹿高い料金のスクールバスな
んてものを用意しているのだが、万年金欠の青鬼彰にとつてはその
金を払うくらいなら生活費に回す。最近は死霊の居候も出来たこと
でエンゲル係数が跳ね上がった。

（疲れてこのまま行き倒れりゃ、この坂道登らなくていいのかね…
…でもそうになると、今度はあの喫煙教師に追い掛け回される気がす

るし……はあ、)

そんなことをぼんやりと考えていると、何かが物凄い速さで追い抜いた。

赤く後ろに縛ったポニーテールが本当の馬の尻尾のように揺れながら、長袖のブラウスの上から緑色のブレザー、灰色のプリーツスカートという姿は霧ヶ崎学園の高等クラスの制服だったが、スカートが舞い上がり、その下から黒いスパッツを履いて色気の欠片もない全力疾走をしている姿は一瞬だけ女の子という性別がこの世に存在しないのではないかと思わせる。

「あー、今日も元気だね……」

寝ぼけと疲れで腐りきった頭をその声が目覚めさせた。

「あんた今日はいただ」

彰は走り、目の前で足踏みをしている赤鬼陽菜あかきりやうなに近づく。

「……おはよ、……若い子はいいいえ。疲れ知らずで、」

彰に声をかけられた陽菜は呆れるように手をぱたぱたと顔の前で振りながら、

「あなたと同年なんだけど……？ 私」

「あれ？ そうだっけ？」

「そうよ」

陽菜は足踏みを緩めると彰の傍まで近づく。その表情に疲れなど一切ない。

「よく朝っぱらから走るなあ」

「彰は朝っぱらから元気なさすぎ」

「この坂道を走って元気のある奴なんて陽菜くらいだよ」

この急な坂道を歩いているのはこの二人だけでは勿論ない。足を止めながらゆっくりと確実に歩いているものもいれば、もう歩くことを止めて人間を止めてしまいそうに天を仰ぎ見るものなどいるにはいるのだが、この坂道を全力疾走して走り足りないという顔をしている人間は陽菜以外存在しない。陽菜はスクールバスに乗るお金も持っているのにバスに乗るのが『卑怯』と訳の分からないことを

言い、未だにバス通学をしていない。

「でもさ」

彰は何となく気になったことを口にした。

「陽菜とはよく通学のときは会うね。時間が重なってるの?」

彰の些細な疑問に陽菜は、うつ、としたように顔を強張らせると、

「た……、たまたま、よ」

そう言い、彰を後ろに置いて走っていった。

「……、たまたまか」

彰は一人で小さく頷いた。そしてそのまま学校への道を一人で歩いていく。

現代においては珍しいと思われる木造校舎は生徒の学び舎と言う感じではなく、校門の目の前に立ったときに一番に目が行く、少なくとも一〇〇〇年以上はそこに鎮座し続けた大樹を守るように建てられていた。本校舎と旧校舎が奥と手前にあつて、小等部と中等部は奥の四階建ての旧校舎にあり、手前の本校舎には高等部が設置されている。本校舎を上空から見ると『回』のような形をしていて、『回』の中心の大樹をぐるりと囲むように建てられた二階建ての校舎はほとんど新築のような綺麗さである。だが、この校舎が建つて数一〇年は経っているのは瞬鬼と春婆ちゃんが教えてくれた。

(取り合えず……職員室か?)

学園に行く足が重かったのは坂道だけの理由だけではなく、この前のことを喫煙教師せいけんに報告しなくてはならないからだ。まさか『負けました』なんて言える訳もない。きつと言ったら、『取り合えずお前、今から俺のサンドバックな』とか言われる気がしてならない。(やっぱ……だめだったかな……、こうなったら嘘でもついておくか? いや、そんなことをしてもまたあの子は来るかもしれないし……そうなったら嘘がばれてサンドバックじゃ済まないかもだし……)

「どうした? 朝っぱらから頭捻って、体捻って? あ、欲求でも

たまつてんのか？ 主に性的な意味で」

後ろから下品な声が聞こえたので彰がゆっくりと振り向くと、いつもの白いジャージ姿で右手には当たり前のように煙草に火がついていて、校門の前だというのに遠慮と常識という言葉を知らないように豪快に煙を吐きながら煙草を吸っている喫煙教師こと佐倉唯の姿があった。

「お、おはようございます……」

「おつす。しかしな、欲求が溜まつてんのかは知らねーけどな朝っぱらからぐねるな。きもいから」

知らない内に体をぐねらせていた彰は慌てて体をぴんと張った。

このまま体をぐねらせていたら学園内の不振人物のリストに載ってしまうところだった。

「朝っぱらから煙草ですか……、先生副流煙つて知ってます？」

副流煙という言葉聞いた途端、佐倉は嫌そうに彰を見る。

「お前さ、教頭みたいなこと言うなよ……ちよつとくらいいいじゃねーか。まだ朝起きてから一〇本くらいしか吸つてねーんだから」

問題はそこではないのと、朝起きてから一〇本はくらいとは言わないと思うと口にするのは止めた。佐倉は仕方なく指で煙草を握りつぶして灯つた火を消すと、ポケットから巾着袋のような携帯用灰皿を取り出すとその中に煙草を入れる。

「で、」

ぎくりと固まる彰の肩をぽんぽんと叩きながら佐倉が尋ねた。

「例の犯人どうなった？」

「そ、それは……」

素直に『負けました、てへ』なんて言えない。佐倉の目がぎろりと睨む瞳は彰ではなく、霧ヶ崎町の人外を消していった犯人。つまりは羽神蓮水を捉えている。しかし彰はその羽神蓮水に対し、何もしなかった。その結果、彰は喧嘩に負けた。抵抗して負けたのなら、まだ佐倉唯も彰を許したのかも知れない。

「……………すみません」

それでも彰は間違ったことはしていないと思う。だから、誤魔化すことを止めた。

「何？」

一瞬でも誤魔化そうと、嘘をつこうと思った自分が情けなくなつた。あの時思つたことを思い出せ。あの人外と自分を憎む少女に人外だけでも嫌いになつてほしくなくて、あんな必死になつたことを。「……負けました」

顔を三回ぐらいぶん殴られる覚悟でとんでもないことを言つた彰は反射的に瞳を閉じた。暗闇の中で初めに感じた感覚は顔を拳骨で思い切り殴られた痛覚などではなく、

「、そうか」

初めて聞いた佐倉の優しい女の声だつた。いつもは男よりも男らしいと言われている佐倉のとても深い女の声。視界が途絶えたまま聞く佐倉の声にドキツとしないと言えば嘘になる。

「ま、お前が死んでなくてよかつたよ」

恐る恐る目を開けたとき佐倉はにかつと笑つていた。本当に安堵しているように笑つていた。

「あ、……、」

「ほんとよかつた」

最近自分が情けないことによく気づくようになった。こんな器の小さい人間だつたとは思ひもしなかつた。この人は本気で心配していたのかもしれない。彰の身を

「……」

彰は言葉を出すことが出来なかつた。そんな彰の肩を佐倉は両手でばんばんと叩き、

「何しよげてんだよ！ 初恋の相手に告つて振られた中学生一年の春みたいな顔しやがって！ お前が死んでないのが何よりの幸運だつての、誇れよお前の幸運！」

かははつと全てを笑い飛ばすように佐倉は校門を笑いながらくぐつて行つた。そんな佐倉を見送りながら、一言だけ、

「……ありがとう」

そう、小さな声で呟いた。

第7話 始りの日

日本から遠く離れたアイスランドの空の下。

その空の下に一人の少女がいた。何をする訳でもなく、ただ、空を眺めていた。大西洋の真ん中にある島国ということもあり、空には渡り鳥などが空を優雅に仲間たちと飛んでいた。

「……………」

それを羨ましくも、妬ましくもせず少女は空を眺めていた。それは過去を知らないように、未来を知らないように、現在いまを知らないように。ただ、そこに存在しているだけの人形のようなだった。

見た目一〇歳ぐらいの少女は光の反射で白く輝きを放っている金属製の鎧のようなものを着用していて、その下には黒いワンピースを着ていて下半身に少女の細い太ももまで伸びたブーツがあるだけ。その寒そうな格好なのだが、少女は満足そうではなく、不満そうでもなく、ただ、そこに存在していた。

「……………」

透き通った翡翠色の瞳で空を少女が眺め続けていると、風が吹き、少女の長いこの世界に存在するどの宝石よりも美しい黄金の髪が揺れる。少女の後ろに二人の日本人の男女が立っていた。威厳はあるように見えるのだが、まだ若さが残る三〇代ぐらいの夫婦だった。一人の女は優しく微笑みかけ、一人の男は心配そうに少女を見下ろす。少女は何事も無かったかのように二人に一瞬だけ視線を合わせると、再び空に視線を向けた。

この三人は親子という訳でもなければ親戚でもない。ただの友人。それでも親のように少女を心配する二人は少女の傍を離れることはなかった。

「またここか……………」

男が顔にまだらに残った無精ひげを触りながら少女に話しかける。少女は声が聞こえているのか聞こえていないのか分からないが、

「……」

ミクロ単位だが小さく首が縦に揺れた気がする。少女の意思表示なのだろうか。男は、

「そうか……」

とだけ。

男は困惑する訳ではなく、優しく笑った。

少女は再び、空を眺める。空を眺めていた少女がふと、

「……、」

小さく息を漏らした。少女は何を見たのか気になった男が空を見上げるが、快晴な空にはぽつぽつと巻積雲があるだけで、他に何もなかった。

「何かあるのか？」

そう男が尋ねると少女は、

「……」

首を横に振り、「……何も、」そう小さく答えた。まるで初めて喋る人形であることを知ったような不思議なのに嬉しく思う妙な感覚が日本人の三〇くらいの夫婦に決心を付けさせた。

男と女は視線だけ合わせると、女が小さく頷き、男もそれに答えるように頷く。

男と女が少女に出会ったのは三年前のこと。少女はいつもこの場所に立っていた。火山活動も盛んなこのアイスランドの世界の中に存在しないほどに静かで青々しく茂っている草原の中心に。ただ、何をする訳でもない、ただ、少女は空を眺め続けていた。

いつも、同じ時間に。

いつも、同じ場所に。

いつも、同じように、少女は立ち続けていた。

だから今日もここにいると思った。そして少女はここにいた。

男が怪訝そうに少女に尋ねた。

「我々が日本人ジャパニーズということを知っているか？」

少女が小さく頷く。肯定。

「君はひとりなのか？」

再び首を縦に振る。肯定。

「私たちは君に感謝している」

少女は動かない。男黒っぽい灰色の汚れたジーンズのポケットから一枚のメモ用紙と一本のボールペンを取り出した。そこに書くのは文字などではなく、何か記号のようなもの。小学生の悪戯のようにも見えるが男の目は真剣に一つの図を描くことに必死であることを物語っている。

「……………ん？ ……………、」

男が必死に紙に書いていると、

「……………、違う」

そう少女が呟くと、少女は紙とボールペンを男から奪い取ると、

その男の記号の上から違う記号を書き足した。

「……………一つだけではただの『生』の意味を成す、二つで『負』の意味を成す。それが『呪』の刻印^{ルン}」

記号を描き終わると少女は記号の中心にペンを突き刺す。

「……………ペン^{ルン}は十字架になり、紙は符になり、記号は陣になり、刻印^{ルン}は完成する。……………、」

ペンは水を浸した泥人形のようにプラスチック製のカバーも中のインクもどろどろと溶け出し、紙に流れ落ちていく。

「……………それが、……………“魔法”」

紙はクラッカーでも弾いたような爆発音と共に消滅した。少女は小さく、

「今のは『呪』の中でも一番簡単な『破壊』。使用が困難、または不要な刻印^{ルン}を破壊するもの。これも出来ないなら刻印^{ルン}はまだ使わない方がいい……………、後悔……………、する……………、」

機械音声にも似た用意されたプログラムを読み上げるような無機質な音声と肉声の混じった声で少女が語ると、少女は男から視線を外して再び空を見上げる。男は自分に呆れるように無駄に大きな声

で、

「いやー……私は不器用かつ年で記憶も中々駄目みたいだな。君に教えて貰ったことに記憶が追いついていないようだ」

無駄に笑い話をするように笑いながら話した。少女は“魔法”という単語を発したことに對しては男と女は気にする様子も見せない。

「魔法」というのは中々難しい。どれだけ験算しても理屈も理念も常識も全てが覆されるよ。だからこそ私たちは知りたいたいのかもしれないね、

“魔法”というものが……なあ？ 母さん

男に母さんと呼ばれた女が、顎に指を当てながら、

「うーん……、そうね……」
女の周りの時間だけがスロー再生になったようにゆっくりとした口調で、

「……これもあの子のためなのかしらね？」

「ああ、そうさ！ きつと愚昧の息子にだって分かるだろうさ」

男と女の名前は青鬼肖一あおきしやういちと青鬼秋あおきあき。日本で最強と呼ばれる霊能者青鬼彰あおきしょうの父親と母親だ。

「いつ電話してもくたばれと言ってくれる優しい息子だ。きつと分かってくれるさ」

「んー……、そうね……」

秋はゆっくりだが確かに頷く。

肖一は少女に切り出す。

「実は私たちは日本へと戻ることになった。これ以上家を空けておくのは親としての責任を放棄するも同意。そんないい加減な親などこの世界には存在しないと考えているからな」

肖一の言葉に少女が首を傾げる。もちろんミリ単位の動きなので少女と接したことの無い人間からすれば少女はノーリアクションのようにも見えるが三年近く少女と接してきた肖一と秋にはその動きで十分な少女の意思表示になった。

「先も言った通りだ。君に感謝している。だからこそ君に提案したいことがある、これは母さんと二人で相談したことなんだ」

肖一と秋はもう一度小さく頷くと、

「一緒に日本ジャパンに行かないか？」

そう手を差し伸べた。

第8話 空 其の一

二月二三日。午後六時三分。真冬の夕暮れ。

夕暮れは夏より早く、すぐに空が闇に染まる。授業を受けた青鬼あおきし彰しょうが一人ぐったりしながら帰り道を歩いていた。家と学園の距離さくゆいがある疲れもあるのだが、何よりも最近さいきんは担任の佐倉唯さくらゆいに絞られていた。絞られる原因は彰が理由がどうであれ佐倉の授業を合計して二日間ほど無断欠席をしてしまった為にこつてりと絞られていた。

悪いのは確かに自分なのだが、教室内で一对一で補習をさせられるというのは精神的にはよろしくないのと肉体的にもよろしくないのが重なり、疲れが倍増する。

「あー……」

隣にはいつの間にかそこが自分の定位置と言わんばかりに歩いていた少女がいた。いつもの青いワンピースのスカートがひらひらと風で舞うのも構わずにそこにいた。客観的に見ると兄妹ケイトイにも見えるがこの二人の関係は兄妹という訳でもない上に少女は突然現れた。擬態していた虫が急に見えた時のようにいないと思っていたところに現れた少女を不思議そうに眺めている人たちもいるのに少女はどうでもよさそうに彰の隣でにこにここと笑っていた。

「人の多いところで急にでてくんよ。びっくりしてる人がいるだろ……」

ぐったりとしていた彰はかなりのローテンションで少女に突っ込んだ。

「えー……、気のせいかな、みたいなことにならないの？」

「そんな注意力がナマケモノ以下の人間はいません。現に見てみない、周りの人々の奇異と好奇の視線を」

普通ならこの突然現れた不思議な少女に注目するのが人のヤジウマ根性と言つものだろうが人々は一度だけ少女に目をやると急に興

味がなくなつたようにすぐに作業に戻つた。少女は不思議そうに首を傾げると、

「ねえ？ この人たち何してるの？」

彰は少女に答えるように空を指差した。

「今日は準備してるんだよアリス」

「準備？」

「そう、明日に見れる綺麗な星空のためにね」

霧ヶ崎町のほとんどの店や学校は今日と明日は休むことになっている。その原因が明日がピークになるとされているし、座デルタ流星群だ。店先や家の前に家庭用の小さな望遠鏡を設置しているところや、今も空を見上げている子供の姿などが目立つ。空はここ最近快晴で明日も晴れると言われているので、すでに準備をしているところがほとんどだ。

「ふーん、空なんて見て楽しい？」

「ただの空ならつまらないかもね。でもただの空じゃないから楽しいと思うよ、アリス」

「そうかな？」

アリスと呼ばれた少女はまだ納得出来ないように首を傾げる。彰がぼんぼんとアリスの頭に手を置き、

「まあ百聞は一見にしかずってね。明日になれば分かるよ」

「……そうかな？」

帰り道を歩いていた二人が分かれ道の前に来るとアリスはいつものように右の道を行こうとしたが、彰がそれを止めた。

「今日はそっちじゃないよ、今日はこっち」

そう言いアリスの手を取って左の道に進んだ。

「何か呼ばれてるんだよねー、瞬鬼が来いってさ」

「折檻？ それとも愛の告白？」

「そんな素敵かつおぞましいイベントはないと思うけどね」

もし瞬鬼が愛の告白なんぞしてきたら全力で舌を噛み千切る。ま

だ折檻の方が何倍かましだ。むしろその可能性の方が十分すぎるほど高い。いつもなら

「まあ……行ってみれば分かるだろ」

学園の昼ごろに屋上にやってきた瞬鬼が妙に、にこにことしてるのが気にはなつたが、「何の用だ？」と聞いても、「お楽しみです」と、話す気は微塵もないらしい。あの人をおちよくる目の時の瞬鬼は近づきたくないほどに嫌いだ。あの目の時の瞬鬼は人をいたぶることや鬪ることに對して積極的になる超絶DSモードサディストに入っている。にやにやと笑いながら人の嫌がることをするくらいの精神状態イになつていて、いくら人が道を尋ねようとしても本当のことを教えるどころか逆の道を教えるぐらいのことはしそうだったので、「わかつた」とだけ伝えておいた。最大の安全策だと思う。

「じゃあシヨウは本当に何で呼ばれたのか知らないの？」

アリスにそう聞かれたときに少しだけ考えたが、

「、ない」

そうきつぱりと即答が出来るほど青鬼家に戻る理由はなかった。

たまに家に呼ばれることなんか今までなかったし、いきなりの例外が飛び出すほど、青鬼家も暇ではないと思う。

「寂しいんだ……………」

そこ勝手に同情の念を生み出さないように。

舗道された道と獣道のような人の手が一切入っていない道とでは距離が同じでも疲れや気だるさの感じ方が違う。いつもは人が何人もすれ違う町の道を歩いて建てられて数一〇〇年でも経つたのではないのかと思うほどおんぼろなアパートの帰り道を歩くはずだったのだが、人が出来るだけ迷い込んだり興味本位で入って来ないようにと口実を作つて出来るだけお金を使いたくないとケチな青鬼家の現当主である青鬼春あおきはるが青鬼家までの道に一切の手を加えていないためにちよつとした登山感覚で上る青鬼家までの道を歩いていた。青鬼家の最寄のバス停でさえ三〇分以上歩かないと青鬼家には届かな

いと言っのはかなり面倒だ。バスに乗ってから来たというのに汗が額から滲み出ている。

「、これってまさか」

青鬼彰の頭に少しだけ嫌な予感が過ぎった。今日の昼ごろに出会った瞬鬼は超絶DSモードサディストだったことを思い出すと、彰の足がぴたりと止まった。

「あいつの嫌がらせじゃねーだろな。だったら最悪だぞ最悪！ どうして何でこの日を選ぶかなー喫煙教師やくわんぎ大先生にこってり絞られて私の生命力の残量はほとんどゼロですよゼロがマイナスに行くと人は死んでしまうというのを知っててやってるならどんだけ性悪なんですかくたばってくださいよお願いしますからあのDSさんくたばってよ」

「喋ってる暇があるなら歩いた方がいいと思うなー」

疲れを誤魔化すために文句を言っていた彰の隣でアリスは重力に反逆をしてふわふわと浮遊しているアリスに視線だけを移すと、

「いいだろ少しぐらい現実逃避しても。ワタクシ人間であるからして空を気持ちよさそうにふわふわーっと飛ぶことは出来ません。空を飛ぶために人間は飛行機などを開発はしてきましたが未だに生身の身体で空を飛ぶことに成功していませんつまりは空なんかを飛ばないようにと八つ当たりモードな訳でちゃんと地に足をつけてこの苦勞を分かってください」

足は錘が付いたように重く動かすこともつらいのだが、口だけはどうも達者に動くので足の二倍ほどの速さで口を動かして疲れを誤魔化す。

「八つ当たりさいてー」

冷やかな瞳でぐさりと心を抉られるようなアリスの言葉に彰は、

「、確かにさいてーだ」

闇に染まる空を見上げながらそうばやいた。

生まれて初めて“魔法”というものを知ったのは子供向けの日曜

朝にやっているアニメだった。もちろん子供のところはそれなりに楽しむことが出来た。杖を振ればそこから炎が文字を描くように綺麗な花のように出てくる。杖を振れば無限に水が湧き出る。杖を使って空を飛ぶことが出来る。そんな何でも出来る超人に憧れるのも子供の間だけだと思う。なのに

『見る、我が息子よ。これが“魔法”と言うものだ。誰もが憧れ誰も欲しがる“魔法”だぞ』

『あらら〜彰ちゃんはお気に召さないのかしら〜？ まじかる〜』
そう言い二〇代後半に差し掛かった母は自分用に買った玩具の魔法の杖を無邪気に振ったりしていた。それは人の趣味だと言うことであまり強くは言わなかった。しかしそれが何年も続いたころ『おかしい』と言うことに気づいた。アニメなどを見なくなってもまだ父と母は“魔法”と言うものに興味を抱き続けていた。ある意味『異常』だと思う。

白魔術、黒魔術、天草式、ローマ式 数ある“魔法”^{まゆっば}に手を染めていた。何かを求めるように、必死になって、

“魔法”を求めていった。

六年前のこと、父と母は何かの資料を見つけたらしく、急にアイスランドに旅立っていった。まだ一〇歳だった彰を置いていった。今もたまに電話があり、死んではないのだが、『魔法使いにならないか？』そういつも聞いてくる。今でも“魔法”にとり憑かれています。息子を巻き込もうとしている馬鹿親なのか、それとも本当にとり憑かれていますのかは分からないが『くたばってください』といつも言っている。

それで目が覚めるようなら“魔法”というものにこれほどまでに興味を抱かないと思う。そしてそんな六年間も家を空けた親たちがどうして

「おう、久しいな息子よ」

「あら、おかえりなさい」

「……、」

日本に帰ってきているのだろうか。

第8話 空 其の一（後書き）

そろそろストックが無くなって来ました……。

本気でまずいな……、最近になって一ヶ月更新してきて時間を稼いできたのに、それすら厳しい。

第8話 空 其の二

一度だけ目をこすった。これが幻であるかどうかを一度だけ疑ったからだ。しかし目をこすったところで幻が消える訳もなく、

「どうした瞳をこすったりして？ 久々の親子の対面に思わず涙が零れたか？ そーか、そーか……そんなに嬉しいのか。だったら迷うことはない、むさ苦しくも暖かい父の胸に飛び込んでくるがいい！」

彰の父親である青鬼肖一がドラマで見る親子の感動の対面のような臭い芝居で両手を広げ、近づいてこようとしていたので、彰はビシッと肖一とその隣でにこやかに仏のような笑みを浮かべていた彰の母親である青鬼秋に指を指すと、

「そうじゃない！ 何でここにいるのって話！ それと、この子は誰？」

指をすーっと秋の隣で座っていた少女に移動させる。秋の隣で魂が抜けたようにぼーっと座っていた少女はこの場において、かなり浮いていた。少女が翠眼の金髪外国人だったからではなく、少女の妙に大胆な服装がである。上半身は外国製の白い鎧の下に黒いワンピース水着を着ていて、下半身には何も穿いておらず、太もも部分に巻かれているのは彼女なりのお洒落なのか白黒に分かれたモダンなフリルの付いたカバーのようなものが着用されていた。しかしそれでいてもかなり大胆なファッションだと思う。日本は今、真冬という時期で少しは寒がるのが人の反応だと思っただが、少女は寒がることも暑がることもせず膝を立てて、その前に手を組んで座っていた。いわゆる体操座りというやつで。

指を指されたというのに少女は微塵とも動かない。彰は「もしもーし」と声をかけてみる。

「え……マジで外国人とか？」

外国人ならどうしてこんなところにいるのだろうか、まさか誘拐

とかじゃないだろうか、恐怖のあまりに少女は喋れなくなっているとか、そんな考えが頭の中を駆け巡っていると、

「……………」
翠眼の金髪外国人は彰の指先を眺める。その深く透き通った宝石のような瞳で。指先を通して彰と少女の目があつた。顔が長い金髪に輝く髪で隠れていたのだが、ミリ単位で顔を動かしたためにその端整な顔が現れる。年は一〇歳か一一歳くらいの女の子で、外国人特有の吸い込まれるような瞳に思わず息を呑む。

「シヨウ！」

彰が少女と見詰め合っているとアリスがむすつとした顔のまま叫んできた。その声に自分が考えている以上に体がビクツと反応する。「いやっ、あの……、」

声が上がらないのを隠そうとすればするほどに声が震えるからアリスは更にむすつと頬を膨らませる。

「同じ金髪なのに全然反応が違うのはどうしてなの？ え？ ロリコ、」

「それ以上口にするのは止めて、違うからね。ほら日本人は外国人を目の前になると情けないくらい緊張しちゃうアレだよアレ、うん」
アリスとこの翠眼金髪外国人が見た目の大きさがそんなに変わらないということをお口にしようになるがそれを必死に飲み込む。

「そうかな？」

「そうです」

目の前でこんなに騒いでいるというのに少女は微塵たりとも動かない。

段々と言葉の壁が分厚いを感じていく。もしかして日本語が通じないのかもしれない。だから目の前で騒ごうとも少女は動かないのかもしれない。

「ニポンゴワカリマスカ？」

英語の成績を見た担任の喫煙教師に「お前は日本人でよかったな！ 日本に永住することを薦めてやるぜ」と言われたことがある彰

の英語の実力では挨拶すら英語で話すことも出来ないの、取り合えず片言風の日本語で話しかけるが、

「……………」
当然少女は反応を見せない。

「……………う、うだー」
彰はその場に諦めるように崩れ落ちる。

駄目だ。英語が分からないんじゃ会話も出来ないし、意思の疎通も無理だ。外国人とは最低限の英会話能力とジェスチャーさえ出来れば会話が出来ると言っていた人もいたが、実際に目の前に外国人を目の前にしてそんなに器用なジェスチャーも出来ないし、最低限の英会話能力もない彰では、その最低限の意思疎通も出来ない。

「この子本当に誰？ 俺の妹とか？」

疲れがピークに陥って冗談半分にそんなことを立っただまま石化したように固まっている肖一に聞いてみる。すると、

「何故分かった？」

「は？」

父の口から出てきた言葉は冗談を冗談と認識していないような口調で、

「まさか洞察力が父以上に成長するとは我が息子ながらに恐ろしい、いや恐ろしいものだ。はっはっはっは。さすが我が息子と言わざるを得ないな。昔からお前はそうだ」

と、父が何やら彰の恥ずかしい過去まで暴露しそうになるほどに嬉々とした顔をして饒舌になっているところを彰が無理やり口を挟む。

「ちょ、ちょっと待て、え？ お前はこの翠眼金髪外国人が僕の妹だとほざきやがるのでございますか！ 一〇〇歩、いや、一万歩ほど譲ってこの翠眼金髪外国人美少女が俺の妹だとしましょうか！ では問題一、この翠眼金髪外国人美少女は一体誰の子でしょうか？」

答えは純粋な日本人である貴方さまの血の欠片も引き継いでいないということ、貴方さまは失格ですはいご退場願いますかロリコン幼女誘拐犯

野郎！！」

凄まじい剣幕で息子に言いたい放題言われる父親。しかし、父も息子に押し負ける訳にもいかずに一つだけ言い返した。

「誰が幼女誘拐犯だ！ 誰が！」

「どっからどー見ても幼女大好きな幼女誘拐犯じゃねーか！ 言っとくがお前は幼女誘拐犯であってロリコンじゃないぞお前のような二次元と三次元が区別出来ないやつが犯罪を犯すんだ！ マジでどっから連れて来た！ この子の親はどこだ！ お前らが行ってたアイスランドか！ 親が犯罪者ってどんなドキュメンタリーだよ、哀れすぎて誰も見やしねーよそんなドキュメンタリー」

と、言いかけて彰が翠眼金髪外国人美少女が蚊の羽音のような聞こえるか聞こえないか微妙な声量で、

「……、」

何かを言った。

死んだような瞳で彰の顔を見上げながら、小さく呟いた。

「……貴方が青鬼彰か」

少女は意外にも日本語が上手だった。そのことに彰は驚いていたのだが、

「……貴方が青鬼彰か」

少女はそれに構うことなく、用意された台本でも読むように淡々と台詞を繰り返す。このまま固まっているのもすぐに限界が訪れそうだったので彰は、

「……あ、ああ」

小さく頷くことで少女の質問に答えた。

「……そう」

少女は何かを確認するように口の中で空気の流れを変えるように一瞬だけ息を飲み込む。そしてそれを吐き出すように小さく声を漏らした。すると急に興味が無くなった猫のようにぷいっと顔を逸らして秋の隣に座り込んだ。

嫌われたというよりは本当に興味の対象が変わったようにも感じ

た。

「なん、だ……？」

口からいつの間にか声が漏れていた。

少女の口から微かに聞こえてきた音が彰の耳を支配した。小さい声で聞こえないくらいの声なのに耳に強烈に残った。

『、』

少女の口元まで耳を近づけないとほとんど聞こえないほどの本当に小さな声が延々と彰の耳の中で音楽がリピートしているみたいに聞こえてくる。耳を両手で力一杯防ごうが脳内にまで焼き付けられた音が止むことはない。ただ、無音に近い音が聞こえないはずの声がリピートする。

「どうしたのシヨウ？ ……………シヨウ？」

心配そうに声をかけてくるアリスの声よりも目の前で黙ったまま座り込んでいる少女の残した声が気になって仕方がない。たった一言にこれだけ悩まされる。馬鹿らしいと思いつつも気になって仕方がない。

彰はもう一度、沈黙を守る少女に話しかけた。

「今、何か……言った？」

少女は彰の言葉に耳を傾けているのかも分からないくらいに小さく首を動かす。否定するように横に振る。

それ以上少女が何かを語ることはなかった。

第8話 空 其の二（後書き）

今日初めて自分の小説を見た方こんにちは。今まで読んでいただいた方もこんにちは。

ししとうです。

少し前ですが『死霊はおよめさん』のユニークアクセスが1万人を超えました。何だか知らぬ間にたくさんの方が軽くでも寄って読んでくれたんだなあと、感無量。

読者のみなさんにありがとうと更新が遅くてごめんなさい。

第8話 空 其の三

畳が敷き詰められた修行堂で一人彰は考え込んでいた。

「ったく、あのロリコン……何考えてんだ」

何年経ってもあの親たちの考えていることが分からない。魔法だなんて言葉を信じて家を飛び出す時点で親失格と言ってもいいが、ただそれだけで親と認めないのも少し我侷な気がするから、それはまあいいとする。

それでも家族でも知り合いでもないあの小さな女の子を巻き込むのはどうかと思う。

無口で自分の意思を通すのが苦手そうなあの子を見てると本当に無理やり連れてきたんじゃないかと思ってしまう。

「本当に変わってないのな」

それだけはなんだか安心した。安心してしまった。他人を巻き込む豪傑さ。自分勝手すぎる理屈。何もかもが変わらない。

ただ、変わらないからこそ不安も感じていた。

六年間の歳月を重ねてもまだ、『魔法』なんてものを追い求めているのだろうか。

親がどうして『魔法』なんて今の時代幼稚園児でさえ夢の候補にも上げない非現実オカルトに手を出したのか分からない。非現実を武器にして戦っている青鬼家の人間が言うにはあまりにも馬鹿らしいが、さすがに『魔法』だけは信じるわけにはいかない。

「久しく会ったっていうのにお前は相変わらずきついな」

その言葉も変わらない、六年前から。

いくら年月が経っていても親はやはり親なんだ。

「変わっていないのはそつちもだろ？」

振り向かずに答えると修行堂の扉を開けて肖一が入ってきた。久しぶりに帰ってきた肖一にとって、この青鬼家の修行堂の中も珍しく懐かしいのか、堂内を見回しながら彰に近づいてきた。

「埃一つなしか。相変わらずのきれいな好きなのか、それとも几帳面なのか。どちらにせよ瞬鬼の清掃能力は世界一か」

青鬼家の本家には春と瞬鬼の二人だけしか住んでいないためにほとんどの家事などは瞬鬼が行っている。はっきり言ってこの家の全ての家事をこなすだけで凄いなと思うのだが、その全ての家事を完璧にこなしてしまう瞬鬼に感心する前に、呆れさえる。

「まあここはたまにしか使わないから瞬鬼もあまり掃除に来ないけど」

「そうか……」

肖一は何かを考え込むように一度だけ息を吸うと、

「……あの子のことなんだがな」

真剣な瞳で語り始めた。それを見て彰は何だか気押しされてしまい黙りこくってしまう。

「私と秋は意外にも本気だ」

「何が？」意味が分からないと言ったように彰が呟いた言葉が肖一の耳に届いたのか届いていないのかわからないほどの妙な間が開くと、肖一は言った。

「……、まあ、なんだ。養子という奴なのか、つまりは彼女を君の妹にしてやりたい」

長らくの間会っていなかった親父殿はそう言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7078g/>

死霊はおよめさん

2010年10月13日13時31分発行